

## 基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	学部の設置							
フリガナ設置者	ガッコウホクケン カイガクエン 学校法人 金井学園							
フリガナ大学の名称	フクイキョウギダイガク 福井工業大学（Fukui University of Technology）							
大学本部の位置	福井県福井市学園3丁目6番1号							
大学の目的	<p>本学は、本学園の建学の精神に基づいた、質実剛健な気風と愛国心の涵養に努め、人格円満にして徳性の高い社会人を育成するとともに、教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、高い教養と工学に関する高度な専門知識・技術を身に付けた人材を養成することを使命とし、教育研究活動を通じて地域社会の発展に寄与するとともに、広く人類社会の福祉に貢献することを目的とする。</p>							
新設学部等の目的	<p>環境情報学部は、社会のあらゆる場合において用いられる情報、デザイン及び環境に関する教育研究を通じ、幅広い分野で活躍できる創造性豊かな人材を養成する。</p> <p>（環境・食品科学科） 化学・生物学の基礎から環境・食品の専門に至る体系化された教育とこれらに関する最先端研究を通して、氾濫する様々な情報に惑わされることなく、多角的な視点と深い洞察力で環境や食品に関連する重要課題の解決・改善に取り組むことができる幅広い科学技術の知識と応用力、豊かな創造性、揺るぎない倫理観を身に付けた人材を養成する。</p> <p>（経営情報学科） マネジメントに関する資源（ヒト、モノ、カネ、情報）を総合的にとらえ、企業活動や公共社会に関する基本的知識・技術を体系的・科学的に理解・習得し、また、情報通信技術に関する最新の知識・技術を備え、システム開発プロジェクトの一員として高度情報社会に貢献できる、高い倫理観を備えた経営情報分野の人材を養成する。</p> <p>（デザイン学科） 住宅及びインテリアのデザインを軸とした環境デザイン、工業製品のデザインを軸としたプロダクトデザイン、グラフィック・映像・CG・WEBなどを軸とした情報デザインに関する専門教育の実践、工学と芸術の融合を目指す作品の制作や研究活動、デザインの発想を活用した商品企画や社会貢献を通して、美しく快適で持続可能な生活環境の創造に携わるデザイナーやデザインに関わる人材を養成する。</p>							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	環境情報学部 (Faculty of Environmental and Information Sciences)	年	人	年次人	人		年 月 第 年次	福井県福井市学園 3丁目6番1号  同上  同上
	環境・食品科学科 (Department of Environmental and Food Sciences)	4	50	—	200	学士 (環境科学)	平成27年4月 第1年次	
	経営情報学科 (Department of Management and Information Sciences)	4	80	—	320	学士 (経営情報学)	平成27年4月 第1年次	
	デザイン学科 (Department of Design)	4	50	—	200	学士 (デザイン学)	平成27年4月 第1年次	
計		180	—	720				

同一設置者内における 変 更 状 況 (定員の移行, 名称の 変 更 等 )	<p>福井工業大学</p> <p>入学定員変更</p> <p>工学部 機械工学科〔定員減〕 (△20)</p> <p>建築生活環境学科〔定員減〕 (△5)</p> <p>原子力技術応用工学科〔定員増〕 ( 5)</p> <p>工学部 電気電子情報工学科 (2年次編入定員) (廃止) (△3)</p> <p>(3年次編入定員) (廃止) (△3)</p> <p>機械工学科 (2年次編入定員) (廃止) (△3)</p> <p>(3年次編入定員) (廃止) (△3)</p> <p>建築生活環境学科 (2年次編入定員) (廃止) (△3)</p> <p>(3年次編入定員) (廃止) (△3)</p> <p>原子力技術応用工学科 (2年次編入定員) (廃止) (△2)</p> <p>(3年次編入定員) (廃止) (△2)</p> <p>※ (2年次編入学定員は平成28年4月学生募集停止)</p> <p>(3年次編入学定員は平成29年4月学生募集停止)</p> <p>名称変更</p> <p>平成27年4月名称変更予定</p> <p>工学部 電気電子情報工学科 → 電気電子工学科</p> <p>平成27年7月名称変更予定</p> <p>工学部 建築生活環境学科 → 建築土木工学科</p> <p>学科の廃止</p> <p>工学部 環境生命化学科 (廃止) (△45)</p> <p>(2年次編入学定員) (△2)</p> <p>(3年次編入学定員) (△2)</p> <p>経営情報学科 (廃止) (△65)</p> <p>(2年次編入学定員) (△3)</p> <p>(3年次編入学定員) (△3)</p> <p>デザイン学科 (廃止) (△60)</p> <p>(2年次編入学定員) (△2)</p> <p>(3年次編入学定員) (△2)</p> <p>産業ビジネス学科 (廃止) (△60)</p> <p>(2年次編入学定員) (△2)</p> <p>(3年次編入学定員) (△2)</p> <p>※平成27年4月学生募集停止</p> <p>(2年次編入学定員は平成28年4月学生募集停止)</p> <p>(3年次編入学定員は平成29年4月学生募集停止)</p> <p>学部の新設</p> <p>スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 (70) (平成26年5月認可申請)</p>								
	教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
		講義	演習	実験・実習	計				
	環境情報学部 環境・食品科学科	56 科目	50 科目	6 科目	112 科目	124 単位			
	環境情報学部 経営情報学科	77 科目	45 科目	6 科目	128 科目	124 単位			
	環境情報学部 デザイン学科	63 科目	59 科目	18 科目	140 科目	124 単位			
教 員 組 の 設 分 要	学部等の名称		専任教員等					兼任 教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	既	環境情報学部 環境食品科学科	6 (6)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	12 (11)
		経営情報学科	4 (4)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	12 (11)
		デザイン学科	6 (6)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	22 (21)
		計	16 (16)	10 (10)	4 (4)	0 (0)	30 (30)	0 (0)	46 (43)
	設 分	工学部 電気電子工学科	8 (8)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	17 (17)
		機械工学科	5 (5)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	15 (15)
		建築土木工学科	9 (9)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	14 (14)
		原子力技術応用工学科	8 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	9 (9)
		スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科	7 (5)	1 (1)	4 (4)	0 (0)	12 (10)	0 (0)	21 (10)
		その他 (基盤教育機構)	3 (3)	2 (2)	1 (1)	7 (7)	13 (13)	0 (0)	- (-)
		計	40 (38)	9 (9)	9 (9)	7 (7)	65 (63)	0 (0)	76 (65)
合 計		57 (55)	19 (19)	13 (13)	7 (7)	95 (93)	0 (0)	122 (108)	

平成26年5月名  
称変更届出予定

平成26年7月名  
称変更届出予定

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計		大学全体			
	事 務 職 員		75 (75) 人	0 (0) 人	75 (75) 人					
	技 術 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)					
	図 書 館 専 門 職 員		6 (6)	0 (0)	6 (6)					
	そ の 他 の 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)					
	計		81 (81)	0 (0)	81 (81)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計		借用面積： 68,608㎡ 借用期間：20年 大学全体			
	校 舎 敷 地	86,863 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	86,863 ㎡					
	運 動 場 用 地	135,541 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	135,541 ㎡					
	小 計	222,404 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	222,404 ㎡					
	そ の 他	93,063 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	93,063 ㎡					
合 計	315,467 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	315,467 ㎡						
校 舎	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計		大学全体				
	46,177 ㎡ ( 47,769 ㎡)	0 ㎡ ( 0 ㎡)	0 ㎡ ( 0 ㎡)	46,177 ㎡ ( 47,769 ㎡)						
教 室 等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設		大学全体			
	63 室	27 室	96 室	7 室 (補助職員 0 人)	2 室 (補助職員 0 人)					
専 任 教 員 研 究 室	新設学部等の名称			室 数			大学全体			
	環境情報学部 環境・食品科学科			10 室						
	経営情報学科			10 室						
	デザイン学科			10 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体共用： 図書 71,585冊		
	環境情報学部 環境・食品科学科	79,598 [2,313] (79,566 [2,311])	26 [ 0 ] ( 26 [ 0 ])	0 [ 0 ] ( 0 [ 0 ])	87 ( 87 )	29 ( 19 )	0 ( 0 )			
	環境情報学部 経営情報学科	76,726 [ 532 ] (76,695 [ 532 ])	18 [ 0 ] ( 18 [ 0 ])	0 [ 0 ] ( 0 [ 0 ])	141 (141)	6 ( 6 )	0 ( 0 )			
	環境情報学部 デザイン学科	74,732 [ 616 ] 74,732 [ 616 ]	14 [ 5 ] ( 14 [ 5 ])	0 [ 0 ] ( 0 [ 0 ])	55 ( 55 )	9 ( 3 )	0 ( 0 )			
	計	231,056 [3,461] (230,993 [3,459])	58 [ 5 ] ( 58 [ 5 ])	0 [ 0 ] ( 0 [ 0 ])	283 (283)	44 ( 28 )	0 ( 0 )			
図 書 館	面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数			大学全体		
	1,563 ㎡		290		163,556					
体 育 館	面積		体育館以外のスポーツ施設の概要					大学全体		
	2,713 ㎡		柔 道 ・ 剣 道 場 トレーニングセンター							
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	学部全体	
		教員1人当り研究費等		114千円	114千円	114千円	114千円	- 千円		- 千円
		共同研究費等		1,320千円	1,320千円	1,320千円	1,320千円	- 千円		- 千円
		図書購入費	0千円	150千円	300千円	450千円	600千円	- 千円		- 千円
	設備購入費	42,892千円	4,377千円	4,798千円	3,595千円	3,581千円	- 千円	- 千円		
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
		1,530千円	1,280千円	1,280千円	1,280千円	- 千円	- 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要		私立大学等経常費補助金、資金運用収入、雑収入等								

既設大学等の状況	大学の名称	福井工業大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
		年	人	年次人	人		倍		
	工学部	4	500	2年次 20 2年次 20	2004	学士（工学）	0.99	昭和40年度	福井県福井市学園3丁目6番1号
	電気電子情報工学科	4	80	2年次 3 3年次 3	365	学士（工学）	0.85	昭和40年度	同上
	機械工学科	4	100	2年次 3 3年次 3	415	学士（工学）	0.93	昭和40年度	同上
	建築生活環境学科	4	65	2年次 3 3年次 3	204	学士（工学）	0.95	平成24年度	同上
	建築学科	4	-	-	-	学士（工学）	-	平成21年度	同上
	土木環境工学科	4	-	-	-	学士（工学）	-	平成21年度	同上
	原子力技術応用工学科	4	25	2年次 2 3年次 2	105	学士（工学）	0.78	平成17年度	同上
	環境生命化学科	4	45	2年次 2 3年次 2	185	学士（工学）	1.16	昭和48年度	同上
	経営情報学科	4	65	2年次 3 3年次 3	265	学士（工学）	1.19	昭和62年度	同上
	デザイン学科	4	60	2年次 2 3年次 2	245	学士（工学）	0.82	平成21年度	同上
産業ビジネス学科	4	60	2年次 2 3年次 2	220	学士（工学）	1.27	平成23年度	同上	
大学の名称	福井工業大学大学院								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
工学研究科博士前期課程	2	25	-	50	修士（工学）	0.72	昭和60年度	福井県福井市学園3丁目6番1号	
応用理工学専攻	2	17	-	34	修士（工学）	0.67	平成24年度	同上	
社会システム学専攻	2	8	-	16	修士（工学）	0.81	平成24年度	同上	
工学研究科博士後期課程	3	6	-	18	博士（工学）	0.05	平成2年度	同上	
応用理工学専攻	3	4	-	12	博士（工学）	0.08	平成24年度	同上	
社会システム学専攻	3	2	-	6	博士（工学）	0.00	平成24年度	同上	
附属施設の概要	該当なし								

平成24年度より  
学生募集停止

平成24年度より  
学生募集停止

別記様式第2号 (その2の1)

教 育 課 程 等 の 概 要																
(環境情報学部 環境・食品科学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
人文社会	A群	哲学入門-人生哲学	1前	2		○								兼1		
		心理学入門-心のはたらき	1前	2		○								兼1		
		女性学入門-女性の生き方論	1後	2		○								兼1		
		コミュニケーション論	1後	2		○								兼1		
	B群	人と社会	2後	2		○								兼1		
		法学入門-市民社会と法	2後	2		○								兼1		
		日本国憲法	2前	2		○								兼2		
		経済学入門-現代社会と経済	2前	2		○								兼2		
	C群	マスコミ論-新聞を読み解く力	3後	2		○								兼1		
		日本文化の歴史	3前	2		○								兼1		
		比較文化論-世界の文化	3前	2		○								兼1		
		文学入門-小説・詩の世界	3後	2		○								兼1		
	小計 (12科目)	—	0	24	0	—			0	0	0	0	0	兼11		
全学共通	教養分野科目	外国語		ベーシックコミュニケーションI	1前	1			○						兼2	
				ベーシックコミュニケーションII	1後	1			○							兼2
				アドバンストコミュニケーションI	2前	1			○							兼2
				アドバンストコミュニケーションII	2後	1			○							兼2
				テクニカルコミュニケーションI	3前		2		○							兼2
				テクニカルコミュニケーションII	3後		2		○							兼2
				テクニカルコミュニケーションIII	4前		2		○							兼2
				テクニカルコミュニケーションIV	4後		2		○							兼2
				ビジネスコミュニケーションI	3前		2		○							兼2
				ビジネスコミュニケーションII	3後		2		○							兼2
				ビジネスコミュニケーションIII	4前		2		○							兼2
				ビジネスコミュニケーションIV	4後		2		○							兼2
				リスニングI	1前	1			○							兼4
				リスニングII	1後	1			○							兼4
				TOEIC I	2前	2			○							兼2
				TOEIC II	2後	2			○							兼2
				TOEIC III	3前		2		○							兼2
				TOEIC IV	3後		2		○							兼2
	海外語学研修I	1前・後		4		○							集中、兼1			
	海外語学研修II	2前・後		4		○							集中、兼1			
	海外語学研修III	3前・後		4		○							集中、兼1			
	海外語学研修IV	4前・後		4		○							集中、兼1			
	小計 (22科目)	—	10	36	0	—			0	0	0	0	0	兼4		
全学共通	教養分野科目	キャリア形成		日本語の基礎	1前		2		○						兼1	
				日本語表現法I	1後	2			○						兼1	
				日本語表現法II	2前		2		○						兼1	
				キャリアデザインI	2前	1			○			1				
				キャリアデザインII	2後	1			○			1				
				キャリアアゼミI	1前	1			○		4	2	1			
				キャリアアゼミII	1後	1			○		4	2	1			
				キャリアアゼミIII	3前	1			○		4	2	1			
				キャリアアゼミIV	3後	1			○		4	2	1			
				インターシッパA	3前		2		○			1				
				インターシッパB	3後		2		○			1				
				小計 (16科目)	—	14	10	0	—			4	2	1	0	0
全学共通	教養分野科目	キャリア形成		地域共生学	2前		2		○							
				テクニカルライティング	1後	1			○			1				
				プレゼンテーション	1後	1			○			1				
				課題研究	2前	2			○		4	2	1			
				コンピュータリテラシ	1前	2			○			1				
	小計 (16科目)	—	14	10	0	—			4	2	1	0	0	兼1		

学部共通	教養分野科目	科学基礎	基礎数学	A	1前・後	2		○								兼3		
			基礎数学	B	1前	2		○									兼2	
			基礎数学	AB	1後	2		○									兼1	
			基礎積分		1後	2		○			2						兼3	
			基礎物理		1前	2		○									兼6	
			基礎生物		1前	2		○				1						
			基礎化学		1前	2		○						1				
			基礎生命科学		1後	2		○			1							
			基礎統計		1後	2		○			1							兼1
			基礎統計		2前	2		○										兼2
			基礎統計		2後	2		○		○								
小計 (11科目)				—	0	22	0	—	3	1	1	0	0		兼12			



専門分野科目	専門応用科目	資源リサイクル工学	3後		2		○			1						
		高分子化学	3後		2		○			1						
		環境・食品科学実験Ⅲ	3前	2						2	1					共同
		環境・食品科学実験Ⅳ	3後	2					○	5	3	1				共同
		工学英語演習Ⅲ	3前		2			○		1						
		工学英語演習Ⅳ	3後		2		○		1							
		小計(18科目)	—	16	20	0	—	—	6	3	1	0	0		兼0	
専門分野科目	全学共通科目	卒業研究	4通	6				○		5	3	1				
		小計(1科目)	—	6	0	0	—	—	5	3	1	0	0		兼0	
合計(112科目)			—	72	148	0	—	—	6	3	1	0	0		兼35	
学位又は称号		学士(環境科学)		学位又は学位の分野				工学関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等									
教養分野科目から必修科目24単位を含む48単位以上、専門分野科目から必修科目48単位を含む76単位以上を含めて、合計124単位以上修得すること。							1学年の学期区分				2期					
							1学期の授業期間				15週					
							1時限の授業時間				90分					

別記様式第2号（その2の1）

教 育 課 程 等 の 概 要																
(環境情報学部 経営情報学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
人文社会	A群	哲学入門-人生哲学	1前	2		○								兼1		
		心理学入門-心のはたらき	1前	2		○								兼1		
		女性学入門-女性の生き方論	1後	2		○								兼1		
		コミュニケーション論	1後	2		○								兼1		
	B群	人と社会	2後	2		○								兼1		
		法学入門-市民社会と法	2後	2		○								兼1		
		日本国憲法	2前	2		○								兼1		
		経済学入門-現代社会と経済	2前	2		○								兼1		
	C群	マスコミ論-新聞を読み解く力	3前	2		○								兼1		
		日本文化の歴史	3後	2		○								兼1		
		比較文化論-世界の文化	3後	2		○								兼1		
		文学入門-小説・詩の世界	3後	2		○								兼1		
	小計 (12科目)	—	0	24	0	—			0	0	0	0	0	兼11		
全学共通	教養分野科目	外国語		ベーシックコミュニケーションI	1前	1			○						兼2	
				ベーシックコミュニケーションII	1後	1			○						兼2	
				アドバンストコミュニケーションI	2前	1			○						兼2	
				アドバンストコミュニケーションII	2後	1			○						兼2	
				テクニカルコミュニケーションI	3前		2			○						兼2
				テクニカルコミュニケーションII	3後		2			○						兼2
				テクニカルコミュニケーションIII	4前		2			○						兼2
				テクニカルコミュニケーションIV	4後		2			○						兼2
				ビジネスコミュニケーションI	3前		2			○						兼2
				ビジネスコミュニケーションII	3後		2			○						兼2
				ビジネスコミュニケーションIII	4前		2			○						兼2
				ビジネスコミュニケーションIV	4後		2			○						兼2
				リスニングI	1前	1				○						兼4
				リスニングII	1後	1				○						兼4
				TOEIC I	2前	2				○						兼2
				TOEIC II	2後	2				○						兼2
				TOEIC III	3前		2			○						兼2
				TOEIC IV	3後		2			○						兼2
				海外語学研修I	1前・後		4			○						集中、兼1
				海外語学研修II	2前・後		4			○						集中、兼1
	海外語学研修III	3前・後		4			○						集中、兼1			
	海外語学研修IV	4前・後		4			○						集中、兼1			
	小計 (22科目)	—	10	36	0	—			0	0	0	0	0	兼4		
全学共通	教養分野科目	キャリア形成		日本語の基礎	1前		2		○						兼1	
				日本語表現法I	1後	2			○						兼1	
				日本語表現法II	2前		2			○					兼1	
				キャリアデザインI	2前	1				○			1			
				キャリアデザインII	2後	1				○			1			
				キャリアアゼミI	1前	1				○		3	1			
				キャリアアゼミII	1後	1				○		3	1			
				キャリアアゼミIII	3前	1				○		1	3	2		
				キャリアアゼミIV	3後	1				○		1	3	2		
				インターシッパA	3前		2			○		1				
				インターシッパB	3後		2			○		1				
				小計 (16科目)	—	14	10	0	—			4	4	2	0	0
全学共通	教養分野科目	キャリア形成		地域共生学	2後		2		○							
				テクニカルライティング	1後	1				○		4	4	2		
				プレゼンテーション	1後	1					○		4	4	2	
				課題研究	2前	2					○		4	4	2	
				コンピュータリテラシ	1前	2					○		4	4	2	
	小計 (16科目)	—	14	10	0	—			4	4	2	0	0	兼1		

学部共通	教養分野科目	科学基礎	基礎	数学	A	1前・後		2		○			1					兼3		
			基礎	数学	B	1前		2		○									兼1	
			基礎	数学	AB	1後		2		○									兼1	
			基礎	積分	ラ	1後		2		○				1					兼1	
			基礎	物理	シ	1前		2		○				2	1				兼6	
			基礎	生物	学	1前		2		○									兼1	
			基礎	化学	学	1前		2		○									兼1	
			基礎	生命	学	1後		2		○									兼1	
			基礎	統計	学	1後		2		○									兼1	
			基礎	統計	学	2前		2		○				1						兼1
			基礎	統計	学	2後		2		○		○								兼1
小計 (11科目)					—		0	22	0	—		2	1	1	0	0	兼14			

別記様式第2号（その2の1）

教 育 課 程 等 の 概 要															
(環境情報学部 経営情報学科)															
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
学部 共通科目	環境情報学概論	1前	2			○			1	1					eムバース、兼9 兼1 兼1 兼1
	環境・情報倫理	1後	2			○				1					
	知的財産概論Ⅰ	2前		1		○									
	知的財産概論Ⅱ	2前		1		○									
	社会調査論	2後		2		○			1						
	環境情報学演習基礎	2後	2				○		4	4	2				
	環境情報学演習Ⅰ	3前		2			○		4	4	2				
	環境情報学演習Ⅱ	3後		2			○		5	4	2			兼1	
	環境情報学演習Ⅲ	4前		2			○		4	4	2				
小計(9科目)	—		6	10	0	—			4	4	2	0	0	兼11	
専門 基礎科目	経営情報学概論	1前		2		○				1					
	ビジネスシミュレーション	1後		2		○			1						
	簿記原理Ⅰ	1前		2		○				1	1				
	簿記原理Ⅱ	1後		2		○				1	1				
	政策システム概論Ⅰ	1前		2		○				1	2				
	政策システム概論Ⅱ	1後		2		○				1	2				
	情報数学	1前		2		○				1					
	情報処理概論	1後		2		○			1						
	プログラミング実習Ⅰ	1前	2					○		2					
	プログラミング実習Ⅱ	1後	2					○		2					
ハードウェア概論	1後		2		○			1							
小計(11科目)	—		4	18	0	—			3	4	2	0	0	兼0	
専門 分野科目	マーケティングⅠ	2前		2		○					1				兼1 兼1
	マーケティングⅡ	2後		2		○					1				
	プレゼンテーション技法	2前		2		○			1	1					
	ネットワークシステム論	2前		2		○								兼1	
	経営情報処理Ⅰ	2前		2			○		1						
	情報セキュリティⅠ	2後		2		○								兼1	
	経営情報処理Ⅱ	2後		2			○		1						
	生産管理工学	2後		2		○			1						
	データベース論Ⅰ	2後		2		○				1					
	上級簿記Ⅰ	2前		2		○				1					
	上級簿記Ⅱ	2後		2		○				1					
	原価計算Ⅰ	2前		2		○					1				
	ファイナンスⅠ	2前		2		○				1					
	ファイナンスⅡ	2後		2		○				1					
	経済工学Ⅰ	2前		2		○				1					
	経済工学Ⅱ	2後		2		○				1					
	環境科学	2前		2		○								兼1	
	地域計画	2後		2		○								兼1	
	プログラミング実習Ⅲ	2前		2				○		1					
	プログラミング実習Ⅳ	2後		2				○		1					
データ構造とアルゴリズム	2前		2		○			1							
プログラム言語と処理	2後		2		○				1						
コンピュータアーキテクチャ	2後		2		○				1						
オペレーションズリサーチⅠ	3前		2		○			1							
オペレーションズリサーチⅡ	3後		2		○			1							
ビジネスプランニング	3前		2		○			1							

専門分野科目	専門応用科目	データベース論 II	3前	2		○				1							
		リクマネジメン	3後	2		○				1							
		管理会計	3前	2		○						1					
		財務会計	3後	2		○							1				
		企業業論	3前	2		○				1							
		労務管理論	3後	2		○				1							
		ロジステイクス I	3前	2		○							1				
		ロジステイクス II	3後	2		○							1				
		産業連関分析	3前	2		○				1							兼1
		交用便益分画	3後	2		○						1					兼1
		費源リサイクル工学	3後	2		○											兼1
		メデイア論	3後	2		○											兼1
		画像情報処理論	3前	2		○				1							
		UMLモデリング	3後	2		○				1							
		ソフトウエア開発 I	3前	2					○		1						
		ソフトウエア開発 II	3後	2					○		1						
情報と職業論	4前	2				○				1							
地域産業工学	4前	2				○					1						
システム工学	4前	2				○			1								
小計 (46科目)			—	0	92	0	—		4	4	2	0	0		兼5		
全学共通科目	卒業研究		4通	6			○		4	4	2						
	小計 (1科目)			—	6	0	0	—	4	4	2	0	0		兼0		
合計 (128科目)			—	36	214	0	—		4	4	2	0	0		—		
学位又は称号		学士 (経営情報学)		学位又は学位の分野				工学関係									
卒業要件及び履修方法							授業期間等										
教養分野科目から必修科目24単位を含む48単位以上、専門分野科目から必修科目14単位を含む76単位以上を含めて、合計124単位以上修得すること。							1学年の学期区分			2期							
							1学期の授業期間			15週							
							1時限の授業時間			90分							

別記様式第2号 (その2の1)

教 育 課 程 等 の 概 要																
(環境情報学部 デザイン学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手			
人文社会	A群	哲学入門-人生哲学	1前	2		○									兼1	
		心理学入門-心のはたらき	1前	2		○									兼1	
		女性学入門-女性の生き方論	1後	2		○									兼1	
		コミュニケーション論	1後	2		○									兼1	
	B群	人と社会	2前	2		○									兼1	
		法学入門-市民社会と法	2前	2		○									兼1	
		日本国憲法	2後	2		○									兼1	
		経済学入門-現代社会と経済	2後	2		○									兼2	
	C群	マスコミ論-新聞を読み解く力	3後	2		○									兼1	
		日本文化の歴史	3後	2		○									兼1	
		比較文化論-世界の文化	3後	2		○									兼1	
		文学入門-小説・詩の世界	3前	2		○									兼1	
	小計 (12科目)	—	0	24	0	—			0	0	0	0	0	兼11		
全学共通	教養分野科目	外国語	ベーシックコミュニケーションI	1前	1		○								兼2	
			ベーシックコミュニケーションII	1後	1		○								兼2	
			アドバンスコミュニケーションI	2前	1		○								兼2	
			アドバンスコミュニケーションII	2後	1		○								兼2	
			テクニカルコミュニケーションI	3前	2		○								兼2	
			テクニカルコミュニケーションII	3後	2		○								兼2	
			テクニカルコミュニケーションIII	4前	2		○								兼2	
			テクニカルコミュニケーションIV	4後	2		○								兼2	
			ビジネスコミュニケーションI	3前	2		○								兼2	
			ビジネスコミュニケーションII	3後	2		○								兼2	
			ビジネスコミュニケーションIII	4前	2		○								兼2	
			ビジネスコミュニケーションIV	4後	2		○								兼2	
			リスニングI	1前	1		○									兼4
			リスニングII	1後	1		○									兼4
			TOEIC I	2前	2		○									兼2
			TOEIC II	2後	2		○									兼2
			TOEIC III	3前	2		○									兼2
			TOEIC IV	3後	2		○									兼2
海外語学研修I	1前・後	4		○									集中、兼1			
海外語学研修II	2前・後	4		○									集中、兼1			
海外語学研修III	3前・後	4		○									集中、兼1			
海外語学研修IV	4前・後	4		○									集中、兼1			
	小計 (22科目)	—	10	36	0	—			0	0	0	0	0	兼4		
全学共通	教養分野科目	キャリア形成	日本語の基礎	1前	2		○									
			日本語表現法I	1後	2		○									
			日本語表現法II	2前	2		○									
			キャリアデザインI	2前	1		○				1					
			キャリアデザインII	2後	1		○				1					
			キャリアアゼミI	1前	1		○					3				
			キャリアアゼミII	1後	1		○					3				
			キャリアアゼミIII	3前	1		○						3			
			キャリアアゼミIV	3後	1		○						3			
			インターシッパA	3前	2		○							1		
インターシッパB	3後	2		○							1					
全学共通	教養分野科目	キャリア形成	地域共生学	2後	2		○				1					
			テクニカルライティング	1後	1		○				1	2				
			プレゼンテーション	1後	1		○					2	1			
			課題研究	2前	2		○					3	3			
			コンピュータリテラシ	1前	2		○						1	1		
			小計 (16科目)	—	14	10	0	—			4	3	1			兼1

学部共通	教養分野科目	科学基礎	基礎数学 A	1前・後	2		○								兼4	
			基礎数学 B	1前	2		○								兼1	
			基礎数学 AB	1後	2		○					1				
			基礎積分学	1後	2		○					1				
			基礎物理学	1前	2		○			2						兼3
			基礎生物学	1前	2		○									兼6
			基礎化学	1前	2		○									兼1
			基礎生命科学	1後	2		○									兼1
			基礎統計学	1後	2		○									兼1
			基礎計学	2前	2		○									兼1
						2後	2		○							
小計 (11科目)				—	0	22	0	—		2	2	0	0	0	兼15	

別記様式第2号（その2の1）

教育課程等の概要																
(環境情報学部 デザイン学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学部共通科目	環境情報学概論	1前	2			○			3						オムニバス、兼8	
	環境・情報倫理	1後	2			○			1							
	知的財産概論Ⅰ	2前		1		○									兼1	
	知的財産概論Ⅱ	2前		1		○									兼1	
	社会調査論	2後		2		○									兼1	
	環境情報学演習基礎	2後	2				○		1	1					共同	
	環境情報学演習Ⅰ	3前		2			○			1					共同	
	環境情報学演習Ⅱ	3後		2			○			1					共同	
	環境情報学演習Ⅲ	4前		2			○			1					共同	
	小計(9科目)		—	6	10	0				3	1	0	0	0	兼10	
専門分野科目	専門基礎科目	造形デザイン実習Ⅰ	1前	3					○	2					共同、兼2	
		造形デザイン実習Ⅱ	1前	3					○	2					共同、兼2	
		デジタル表現基礎	1前	2				○			1				兼2	
		デザイン学概論	1前	1			○			4	3	1			オムニバス	
		作家作品論	1前	1			○			4	3	1			オムニバス	
		造形デザイン実習Ⅲ	1後	2						4	3	1			共同	
		環境デザイン実習Ⅰ	1後		4					1						
		プロダクトデザイン実習Ⅰ	1後		4					1	1				共同	
		グラフィックデザイン実習	1後		2							1			兼1	
		住環境計画演習	1後		2			○		1						
		CAD演習A	1後		2			○			1					
		造形技法Ⅰ	1後		1			○		1						
		造形技法Ⅱ	1後		1			○		1						
		情報デザイン	1後		1			○		1						
		基礎デザイン論	1後	1				○		2						
		生活空間論	1後	1				○		1						
		構造設計	1後		2			○				1				共同
		建築史	1後		2			○								兼1
		メデア工学概論	1後		1			○		1						
		環境デザイン実習Ⅱ	2前		4							1				
		プロダクトデザイン実習Ⅱ	2前		4						2					
		視覚情報デザイン実習Ⅰ	2前		2								1			兼1
		WebデザインⅠ	2前		2						1	1				兼1
		プログラミング実習Ⅰ	2前		2									○		兼2
		写真演習	2前		2				○				1			集中
		作品研究演習	2前		2				○		2					集中、共同
CAD演習B	2前		2				○		1							
家具制作演習	2前		2				○		1					集中		
作品研究	2前		2			○			2	3	1			オムニバス		
デザイン材料	2前		2			○			1							
発想論	2前		2			○			1							
建築計画論	2前		2			○				1						
構造力学Ⅰ	2前		2			○								兼2		
メデア情報技術Ⅰ	2前		2			○			1							
小計(34科目)		—	14	56	0				6	3	1	0	0	兼11		
専門応用科目	視覚情報デザイン実習Ⅱ	2後		4								1				
	WebデザインⅡ	2後		2							1				兼1	
	プログラミング実習Ⅱ	2後		2									○		兼2	
	デジタル表現技法	2後		2			○		1	1					兼1	
	インテリアデザイン論	2後		2			○		1							
デザイン史	2後		2			○		1								



授 業 科 目 の 概 要				
(環境情報学部 環境・食品科学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
教養分野科目	A群	哲学入門－人生哲学	人生哲学は、本来、人の善い生(行為)の基準としての善い生(行為)一般を明らかにし、それを基準にしてあらゆる善い生(行為)を明らかにするものである。また、その結果としての根本的な善い生(行為)一般についての考えも人生哲学と言われます。この意味での人生哲学は、実は、誰もが既に持っているものである。そして、これがその人の基本的な人生態度となって、その人のあらゆる生き方や行為についての考えや行動を規定する。そこで、この授業は、学生諸君が、様々な人生哲学の学習によって、自らの人生哲学を反省し検討し、よりよい人生哲学を持つようになることを目指す。	
		心理学入門－心のはたらき	心理学は、人間の認知・行動を科学的に実証しようと試みる学問として発展してきた。実験や研究から明らかにされた心理学の理論を学習することで、心理学の知見から得られた知識やスキルを日常生活の実践に生かすこと、社会や集団の現象を心理学の理論に基づいて理解・分析することを授業の目的とする。講義形式の授業とワークシート課題を実施することを通して、学生が自らの日常生活において「自分で考え行動すること」「自己を分析すること」が可能となることを目指す。	
		女性学入門－女性の生き方論	女性学は世界的な女性解放運動(第2次フェミニズム)の中で生まれた学問領域(歴史、文学、教育、法、経済、政治、社会など)で、「ジェンダー」(社会的・文化的な性)という視点から、私たちがあたり前だと思っている社会がどのように異なってみえるかを提示する学問である。今回の授業では生まれてから死ぬまでに遭遇する身近な出来事の中に潜む「ジェンダー問題」に気づくとともに、男女問わずすべての人にとって生きやすい社会とは何かについて考える。	
		コミュニケーション論	現代は社会の変化が大きく複雑化しているため、コミュニケーションをしていく上で様々なつまずきが生じやすい。コミュニケーションには対人的なもの、対物的なもの、さらには自分の内部で行われるものがある。人間のあらゆる活動がコミュニケーションと関係している。それは、これまで、日常生活の中で自然に身に付くものと考えられてきたが、意識的に学ぶことが必要な時代となった。具体的な問題と関連させながら、コミュニケーションとは何か、を考え、また、どうすればコミュニケーションが改善し、生きやすくなるかを考えていきたい。	
	B群	人と社会	人間は社会の中に生まれ、社会と関わりつつ自己を形成し、社会を生きる。人間としての自覚を深め、生の尊重を行為の原理として、自己実現を果たしながら生きるあり方を探求する。「社会的職業的自立」への覚醒として①社会的自立(家庭人としての自立、学生としての自立、市民としての自立、職業人としての自立、生涯学習社会の一員としての自立など)を取り扱う。②職業的自立について学生諸君の自覚を促すことを目的として取り扱う。	
		法学入門－市民社会と法	社会生活を営む上で、私達は、意識するとしないとを問わず、法的な関係に立ち入ることになる。日用品を買ったり、交通機関を利用したりする日常生活の活動も常に法的な側面をもっている。したがって、社会の中で生きる限り、法に対する正しい知識は、必要不可欠と云っても過言ではない。今後、社会の価値ある一員として生きる基盤形成に資するためにも、成人の教養として必要な法の基礎知識を身に付け、体内にリーガルマインドが醸成されていくための入門編とする。	
日本国憲法		日本国憲法について学習し、権利と責任、使命と義務を自覚する。また、憲法が現実の生活の中でどのように関係しているかを確かめながら自ら考える力を養い、国際社会に生きる日本人としての素養を身につける。		

教養分野科目	B群	経済学入門－現代社会と経済	現代はきわめて高度に発達した市場経済に委ねられています。マクロ経済学における経済の構図、基本的な経済原理、景気判断、市場、貨幣などの考え方を理解したうえで、現代社会における、人・物・金の動きを解明し、特に金融・外国為替・貿易・証券等現代社会特有の経済活動に関する知識を習得する。ひいては世界経済の動きを分析し、その中における日本経済の諸問題について自分で考えることができる力を養い、国際人としても活躍できる能力を身につけることを目的としている。	
		マスコミ論－新聞を読み解く力	多様化するメディア。この科目では新聞、雑誌など活字メディアを中心にマスコミなどメディアの変遷と役割を学ぶ。同時にタイムリーなニュース、話題を取り上げ、新聞を読む力と情報化社会を生きる実践力を身につけていく。学生と意見を交換しながら授業を進め、討論の場、コミュニケーションをはかる場にしていく。	
	C群	日本文化の歴史	建学の精神”悠久なる日本民族の歴史と伝統とに根ざした愛国心を培い”の精神にそって講義内容を構成する。本講座で取り上げる文化は、建築物や彫刻、絵画、文学などの「文化財・文化遺産」の歴史ではなく、現在の我々の生活や考え方の中に伝えられ生きている文化である。まず、日本人の生活の原点である「稲作」、我々の生活の基盤である「福井県」、活動の舞台である「福井工業大学の創立」について歴史的に学ぶ。また、日本文化の基本にある「中華思想」・「四神思想」・「神祇信仰」（白山信仰）・「晴と曇」・「仏教思想」など、歴史的な事象に基づき明らかにする。それらの学習から、自分の身の周りにある事物や習慣の全てが、歴史的に蓄積されてきた文化であることに気づき、郷土と国土に対する正しい理解と愛情を育てることを目標とする。	
		比較文化論－世界の文化	明治維新後、約140年間で日本は近代化を成し遂げ、経済・文化・科学などの諸分野で世界の中で枢要な地位を占めるまでになった。これを可能にしたのは、日本文化の伝統の力である。日本は中国を中心とする東アジア文化圏の中にありながら文化の独自性を守り、近代合理主義を受容する土台を築き上げていった。それ故に、近代西洋文明と接触するや否やそれを自家葉籠中の物にし、アジアで最も早く近代国家となることが出来ました。従って、ここでは日本文化の独自性と日本人の優れた資質を踏まえ、近代文化の根底をなす合理主義発生の土壌と歴史的展開を西洋の歴史と文化の中で見出そうとするものである。	
		文学入門－小説・詩の世界	近代から現代に至るまでに多くの作家が登場し、それぞれの作品を世に問うてきた。そして、それらの作品は、その時代に生きる人々に大きな夢や希望を与え、生きる指針を示してきた。小説や詩歌など、いわゆる言語芸術（文学作品）は、それが書かれた時代の「人間の在り方、生き方」と強く結びつき、不可分の関係にある。本授業では、そうした作家や作品が持つ時代性と芸術性（文学性）を探ることを中心に学習し、ひいては私たちの生き方、時代との関わり方をも見直し、文学作品の持つ意味を確かめたい。	
	外国語	ベーシックコミュニケーションⅠ	グローバル化が進む現代社会においては、大都市だけではなく地方都市においても外国人と接する機会は今後増えるであろう。この授業では自己紹介・出会い・家族・日常の行動・衣類・買い物など身近な題材をもとに日常英会話に必要な基本的な語彙・表現方法を学ぶ。日常生活を軸に身近な英語表現に慣れ親しむことで、初めは単語レベルでも構わないので、間違いを犯すことを恐れることなく、臆せずに積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	
ベーシックコミュニケーションⅡ		ベーシックコミュニケーションⅠに引き続き、趣味・食事・スポーツ・家・過去の行動・目標と夢など身近な題材をもとに基本的な語彙・表現方法を学ぶ。ペアワークやグループワークなどの言語活動を通して、聴く力・話す力・考える力を身につける。また外国人講師とのディスカッションを通して英語を道具として自分の考えや意見を他者に伝える能力を養うことにより、社会の一員として他者との関わりを円滑に進めるためのコミュニケーション能力の向上を図る。		

教養分野科目 外国語	アドバンストコミュニケーションⅠ	現代のグローバル化社会においては外国はもはや遠い存在ではない。とりわけ海外旅行を通じて、異文化に触れる機会を得ることは高いハードルではない。この授業ではイギリス、ニュージーランド、タイ、アイルランドへ出向く日本人とアメリカ人の旅行記を通じて、旅先での様々な場面における英会話表現を学ぶ。言葉に不自由することなく、海外旅行を楽しめる英語力を習得し、さらに英語を通じて外国の事情や異文化について興味・関心を持つとともにそれらに対する理解を深めることを目的とする。	
	アドバンストコミュニケーションⅡ	観光を目的とした数日間の海外旅行だけではなく、在学中に海外語学研修に参加したり、卒業後に長期の海外留学を経験することにより、英語コミュニケーション能力を向上させることに加えて、より視野の広い国際感覚を身につけることが可能となる。この授業では海外に滞在・留学する際に必要な会話表現を学ぶことにより、ひいては外国の人々の暮らし、文化や世界の出来事にも目を向け、国際的な視野の拡大を図り、多様な考え方を持つ人と交わろうとする態度を養う。	
	テクニカルコミュニケーションⅠ	ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ及びアドバンストコミュニケーションⅠ・Ⅱで学んだ一般的な英語コミュニケーション能力を基盤として、科学技術英語に関する初歩的な知識の習得とその知識を背景としたより専門的な英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器に関する問題の特定、調査及び説明の仕方を学ぶことと、職場で一般的に見られる英語の標識を理解するとともに、材料、道具、機器等を英語で表現できるようにすることである。	
	テクニカルコミュニケーションⅡ	工学・科学技術等の専門分野における英語コミュニケーション能力を高めるための必要不可欠な要素の一つが一般的な英会話では学ぶことのない専門用語を習得することである。この授業では科学技術英語に関する基本的な知識と専門用語の習得を目指し、工学・科学技術分野における英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器の使用方法や機能について英語で説明する表現を学び、また基本的な計算や数値、統計などに関する表現方法を学習する。	
	テクニカルコミュニケーションⅢ	日本国内の中小企業であっても開発した製品や技術を海外に輸出するなど、海外企業との関わりを切り離して考えることはできない。取引相手がタイやベトナム、インドネシアなど東南アジアの新興国の企業であったとしても、共通の言語となるのは英語である。この授業では海外企業との取引を念頭に科学技術英語に関する応用知識の習得と専門知識を基盤とした英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器の操作や修理方法、使用説明書などを英語で説明する能力を養う。	
	テクニカルコミュニケーションⅣ	日本国内の中小企業であっても東アジア・東南アジアなどを中心に海外企業と提携を結んだり海外に支社を設立している企業は少なくない。このような状況下では技術者であっても海外に赴任して仕事をやる機会はあるといえる。この授業では科学技術英語に関する発展的知識を習得することにより英語コミュニケーション能力を兼ね備えた国際的に活躍できる中堅技術者の養成を目的とする。具体的な内容としては、ロジスティックスやリサイクルの手順に関して技術面を中心に議論する。	
	ビジネスコミュニケーションⅠ	ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ及びアドバンストコミュニケーションⅠ・Ⅱで学んだ一般的な英語コミュニケーション能力を基盤として、ビジネス分野における基本的な英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、海外出張、国際的な展示会への参加、アポイントメントの取り方など、具体的なビジネスシーンを想定した教材を用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、基本的な語彙や口語表現の修得を目指す。	
	ビジネスコミュニケーションⅡ	ビジネスの現場で円滑に英語でコミュニケーションが取れるようになるためには、ビジネス分野で必須の語彙の習得が不可欠となる。この授業ではビジネス・コミュニケーションⅠに引き続き、国際的なビジネスの場で必要とされる英語コミュニケーション能力を養成する。具体的な内容としては、実際のビジネスシーンを想定した教材を用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、ビジネス分野に関する基本的な語彙や口語表現の修得を目指す。	

教養分野科目	外国語	ビジネスコミュニケーションⅢ	日本国内の中小企業でも海外企業との取引を行っている企業は非常に多く、企業の貿易部門などでは英語を始め外国語の運用能力を備えた人材が不可欠である。この授業ではビジネスコミュニケーションⅡに引き続き、国際的なビジネスの場におけるより円滑な英語でのコミュニケーション能力の養成を目指す。具体的には、会社の紹介、取引先への訪問、商品の発注など、具体的なビジネスシーンを想定したテキストを用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、基本的語彙や口語表現の習得を目指す。	
		ビジネスコミュニケーションⅣ	日本国内の中小企業であっても東アジア・東南アジアなどを中心に海外企業と提携を結んだり海外に支社を設立している企業は少なくない。このような状況下では技術者であっても海外に赴任して仕事をする機会はあるといえる。この授業では科学技術英語に関する発展的知識を習得することにより英語コミュニケーション能力を兼ね備えた国際的に活躍できる中堅技術者の養成を目的とする。具体的な内容としては、ロジスティックスやリサイクルの手順に関してビジネスシーンを想定し議論する。	
		リスニングⅠ	オーラルコミュニケーションに必要な能力は言うまでもなくスピーキングとリスニングの能力である。この授業では人の名前や日付、物と物との位置関係を表す場所表現など英語圏で生活をする際に必要な基本的表現のリスニング能力を養成する。単語レベルのディクテーションによりリスニング能力の定着度の確認を行う。また英語の強弱アクセント及びイントネーションに慣れるために、ペアワークによる発音練習を多く取り入れ、担当教員による発音指導を行う。	
		リスニングⅡ	リスニングⅠに引き続き、毎回の授業でできるだけたくさんの英語を聞き取り、「英語耳」を作ることを目的とする。具体的には、買い物をする際に必要な金額の聞き取りや商品説明、道案内など、より発展的な内容のリスニング能力を養成する。フレーズレベルのディクテーションによりリスニング能力の定着度の確認を行う。またペアワークによる会話文の発音練習を多く取り入れ、ナチュラルスピードの会話に現れる英語特有の音に慣れることを目指す。	
		TOEICⅠ	日本の大学及び企業において学生や社員の英語コミュニケーション能力を測定するための英語資格試験としてTOEICが定着していることは否定できない。しかしながら、高等学校までは英語の資格試験としては依然として英検が主流となっているため、大学生の多くはTOEICの試験形式に慣れていない。この授業ではまずTOEICの試験形式を理解し、演習問題を解くことによりPart1～Part7までの各パートの出題形式に慣れることを目的とする。	
		TOEICⅡ	TOEIC試験はPart1～Part4までのリスニングセクションとPart5～Part7までのリーディングセクションに分かれているが、各パートともに出題される問題の難易度は前半部分が比較的易しく、後半になるにつれ次第に難易度が上がる。この授業ではTOEICのスコアを着実にアップさせることを目的とし、各パートの前半に出題される比較的難易度の易しい問題を確実に解けるようになるように、基本問題の演習を繰り返し行う。	
		TOEICⅢ	TOEICの試験形式に慣れ、各パート毎に難易度の易しい問題を確実に解ける力が付けば、さらなるスコアアップを目指すこととなる。その秘訣は繰り返し演習問題を解くことに加えて、各パートの難易度の高い問題を攻略するために出題のパターンを理解し、出題パターンに応じた解法を会得することである。特にリスニングセクションの各パートでは解法のポイントを押さえておくことは、飛躍的なスコアアップにつながる。この授業では出題パターンを瞬時に分析し、正確に解答できる力を身につける。	

教養分野科目	外国語	T O E I C I V	基礎的な英語力が備わり、毎回ある程度着実に一定レベルのTOEICのスコアを獲得できるようになった学生でも、100問あるリーディング問題を75分間で完問することは非常に難しい。この授業では時間の有効な使い方をマスターすることで、リスニングセクションの各パートの後半に出題される比較的難易度の高い問題も解ける力を養成する。またリーディングセクションにおいても問題を解く順序や時間配分をマスターし、75分で100問を解く力を身につける。	
		海外語学研修 I	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
		海外語学研修 II	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
		海外語学研修 III	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
		海外語学研修 IV	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
	キャリア形成	日本語の基礎	日本語の能力は、単に情報収集や情報発信のために必要であるだけでなく、あらゆる科学を学ぶ者にとって思考力の基盤をなす意味においてもきわめて重要である。本科目は日本語の基礎学力が不十分な新入生を対象とし、基本的語彙の確認からはじめ、文章を正確に読解する方法と誤解のない文章の表現方法の基礎を演習形式で指導する。日本語を母国語としない留学生に対しても、本科目の受講を推奨する。	
		日本語表現法 I	日本語の能力は、単に情報収集や情報発信のために必要であるだけでなく、あらゆる科学を学ぶ者にとって思考力の基盤をなす意味においてもきわめて重要である。本科目は、平易な論説文を正確に読解する方法と論理的な文章の表現方法の基礎を演習形式で指導する。また、社会人として必要な敬語の基礎についても指導する。	
		日本語表現法 II	「日本語表現法I」を受講した学生を対象に、やや高度な論説文を正確に読解する方法と、読解した内容を元に自らの思考を加え論理的な文章として表現する方法を演習形式で指導する。Iとの違いは、扱う文章の専門性や論理性が高度になることにとどまらず、論理的な文章を読み書きすることを通して思考力を養うことにある。	

教養分野科目 キャリア形成	キャリアデザインⅠ	<p>学生が、職業人生を考えるためのプラットフォームを提供し、職業観を養成することの手助けを行う科目である。社会と経済の仕組み、産業構造の変化、日本の雇用環境の特質などを理解し、仕事の意義、職場の種類、職業人生の組み立て方法などの概要を指導する。単なる知識の一方的な伝達にならないよう、講義と演習を組み合わせて理解を促す。講義の最後には各自の人生設計のロードマップ（キャリアシート）のラフスケッチを描けることを目標とする。</p>	共同
	キャリアデザインⅡ	<p>学生が各自の専門性を生かしながら、実際に自分に合った職業を選択するために必要な知識と技術を指導する。身近な社会人の観察や聞き取り調査など、単なる知識の一方的な伝達にならないよう、講義と演習を組み合わせて理解を促す。講義の最後には、キャリアデザインⅠで作成した人生設計のためのキャリアシートをより現実的なものに修正することを目標とする。</p>	共同
	キャリアゼミⅠ	<p>キャリアゼミはキャリア教育の一環として、社会人基礎力の涵養を目的とし、教養科目および専門科目を有機的に融合するように、1年次と3年次に継続的に配置した少人数制によるゼミ形式の演習科目である。本科目はその第1段階として入学直後の新入生を対象に、大学で学ぶことの意味と学び方、意義深い大学時代を過ごすための生活の仕方などを、教員や他の受講生との自由なディスカッションを通じて考えるための科目である。同時に、会話によるコミュニケーションの基本を身につけることを目的とする。</p>	
	キャリアゼミⅡ	<p>キャリアゼミの第2段階として、前期での大学生活を顧みて学習の習熟度を自ら判断させ、それを一層向上させるために教員との対話・討論を通して、自主的な学習の重要性を理解させる。また、所属学部・学科の専門性に添った学習方法について理解させる。さらに、学習の成果を他者に伝えることを通じて、コミュニケーションを図る上での感性の大切さや、社会生活におけるマナーを理解させ、大学生としての教養と人格の育成を図る。</p>	
	キャリアゼミⅢ	<p>キャリアゼミの第3段階として、専門分野に関する対話や演習を行うことにより、専門性に対する理解度を向上させ、各自のキャリアの方向性を考える指針を与えることを目的とする。3年生前期はその後の就職活動の準備をする上できわめて重要な時期であり、教員および他の学生との活発な討論を通して、それぞれの所属学科に関連した業界および職種について理解を深め、各自の価値観の育成を図ると同時に、各自が目ざす職業へ向けて具体的な準備の方法を指導する。全8回。</p>	
	キャリアゼミⅣ	<p>キャリアゼミの最終段階として、専門科目の内容を具体的な職業と関連づけて理解し、各自の専門性を通して社会に貢献する方法を考えさせる。これにより、学生の社会への参加意識を育て、各自の将来設計に向かって行動するための意欲を育成する。また、就職活動を具体的に進めるために必要な知識やスキルを指導する。全8回。</p>	
	インターンシップA	<p>企業や行政機関など社会の中で学習の成果を試し、同時に労働の実際について体験的に学ぶ研修、いわゆるインターンシップを希望する学生のための演習科目である。仕事に臨む心構えや社会人としてのマナーなどを事前に指導し、レポート課題に合格した学生を対象に大学が研修先を紹介する。研修を通して実社会に対する見聞を広め、各自の進路選択に役立てることが目的である。</p>	
	インターンシップB	<p>インターンシップを希望する学生のための演習科目である。「インターンシップA」との違いは、学生各自の専門性や学科の事情に添って研修を行う点にある。仕事に臨む心構えや社会人としてのマナーなどを事前に指導することは同様であるが、より専門性に基づいた指導が行われる。研修先は大学が紹介する場合と、教員の指導の下で学生自らが受け入れ企業に直接コンタクトをとる場合とがある。研修を通して実社会に対する見聞を広め、各自の進路選択に役立てることが目的である。</p>	

教養分野科目	キャリア形成	地域共生学	地域社会で顕著な活躍をされている方々をゲストに迎え、さらに地域貢献において特徴ある活動を行っている本学教員も教壇に立つ。それぞれの立場および活動事例を通して、地域の産業・経済、企業や工業技術、地域文化などについて学ぶとともに、地域社会との関わり方、海外と地域との関係、あるいは社会人として必要な教養や責任感、倫理観、職業観、常識とはどのようなものかを考え、理解を深める。	
		テクニカルライティング	自然科学の基礎知識から、具体的課題を受講生各人が自ら選定し、自ら解を見つけ出すべく自己学習を行い、その結果をレポートとしてまとめ上げることは、大学教育の基本的な要素であり、同時に重要なキャリア形成教育の一環でもある。本授業は、その準備教育として科学/技術レポートの書き方の基本を学生が身につけることを目的としている。そのために、授業はレポート作成練習を中心とした演習形式の授業とし、レポート作成のルールと基本スキルを短期間に修得するための科目である。全8回。	
		プレゼンテーション	科学者は、自ら選定したもしくは他から与えられた解決すべき課題について、学習と研究により解決策を探索し、結果をレポートとしてまとめ上げるだけでは不十分であり、その内容について他者に正確に説明できる能力も必須である。本授業は、学生がこの説明能力とプレゼンテーション力の基本を身につけることを目的としている。そのために、授業はプレゼンテーション練習を中心とした演習形式の授業とし、プレゼンテーションの基本スキルを短期間に修得するための科目である。	
		課題研究	科学/技術レポートとしてまとめ上げるための基本スキルの修得授業であったテクニカルライティング、また、他者へ正確に説明するための基本的スキルの習得授業であったプレゼンテーションを受講した後、これら基本スキルの実践の場として受講生自らが選定した具体的課題を対象に、受講生自らがより深く課題に取り組み、創造力の育成を目的とした課題研究を行う授業である。そのために、授業は自由研究方式とし、最後に実施内容・結果についてまとめ、報告書として提出し、プレゼンテーションにより評価を受ける演習科目である。	
		コンピュータリテラシ	高度情報化社会においては、あらゆる場面で情報技術を利用する機会がある。一方で、情報技術は社会に多大な影響を与え、その利用に関する課題が露呈している。この科目では、コンピュータやネットワークの仕組みを理解し、ソフトウェア利用技術を習得すると共に、情報技術が社会に与える影響について検討することで、高度情報化社会で求められる、情報の利活用に関する倫理観の養成を目的としている。授業においては、紙媒体の補助教材に加え、マルチメディア教材を併用し、情報技術やその周辺に関する話題を身近なものにするよう工夫する。	
科学基礎	基礎数学 A	大学における数学科目、特に「微分積分学Ⅰ」への移行を円滑にするために、高校数学の「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に扱う。この科目では、講義形式並びに演習形式を併用し、大学における専門科目を理解するための基礎の習得及び学習意欲の向上を目的としている。具体的な内容は、文字式の計算、式の展開・因数分解、分式及び無理式の計算、剰余定理・因数定理、1次方程式・2次方程式、図形と方程式、1次関数と2次関数、無理関数、分数関数、三角比、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。		
	基礎数学 B	大学における数学科目、特に「微分積分学Ⅰ」への移行を円滑にするために、高校数学「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に扱う。この科目では、講義形式並びに演習形式を併用し、大学における専門科目を理解するための基礎の習得及び学習意欲の向上を目的としている。具体的な内容は、1次関数と2次関数、無理関数、分数関数、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。特に、「微分積分学Ⅰ」への接続を踏まえ、関数の概念及びグラフの作成等、関数の形状を表現することに重点を置く。		

教養分野科目 科学基礎	基礎数学 AB	<p>大学における数学科目、特に「微分積分学Ⅰ」への移行を円滑にするために、高校数学の「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に扱う。この科目は、「数学基礎A」の内容に対する理解が十分である受講生、及び、「数学基礎B」において学習進度に遅れが生じた受講生を対象に、両科目を補完する内容と位置付けている。具体的な内容としては、2次関数、無理関数、分数関数、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。可能な限り少人数のクラスを編成し、講義形式並びに演習形式を併用する一方で、より多くの問題に取り組む。</p>	
	微分積分学	<p>自然や社会において全体構造の理解を進める上で、微分法及び積分法は重要な役割を担う。この科目では、高校「数学Ⅱ」から「数学Ⅲ」までを基礎とし、1変数に関する微分法・積分法の理解、及びその応用の習得を目的としている。具体的な内容としては、関数の定義、様々な関数、関数の極限と連続性、微分係数と導関数の導入、関数の微分法、微分法の応用、不定積分、部分積分法、定積分、定積分の応用を取り扱う。また、「基礎統計学」への接続を考慮し、指数関数や正規分布等、様々な確率分布関数を提示し、これらの関数の微分・積分についても説明する。</p>	
	科学リテラシ	<p>科学リテラシは、個人の意思決定及び社会問題への参与、並びに経済の生産性向上に必要な科学的概念・手法に対する理解である。この科目では、社会や大勢に扇動されない客観的思考の意義を理解し、客観的思考力を養成することを目的としている。具体的な内容としては、日常生活で体験する物事に対する問題提起から問題解決、自然現象の説明や予測、メディア発の情報に対する客観的な分析、これらに関する他者とのコミュニケーションを取り扱う。実施にあたっては、多方面の事例を取り上げると共に、受講生同士が意見を交わす、グループ討論の場を積極的に設ける。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)          (1 鈴木 晋一郎/1回)          7. 窒素循環と地球環境          (5 蔵田 浩之/1回)          11. 化学物質は「怖い」もの？          (13 山西 輝也/2回)          2. 情報とは何か 3. コンピュータの進歩と社会          (14 杉原 一臣/5回)          1. ガイダンス 8. まとめ1 9. だまされない統計の読み方          10. データマイニング入門：買い物の中身から法則を発見する          15. まとめ2          (17 谷内 眞之助/2回)          5. 「まなび」と「まねび」 1-創造に至る日本的発想の原点-          6. 「まなび」と「まねび」 2-創造に至る日本的発想の原点-          (18 芦田 浩之/2回)          12. 「視覚」の秘密 1-私たちの眼は何をしているのか-          13. 「視覚」の秘密 2-私たちの眼は何をしているのか-          (20 吉村 喜信/1回)          4. 木の魅力について          (30 野尻 (藤本) 奈央子/1回)          14. スポーツとユニバーサルデザイン</p>	オムニバス方式
	基礎物理学	<p>物理学は、数学等と共に自然科学の学問を理解する上で最も基礎となる科目である。この科目では、高等学校で物理を選択しなかった、あるいは、物理に対する理解が不十分な学生を対象に、物理の基本的な考え方、ものの見方を習得することを目的としている。具体的な内容としては、力と運動、運動の法則、力学的エネルギー等、高等学校「物理Ⅰ」の力学を中心に取扱い、実施にあたっては、デモンストレーション等、対象学生の受講に配慮している。また、各学科における物理学系専門科目への接続を意識した教科書選定を行うと共に、可能な範囲で少人数クラスを編成する。</p>	
	基礎生物学	<p>生物学は、生命現象を対象とする自然科学の一分野であり、「基礎生命科学」等と共に、人間が自然と調和した生活を営む上で重要な学問である。本科目では、生物を構成するDNA及び遺伝子の構造、細胞の構造及び機能、人間と環境の関わり、食物連鎖等を取り扱い、人間とそれを取り巻く環境の役割を理解することを目的としている。実施にあたっては、クラスサイズに留意すると共に、各学科の専門科目への接続意識したクラス編成を行う。また、本科目とは別に開講される「環境・情報倫理」との連携を意識し、受講生が環境に関する行動の指針を定める上で、参考となる情報を提示する。</p>	

教養分野科目	科学基礎	基礎化学	我々の生活を支える物質の性質を理解するためには、化学に基づく視点が必要不可欠である。この科目では、高校までに学習してきた知識を固めると共に、原子・分子のレベルから、分子の集まりである複雑な系の挙動までを体系的に学ぶ。具体的な内容としては、物質の定義及び性質、物質の状態・構造、化学結合、分子と物質量、化学反応、酸と塩基、酸化と還元である。実施にあたっては、基礎知識の体系的把握を中心とする学科、応用面を重視する学科等、化学の専門的知識の必要性の程度に学科間で差があるため、教科書の選定及び教授法において、学科カリキュラムの特色を十分に考慮する。	
		基礎生命科学	生命科学は、生命現象を対象とする自然科学の一分野であり、「基礎生物学」等と共に、人間が自然と調和した生活を営む上で重要な学問である。現代社会は「生命」領域を抜きに語ることはできない。この科目では、生命現象を科学的に理解することを目的としている。具体的な内容としては、生命の定義、遺伝子の構造、細胞の働き、遺伝子組み換え技術の原理・応用を取り扱う。また、生活習慣と健康、寿命と老化、環境汚染等、世間で広く認知されている関連事例を多数取り上げることにより、受講生が生命科学の現状を認識し、その展望を熟思する機会を適宜設ける。	
		基礎統計学	我々の身の周りには様々な情報が溢れている。数値データはそういった情報の1つであるが、データに内在する特徴を見出すためには、的確にデータを集計し、処理する方法を備えておく必要がある。この科目では、数値データから重要な情報を取り出すための考え方及び統計手法を習得することを目的としている。具体的な内容としては、統計の意義、統計図表の特徴、統計指標の算出、回帰と相関、確率と確率分布、様々な確率分布、統計的推測、統計的検定を対象とする。また、各学科の専門科目に役立つ統計手法のみならず、情報化社会における数値情報の活用方法についても検討する。	
		統計学演習	「統計学基礎」において、統計指標の算出、統計的推定及び統計的検定等、統計に関する基礎的な知識を一通り習得している。この科目では、実践的な統計的手法の演習を通じて、「標本」という部分的情報から「母集団」という全体の特徴を推測するという、「推測統計」の考え方を理解することを目的としている。具体的な内容としては、度数分布表の作成、単回帰分析、相関分析、母集団平均及び分散の区間推定、母集団平均及び分散の検定、適合度検定を取り扱う。実施にあたっては、データそのものに対する関心を高めるため、いずれの演習においてもデータの収集から着手する。また、結果に対する考察をグループで実施する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(環境情報学部 環境・食品科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門 分野 科目	学部 共通 科目	環境情報学概論	<p>21世紀を迎えた先進国では、前世紀的な大量生産・大量消費を前提とした工業社会の前提が徐々に崩れつつある。その一方で、少子化・高齢化・エネルギー問題・地球環境問題・食糧問題などの深刻化により、持続可能な社会の実現に向けて、「環境」および「情報」分野に端を発したイノベーションとものづくり至上主義でない総合的な視点による問題解決が期待されている。本科目では、「環境」と「情報」の視点から社会の現状を認識し、環境情報学部で学ぶ学問の見取り図を理解するための入門用科目である。同学部に所属する教員がリレー形式で講義し、受講生は講義で展開される専門性の広がりや個別の問題から、環境情報学の概念を理解し、知的刺激を受けると同時に、各自の専門性の選択に向けた示唆を受ける機会とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(2 田中智一/2回) 「資源リサイクルと廃棄物処理」</p> <p>(3 草桶秀夫/2回) 「生物多様性から見る地球環境問題」「生物資源の有効利用」</p> <p>(4 廣瀬重雄/1回) 「生分解性プラスチックの応用可能性」</p> <p>(7 辰巳佳次/1回) 「環境計測と環境保全」</p> <p>(8 原道寛准/1回) 「太陽エネルギーの有効利用と太陽光発電のこれから」</p> <p>(9 笠井利浩/1回) 「ライフサイクルアセスメントによる持続可能な社会の実現(2回)」</p> <p>(11 松岡博幸/2回) 「環境負荷と環境コスト」</p> <p>(15 川島洋一/2回) 「環境情報学による21世紀型社会の価値づくりに向けて」「歴史的環境と持続可能な生活環境」</p> <p>(16 池田岳史/1回) 「環境デザインと情報デザイン」</p> <p>(19 山内 勉/1回) 「サステイナブルデザインの思考」</p> <p>(24 藤原 明広/1回) 「ユビキタスシステムによる新しい社会情報ネットワーク」</p>	オムニバス方式
		環境・情報倫理	<p>近年、環境保存型社会への移行を狙いとして、生活様式や企業活動の形態を改める規範「環境倫理」が示されている。一方で、情報化社会における情報の扱い方に関しても、同様の規範「情報倫理」が存在している。持続可能な社会の実現に向けては、これらの倫理意識を高めることが強く要請されている。この科目では、持続可能な社会の形成に求められる2つの倫理観について学び、これらの倫理観の向上を目指す。実施にあたっては、倫理観が問われる事例を提示し、倫理観の欠如が身近な状況で起こり得ることを説明する他、より良い社会を形成するための議論を展開する。</p>	
		知的財産概論Ⅰ	<p>知的財産は、人間の創造的活動により生み出される無形の産物であり、我々の周囲にも多く存在している。一方で、社会にはこの種の無形資産を保護する法律があり、知的財産の創造において、ルールに対する正しい認識は必要不可欠である。この科目では、知的財産及びその周辺の知識を習得し、知的財産活動を日常的に実践する姿勢を確立することを目的としている。具体的な内容としては、知的財産及び知的財産権の定義、知的財産保護の意義、特許権、実用新案権を取り扱う。また、知的財産の存在を実感できるよう、国内外の事例を多数取り上げる。</p>	
		知的財産概論Ⅱ	<p>知的財産は、人間の創造的活動により生み出される無形の産物である。この科目は、「知的財産概論Ⅰ」に引き続き、無形資産の1つである知的財産に対する正しい認識を持つことを目的としている。具体的な内容としては、意匠権、商標権、著作権、著作者に類似する権利、その他の知的財産権を扱う。一方、知的財産に関するルールは各国において明文化されているものの、「産業保護」と「自由な利用」という2つの要請において衝突が後を絶たず、様々な場面で争われている。こういった論争の軌跡を受講生に示すことで、知的財産の保護の在り方を適宜議論する。</p>	

学部共通科目	社会調査論	社会における人々の意識や行動の実態を把握するために、インタビューやアンケート等による調査が頻繁に行われている。この科目では、社会調査の意義と共に、様々な調査の方法を習得することを目的としている。具体的な内容としては、社会調査の定義、統計的調査の方法、標本抽出の方法、社会調査の実例、社会調査の問題点を対象とする。社会調査は、理系・文系を問わず、様々な分野・場面において用いられていることから幅広く応用が可能であり、各学科の専門に応じたテーマを取り上げたり、コンピュータを用いて調査結果を集計したりする等、実践を見据えた社会調査の演習を行う。	
	環境情報学演習基礎	PBL (Project Based Learning) は、学生が主体的にプロジェクトを遂行し、その経験から気付きや学びを得る教育手法のことである。この科目では、初めてPBLに取り組む学生を対象にPBLについて解説するとともに、身のまわりにある課題の解決を目標に数名のチームでプロジェクトを遂行し、プロジェクトマネジメントの基本を身につける。さらに、プレゼンテーション能力向上のため、得られた成果をPBL発表会において発表する。	共同
	環境情報学演習Ⅰ	この科目では、環境情報学演習基礎で得た知識を基に、自ら選択した環境もしくは情報に関連する課題の解決を目指し、数名のチームでプロジェクトを遂行する。これらの過程を通して、プロジェクトの基礎知識（プロセスや問題解決手法）、プロジェクトの遂行に必要な行動・思考特性（特にチームワークやステークホルダーと合意しながらの作業）を修得する。さらに、第三者でも分かりやすい報告書の書き方およびプレゼンテーション能力を身につける。	共同
	環境情報学演習Ⅱ	この科目では、環境もしくは情報に関連して教員がRFP (Request For Proposal) を提示した中から学生が案件を選び、学生自身の手でプロジェクトを実施していく。これにより環境情報学演習Ⅰで学んだことを「知っている」レベルから「実行できる」レベルにステップアップさせる。さらに、プロジェクト終了後にPBL遂行中に発生した問題やそれらへの対策、およびその効果について事後分析を行い、学科もしくは学部の関係者に向けて発表する。	共同
	環境情報学演習Ⅲ	この科目では、環境情報学演習Ⅱで取り組んだプロジェクトを継続し、遂行過程で発生する様々な問題・課題を深く掘り下げながら、プロジェクト完了に向けてチームによるプロジェクト運営を行う。これにより、これまでのプロジェクト遂行において自ら不足を感じた個人レベルの技術やヒューマンスキル、コミュニケーション能力の向上を目指すとともに、課題解決のための調査力および洞察力を高める。	共同
専門分野科目	食品生物化学概論	食生活の豊かさや便利さが増す一方で、近年は生活習慣病が増加し、食のあり方が問われている。また、世の中には健康に良いと称する食品が多数現れ、食物と健康に関する情報が氾濫している。健康維持には適切な食生活が欠かせないが、「適切な食生活」とはどのようなものを科学的見地から明らかにする必要がある。この科目では、生物化学的な視点から「適切な食生活および食品」について概観し、本学科で学ぶに当たっての指針を得ることを目的とする。 (オムニバス方式/全15回) (3 草桶 秀夫/4回) 食品及び食生活と微生物 (4 廣瀬 重雄/4回) 植物と健康食品 (6 矢部 希見子/3回) 食品安全のための化学 ←P矢部 (10 柏山 祐一郎/4回) 栄養・代謝と生物化学	オムニバス方式
	食品環境化学概論	安全で豊かな食生活を送るためには、食を根底から支える環境の維持が不可欠であるが、近年は地球規模での温暖化や異常気象、土壌や水質の汚染が深刻化し、食糧危機が叫ばれるようになってきている。我々のまわりには環境に関する情報が氾濫し、中には科学的根拠に乏しく、危機感のみを煽るようなものも含まれている。この科目では、環境化学的な視点から環境の現状把握および環境の浄化・保全について概観し、本学科で学ぶに当たっての指針を得ることを目的とする。 (オムニバス方式/全15回) (2 田中智一/3回) リサイクルと廃棄物処理 (5 蔵田浩之/3回) 環境適合性有機材料 (7 辰巳佳次/3回) 環境計測と環境保全 (8 原 道寛/3回) エネルギーと環境 (9 笠井利浩/3回) ライフサイクルアセスメント	オムニバス方式
専門基礎科目			

専門分野科目	専門基礎科目	食品倫理	食品の原材料や生産地の偽装、消費期限や賞味期限の改竄など、食品の偽装問題が繰り返り起きている。食品の安全・安心に関してますます企業倫理が問われるなか、食品に携わる技術者にもより一層の強い倫理観が求められている。この科目では、食品偽装が起こった背景について事例を基に解説するとともに、倫理的な判断を迫られるような場面に陥った技術者がどう判断すべきかなどを、受講学生による倫理的課題の調査・分析・発表およびクラス討論等を通して考える。	
		無機化学	無機化学は、あらゆる無機物質およびそれを構成する元素の構造、反応、物性を取り扱う学問分野である。そのため、扱う物質は膨大であり、非常に多様性に富んでいる。この科目では、全元素の中からいくつが代表的な元素を取り上げ、原子の構造と元素の周期律（原子軌道、周期表等）、化学結合（イオン結合、共有結合等）と分子構造、各元素の一般的性質などについて学び、無機物質の構造・結合・反応を取り扱うための原理や理論など無機化学の基礎的事項について理解を深める。	
		分析化学	分析化学は、どういう成分がどのくらいの量あるいは濃度で存在し、それらがどういう状態にあるのかを明らかにするための方法論を取り扱う学問分野である。化学分析は、食品科学や環境科学などの分野、さらには生産現場での工程管理や品質管理などにおいて日常的に活用されており、極めて重要な位置を占めている。この科目では、酸塩基等の各種反応を利用した基本的な分析法を取り上げ、それぞれの分析法の基本原理や特徴、化学平衡および化学量論など分析化学の基礎的事項について理解する。	
		地学概論	地学（地球科学）は地球を対象とする自然科学の一分野である。温暖化や酸性雨など地球規模で起こる環境問題、人類や生態系に災害をもたらす地震や火山活動等を正しく理解するためには、基本となる「地球の姿」を知る必要がある。この科目では、地球の誕生や内部構造、大気形成、生物の進化、さらには地殻の変動や地震・火山噴火など地球上での様々な地学現象について学び、社会が地球環境や災害とどのように向き合っていくべきか考える力を身につける。	
		食品衛生学	飲食によって発生する健康上の危害を防止するために、食品の安全性を確保する目的で用いられるすべての手段を食品衛生学という。この科目では、食品の安全性確保のために必要な衛生管理および衛生検査の概要を理解することを目的とする。特に、食物とともに体内へ取り込まれる化学物質について、毒性や安全基準等の知識を修得するとともに、発がん性物質や環境ホルモンの問題等についても学習し、食品衛生上の課題について認識を深める。	
		理化学基礎実験Ⅰ	この科目は、物理学実験と化学実験とから構成される。物理学実験では、重要な物理現象の理解と基本的な測定技術の修得を目的として、固体の線膨張率測定やユース法によるヤング率測定等を行う。また、化学実験では化学の基礎を理解する上で役立つ「ものづくり実験」と「ものの性質を調べる実験」を中心に実験を実施する。本授業の受講により、将来の各種学生実験および卒業研究等を行う際の基本原理や基本操作を修得するとともにコンピュータを用いた実験レポートの書き方についても習熟する。	共同
		理化学基礎実験Ⅱ	この科目は、生物学実験と地学実験とから構成される。生物学実験では、生物試料の取り扱い方、顕微鏡の操作法、観察結果の記録・分析など生物学実験における基礎的な知識と技術を身につける。また、地学実験では室内作業を中心に基礎的な観察・実験、コンピュータによる簡単なデータ処理を通して、岩石や化石など地学で扱う様々な現象に対する地学的な理解を深める。本授業の受講により、将来の各種学生実験および卒業研究等を行う際の基本原理や基本操作を修得するとともにコンピュータを用いた実験レポートの書き方についても習熟する。	共同
有機化学Ⅰ	有機化学は、炭素原子を含む化合物を対象とする学問体系である。生物は有機物質によって構成され、生命体内のほとんどすべての反応に有機物質が関与するなど、有機化学は生化学、栄養学、食品科学等の基盤となっている。この科目では、有機化合物の結合と分子構造、立体構造、命名法、官能基の性質および化学反応について、基本的な概念と考え方を理解する。また、生体関連物質や人間生活と関連した身近な有機化合物の構造や諸性質および反応性の特徴について理解を深める。			

専門分野科目	専門基礎科目	有機化学 II	有機化学は、化学の根幹をなす分野の一つである。生命はもとより食品においてもその知識が必要とされるなど、有機化学を知らずに生命や食品を理解することは不可能である。この科目では、有機化学 I で学んだ知識を基に、有機化合物の化学反応がどのように進行するかについて、身のまわりにある有機化合物を取り上げながら、それぞれの有機化合物における結合の生成・切断などの反応機構を学習するとともに、有機反応の筋道を化学結合論に基づいて理解する。	
		物理化学 I	物理化学は、さまざまな化学現象の背景にある原理や法則を物理学の理論や測定法を利用して解き明かす学問分野であり、食品分野および環境分野の学習においても極めて重要である。物理化学の範囲は、大きくは物質の構造（構造論）、物質の性質（物性論）、物質の反応（熱力学）に渡るが、この科目では物質を構成する最小単位である原子・分子構造の考察を扱う構造論について学習し、原子の内部構造および結合が異なる化合物の構造に対する理解を深める。	
		物理化学 II	物理化学は、さまざまな化学現象の背景にある原理や法則を物理学の理論や測定法を利用して解き明かす学問分野であり、食品分野および環境分野の学習においても極めて重要である。物理化学の範囲は、大きくは物質の構造（構造論）、物質の性質（物性論）、物質の反応（熱力学）に渡るが、この科目では物理化学 I で学習した原子・分子が集合体をなしてマクロな状態となった物質について、その性質を取り扱う物性論を学習し、気体・液体など種々の物質の性質について理解を深める。	
		物理化学 III	物理化学は、さまざまな化学現象の背景にある原理や法則を物理学の理論や測定法を利用して解き明かす学問分野であり、食品分野および環境分野の学習においても極めて重要である。物理化学の範囲は、大きくは物質の構造（構造論）、物質の性質（物性論）、物質の反応（熱力学）に渡るが、この科目では物理化学 I・II での学習を基礎に化学反応に伴う物質の変化をエネルギー論的に扱う熱力学を学び、反応速度および化学平衡等に関する理解を深める。	
		生化学 I	生化学は、生命現象を化学の視点から分子レベルで解明する学問分野であり、食品とヒトの健康との関わりを深く理解するための基礎となる。この科目では、主要な細胞構成成分であるタンパク質、糖質、脂質、核酸などの化学的な構造を理解することに重点をおく。さらに、生体における化学反応を促進する酵素について学び、生化学の基本原則を理解する。また、今日の生物の多様性をもたらしてきた創始の歴史（化学進化、生物進化）についても理解を深める。	
		生化学 II	生化学は、生命現象を化学の視点から分子レベルで解明する学問分野である。生命現象の本質的理解を深めるために、この科目では生化学 I で学んだ生体分子の化学の知識を基に、これらの物質の代謝および情報伝達を中心に生体機構のしくみを生化学的に理解していく。さらに、遺伝情報の伝達・発現に関して、セントラルドグマの理解の徹底化を図るとともに、最新の知見にできる限り触れることによって、より専門的な知識の修得を目指す。	
		環境科学	我々のまわりには環境問題に関する情報があふれており、それらの中には一面的な見方や信憑性に欠けるものが含まれている。このため、環境問題については科学的根拠に基づいて論理的に考える必要がある。この科目では、地球環境の変遷、大気・水の環境、自然災害やエネルギー問題と環境との関連などについて基礎的な知識を学ぶことにより、地球環境問題を科学的かつ多面的な視点で捉えるとともに、理解した内容を論理的に説明できることを目的とする。	
		微生物学	微生物学は、微生物を対象とする生物学の一分野である。微生物は微小で肉眼では観察できないが、我々の日常生活圏に多数存在し、多様な関連性をもっている。一方、古くから発酵・醸造技術では微生物が主役であり、近年は食品分野のみならず、医薬品の開発や化学工業分野でもバイオテクノロジーとして先端技術を支えている。この科目では、これら微生物一般について解説し、微生物と人間生活の関係について理解することを目的とする。	

専門基礎科目	無機化学演習	無機化学は、周期表にある100あまりの全ての元素を対象とし、全元素の化学とも呼ばれている。この科目では、1年次に学んだ無機化学の知識を基に演習問題を解くことを通して、酸と塩基、酸化と還元、電気化学、遷移元素、希土類、放射性元素、錯体の構造と性質、生物無機化学などについてより理解を深める。さらに、無機化学と有機化学の重要な接点である触媒化学および有機金属化学についても演習形式で学習する。	
	工学英語演習Ⅰ	近年、我々が日常的に摂取している食材はあらゆる国・地域から輸入されている。一方、食を支える環境についても汚染や異常気象など地球規模での広がりを見せている。このため、食や環境に携わる技術者にとって英語でのコミュニケーション能力がますます重要となる。この科目では、英語で書かれた科学入門書の読解を通して、科学技術雑誌等を読むための基礎的英語能力を修得するとともに、テキストの内容を通して科学的・論理的に思考する習慣を身につける。	
	工学英語演習Ⅱ	現在、様々な企業が海外に進出しており、食品関連企業も食材の輸出入を通して海外と大きな接点をもっている。このため、食に携わる技術者にとって英語は不可欠なコミュニケーションツールである。この科目は、英語で書かれた科学入門書を読み、それを応用した簡単な英文を作成することによって、科学技術雑誌や論文を読む能力ならびに英文のレポートを作成する能力を修得する。また、テキストの内容を通して、身近な科学技術に目を向ける習慣をつけるとともに、科学的思考能力を向上させる。	
	有機化学演習	有機化学は、生命現象や食品の理解に不可欠であるだけでなく、現代の科学技術の発展を支える重要な学問分野である。いわゆる「暗記もの」と思われがちであるが、実際はいくつかの基本事項を身につければ、論理的に考えることによって理解できる学問である。この科目では、このような観点から、2年次で学んだ有機化学の知識を基に演習問題を解くことを通して、有機化学に関する基礎的な原理から応用に至る理論を深く理解することを目的とする。	
	物理化学演習	物理化学は、化学の重要な学問領域の一つであり、食品や環境の学習に欠かすことができないが、理論的な解明に重点が置かれるため、どうしても数式が多用される。このため、講義で学習したことを理解し、活用できるようにするには、多くの演習問題を解くことが不可欠である。この科目では、このような観点から2・3年次で学んだ物理化学の知識を基に演習問題を解くことを通して、物理化学の基礎から応用に至る理論を深く理解することを目的とする。	
専門応用科目	食品製造工学	加工食品は、我々の食生活に占める割合が増しているだけでなく、多種多様化している。加工食品の製造には、農林畜水産物を原料として物理的単位操作（輸送、洗浄、分離、粉碎、混練、濾過、抽出、蒸留、濃縮、加熱、冷凍、殺菌、乾燥、抽出等）と化学的・微生物学的処理操作（発酵、微生物反応、殺菌、化学反応、酵素反応等）とを組み合わせた種々の加工プロセスが利用されている。この科目では、実際の加工食品を例に挙げながら食品の製造原理を理解し、安全な食品づくりに必要な基礎知識を修得する。	
	機器分析	化学分析は、環境分析のほか、食品生産における工程管理や品質管理においても日常的に活用されているが、分析の迅速化や管理の厳格化に伴ってより高度な分析法が必要とされている。このため、これらの分析においては機器分析が中核をなしており、不可欠なものとなっている。この科目では、各種の機器分析法の中で汎用性が高く重要と考えられるものを取り上げ、その原理や装置構成を理解するとともに、測定データの解析、定量法、実際の応用例について学ぶ。	
	酵素科学	酵素は生体内で起こる化学反応に対して触媒として機能する分子である。酵素は温和条件下で反応を進行させ、特定の分子にのみ作用し、反応の速度を飛躍的に高めるという極めて優れた分子であり、古来から人類は発酵という形で酵素を利用してきた。今日、酵素の利用は食品製造だけにとどまらず、化学工業製品の製造や日用品の機能向上など広い分野に応用されている。この科目では、酵素が触媒する反応のしくみを学ぶことにより、なぜ酵素がそのような優れた機能を発揮できるのかを理解する。	

専門分野科目	専門応用科目	発酵醸造工学	古来、人類は微生物をうまく利用することで、発酵食品や醸造食品を製造してきた。この科目では、それらの代表とも言える清酒、みりん、焼酎、ビール、ワイン、ウィスキー、ブランデー、味噌、醤油、食酢等を例に挙げながら、原料処理、微生物管理、発酵管理等の発酵醸造プロセスおよび技術ならびに工学的な要素技術を学ぶとともに、食品表示や製品の品質管理等についても学習する。これらを通して、発酵および醸造における微生物の有効活用について理解する。	
		環境・食品科学実験Ⅰ	この科目は、環境化学実験と食品科学実験とから構成され、講義での学習内容の理解を深める。環境化学実験では、地球環境、特に水質測定の基礎となるいくつかの分析化学実験を行い、それらの測定原理を理解するとともに分析技術を修得する。食品科学実験では、食品の主要成分である脂質・タンパク質等の栄養素の分離および化学的検出について、それらの原理を理解するとともに技術を修得する。いずれの実験においても、実験結果を第三者に正しく伝えるレポートの書き方に習熟する。	共同
		環境・食品科学実験Ⅱ	この科目は、環境化学実験と食品科学実験とから構成され、講義での学習内容の理解を深める。環境化学実験では、ヒトと環境にやさしい環境適合性物質を合成する有機化学実験を行い、合成の原理を理解するとともに技術を修得する。食品科学実験では、食品の安全確認に必要な微生物検査のための器具の準備および使用法、ガラス器具の取り扱いと滅菌法、試験試料の調製法など微生物培養の基礎的実験操作を体得する。いずれの実験においても、実験結果を第三者に正しく伝えるレポートの書き方に習熟する。	共同
		バイオテクノロジー	バイオテクノロジー（生物工学）は、生物が持つ遺伝、繁殖、成長、物質代謝、情報認識などの機能を産業に利用して社会に役立てる技術であり、食料やエネルギー資源の確保、病気の治療や予防、地球環境の保全などの深刻な課題を解決するものとして大きな期待が持たれている。この科目では、バイオテクノロジーの3大技術と言われる固定化酵素技術、細胞融合技術、遺伝子組換え技術について原理と応用を学び、バイオテクノロジーが人間の生活向上にどのように役立っているかを理解する。	
		遺伝子工学	遺伝子工学は、遺伝子を人工的に操作する技術の総称であり、特に生物の自然な生育過程では起こらない人為的な型式で行うものを指している。遺伝子工学は、新しい細胞の創出やタンパク質などのような有用物質の生産の観点からますます重要になっている。この科目では、遺伝子の単離、遺伝子組換え生物の作成、目的遺伝子の発現、細胞への遺伝子導入法などについて学習し、微生物、動物、植物を対象とした遺伝子組換え技術の基礎を理解する。	
		食品安全学	近年、食品の加工・保存・流通の技術進歩が著しく、様々な食品・食材が地球上のあらゆる場所から入手できるようになった。これによって我が国の食料事情は大きく様変わりし、食生活における便利さや豊かさが増した反面、食品の安全性に懸念がもたれているのも事実である。この科目では、食品の安全性に関わる衛生学的基礎事項について学習するとともに、各種微生物の引き起こす様々な危害（輸入感染症を含む）についても理解を深める。	
		環境計測工学	温暖化や酸性雨など地球規模での環境問題ならびに大気汚染や水質汚濁に代表される環境汚染が深刻化している。環境を浄化・保全するためには、大気や水、土壌などの状況を正確に把握することが重要である。このような環境計測においては、一般的に測定方法や判断基準の統一を図るため、対象に応じて分析方法等を規定した公定法によって各種指標値の測定および測定値の比較がなされている。この科目では、環境を正しく把握するために用いられている各種の公定計測法およびそれらに関する法律について学ぶ。	
		分子生物学	分子生物学は、生命現象を分子のレベルで理解しようとするものであり、現代生物学の一分野である。特に生体高分子の構造と機能について、化学反応を通じて明らかにすることを目的としており、DNAの構造と機能が明らかにされて以来、急速に発展している。この科目では、組換えDNA技術によって目的遺伝子を細胞内に導入させる遺伝子のクローニング法について学び、次いで遺伝子の構造と機能を分子レベルで理解する。さらに、DNAの複製やゲノムの進化がどのように細胞で起こるかを学習する。	

専門分野科目	専門応用科目	栄 養 化 学	我々が毎日摂取している食物は、生命活動を維持するためのエネルギーを生産し、身体組織を造り、体内の種々の機能を調節するという大切な役割をはたしている。この科目では、栄養成分の消化吸収について、食物中に含まれる3大栄養素である糖質、タンパク質、脂質に注目し、その化学的構造、代謝、栄養、食品としての機能性について学習する。さらに、食物と健康との関わりについても学び、栄養化学の概念と学問的意義について理解を深める。	
		資源リサイクル工学	近年、エネルギーや資源の使用量の増大に伴う環境・エネルギー問題が深刻化しており、大量生産・大量消費型社会から資源循環型社会への転換が求められている。この科目では、資源循環型社会への転換が必要とされる背景、循環型社会構築に向けての廃棄物再資源化に対する考え方（戦略）、個々の素材および製品のリサイクル技術、さらにはリサイクルの定量的な取り扱いについて学習し、廃棄物抑制やリサイクルにどう取り組めばよいかを考える。	
		高 分 子 化 学	高分子化学は、分子量がおよそ10,000を超える高分子を対象とする学問分野である。1930年代に世界で初めて合成高分子がつくられて以来、高分子は現代社会を支える構造素材や機能材料として先端技術から日常生活まで我々の生活に不可欠な材料となっている。この科目では、このように重要性の高い高分子の中から汎用性の高いものを取り上げ、高分子の構造と分類、分子量の概念、高分子の熱的および力学的性質、高分子合成の基礎および重合反応など、高分子の基本的事項を理解する。	
		環境・食品科学実験Ⅲ	この科目は、環境化学実験と食品科学実験とから構成され、講義での学習内容の理解を深める。環境化学実験では、ヒトと環境にやさしい環境適合性物質の物性を調べる物理化学実験を行い、測定の実験原理を理解するとともに技術を修得する。食品科学実験では、身近な食品を実際に試作することによって、原料から食品がつくられる過程と成分の変化の仕組みを理解し、食品を科学的にとらえる力を養成する。いずれの実験においても、実験結果を第三者に正しく伝えるレポートの書き方に習熟する。	共同
		環境・食品科学実験Ⅳ	この科目は、分属された研究室で全実験を行うため、卒業研究の前段に位置している。教員の指導の下で実験テーマの設定と実験計画の立案を行い、実験計画書を提出する。実験計画にしたがって実験を進め、最終成果をレポートとしてまとめるとともに、全受講生が参加する発表会においてプレゼンテーションを行う。これらの過程を通して、卒業研究に必要な問題解決能力および論理的思考力を身につけるようにするとともに、より優れた論文の書き方やプレゼンテーションはどうあるべきかを体得する。	共同
		工 学 英 語 演 習 Ⅲ	この科目では、環境に関する最新のトピックスが記された実際の英語論文を題材として選び、演習形式で内容を理解するとともに専門的な用語および表現法を学ぶ。これにより、理系論文の基本ルールを理解し、専門分野の論文を読み解くための英語力を修得する。さらに、論文読解を通して科学的・論理的に思考する習慣を身につけるとともに、環境科学において重要と考えられる最新の専門知識の修得を目指す。	
	工 学 英 語 演 習 Ⅳ	この科目では、食および食品に関する最新のトピックスが記された実際の英語論文を題材として選び、演習形式で内容を理解するとともに専門的な用語および表現法を学ぶ。これにより、理系論文の基本ルールを理解し、専門分野の論文を読み解くための英語力を修得する。さらに、論文読解を通して科学的・論理的に思考する習慣を身につけるとともに、食品科学において重要と考えられる最新の専門知識の修得を目指す。		
全学共通科目	卒 業 研 究	教員の指導の下で設定した卒業研究のテーマおよび研究方法にしたがって実際に実験または調査を行い、得られた結果を考察する。中間発表会において、研究の進捗状況を報告して研究の進め方を確認し、最終成果を卒業論文としてまとめ、卒業研究発表を行う。これらの過程を通して、専門職業人として必要される問題解決能力、論理的思考力、創造力を身につけるとともに、論理的な文章の書き方、優れた表現力、プレゼンテーション能力を修得する。		

授 業 科 目 の 概 要				
(環境情報学部 経営情報学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
教養分野科目	A群	哲学入門－人生哲学	人生哲学は、本来、人の善い生(行為)の基準としての善い生(行為)一般を明らかにし、それを基準にしてあらゆる善い生(行為)を明らかにするものである。また、その結果としての根本的な善い生(行為)一般についての考えも人生哲学と言われます。この意味での人生哲学は、実は、誰もが既に持っているものである。そして、これがその人の基本的な人生態度となって、その人のあらゆる生き方や行為についての考えや行動を規定する。そこで、この授業は、学生諸君が、様々な人生哲学の学習によって、自らの人生哲学を反省し検討し、よりよい人生哲学を持つようになることを目指す。	
		心理学入門－心のはたらき	心理学は、人間の認知・行動を科学的に実証しようと試みる学問として発展してきた。実験や研究から明らかにされた心理学の理論を学習することで、心理学の知見から得られた知識やスキルを日常生活の実践に生かすこと、社会や集団の現象を心理学の理論に基づいて理解・分析することを授業の目的とする。講義形式の授業とワークシート課題を実施することを通して、学生が自らの日常生活において「自分で考え行動すること」「自己を分析すること」が可能となることを目指す。	
		女性学入門－女性の生き方論	女性学は世界的な女性解放運動(第2次フェミニズム)の中で生まれた学問領域(歴史、文学、教育、法、経済、政治、社会など)で、「ジェンダー」(社会的・文化的な性)という視点から、私たちがあたり前だと思っている社会がどのように異なってみえるかを提示する学問である。今回の授業では生まれてから死ぬまでに遭遇する身近な出来事の中に潜む「ジェンダー問題」に気づくとともに、男女問わずすべての人にとって生きやすい社会とは何かについて考える。	
		コミュニケーション論	現代は社会の変化が大きく複雑化しているため、コミュニケーションをしていく上で様々なつまずきが生じやすい。コミュニケーションには対人的なもの、対物的なもの、さらには自分の内部で行われるものがある。人間のあらゆる活動がコミュニケーションと関係している。それは、これまで、日常生活の中で自然に身に付くものと考えられてきたが、意識的に学ぶことが必要な時代となった。具体的な問題と関連させながら、コミュニケーションとは何か、を考え、また、どうすればコミュニケーションが改善し、生きやすくなるかを考えていきたい。	
	B群	人と社会	人間は社会の中に生まれ、社会と関わりつつ自己を形成し、社会を生きる。人間としての自覚を深め、生の尊重を行為の原理として、自己実現を果たしながら生きるあり方を探求する。「社会的職業的自立」への覚醒として①社会的自立(家庭人としての自立、学生としての自立、市民としての自立、職業人としての自立、生涯学習社会の一員としての自立など)を取り扱う。②職業的自立について学生諸君の自覚を促すことを目的として取り扱う。	
		法学入門－市民社会と法	社会生活を営む上で、私達は、意識するとしないとを問わず、法的な関係に立ち入ることになる。日用品を買ったり、交通機関を利用したりする日常生活の活動も常に法的な側面をもっている。したがって、社会の中で生きる限り、法に対する正しい知識は、必要不可欠と云っても過言ではない。今後、社会の価値ある一員として生きる基盤形成に資するためにも、成人の教養として必要な法の基礎知識を身に付け、体内にリーガルマインドが醸成されていくための入門編とする。	
		日本国憲法	日本国憲法について学習し、権利と責任、使命と義務を自覚する。また、憲法が現実の生活の中でどのように関係しているかを確かめながら自ら考える力を養い、国際社会に生きる日本人としての素養を身につける。	

教養分野科目	B群	経済学入門－現代社会と経済	現代はきわめて高度に発達した市場経済に委ねられています。マクロ経済学における経済の構図、基本的な経済原理、景気判断、市場、貨幣などの考え方を理解したうえで、現代社会における、人・物・金の動きを解明し、特に金融・外国為替・貿易・証券等現代社会特有の経済活動に関する知識を習得する。ひいては世界経済の動きを分析し、その中における日本経済の諸問題について自分で考えることができる力を養い、国際人としても活躍できる能力を身に付けることを目的としている。	
		マスコミ論－新聞を読み解く力	多様化するメディア。この科目では新聞、雑誌など活字メディアを中心にマスコミなどメディアの変遷と役割を学ぶ。同時にタイムリーなニュース、話題を取り上げ、新聞を読む力と情報化社会を生きる実践力を身につけていく。学生と意見を交換しながら授業を進め、討論の場、コミュニケーションをはかる場にしていく。	
	C群	日本文化の歴史	建学の精神”悠久なる日本民族の歴史と伝統とに根ざした愛国心を培い”の精神にそって講義内容を構成する。本講座で取り上げる文化は、建築物や彫刻、絵画、文学などの「文化財・文化遺産」の歴史ではなく、現在の我々の生活や考え方の中に伝えられ生きている文化である。まず、日本人の生活の原点である「稲作」、我々の生活の基盤である「福井県」、活動の舞台である「福井工業大学の創立」について歴史的に学ぶ。また、日本文化の基本にある「中華思想」・「四神思想」・「神祇信仰」（白山信仰）・「晴と曇」・「仏教思想」など、歴史的な事象に基づき明らかにする。それらの学習から、自分の身の周りにある事物や習慣の全てが、歴史的に蓄積されてきた文化であることに気づき、郷土と国土に対する正しい理解と愛情を育てることを目標とする。	
		比較文化論－世界の文化	明治維新後、約140年間で日本は近代化を成し遂げ、経済・文化・科学などの諸分野で世界の中で枢要な地位を占めるまでになった。これを可能にしたのは、日本文化の伝統の力である。日本は中国を中心とする東アジア文化圏の中にありながら文化の独自性を守り、近代合理主義を受容する土台を築き上げていった。それ故に、近代西洋文明と接触するや否やそれを自家菜籠中の物にし、アジアで最も早く近代国家となることが出来ました。従って、ここでは日本文化の独自性と日本人の優れた資質を踏まえ、近代文化の根底をなす合理主義発生の土壌と歴史的展開を西洋の歴史と文化の中で見出そうとするものである。	
		文学入門－小説・詩の世界	近代から現代に至るまでに多くの作家が登場し、それぞれの作品を世に問うてきた。そして、それらの作品は、その時代に生きる人々に大きな夢や希望を与え、生きる指針を示してきた。小説や詩歌など、いわゆる言語芸術（文学作品）は、それが書かれた時代の「人間の在り方、生き方」と強く結びつき、不可分の関係にある。本授業では、そうした作家や作品が持つ時代性と芸術性（文学性）を探ることを中心に学習し、ひいては私たちの生き方、時代との関わり方をも見直し、文学作品の持つ意味を確かめたい。	
	外国語	ベーシックコミュニケーションⅠ	グローバル化が進む現代社会においては、大都市だけではなく地方都市においても外国人と接する機会は今後増えるであろう。この授業では自己紹介・出会い・家族・日常の行動・衣類・買い物など身近な題材をもとに日常英会話に必要な基本的な語彙・表現方法を学ぶ。日常生活を軸に身近な英語表現に慣れ親しむことで、初めは単語レベルでも構わないので、間違いを犯すことを恐れることなく、臆せずに積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	
ベーシックコミュニケーションⅡ		ベーシックコミュニケーションⅠに引き続き、趣味・食事・スポーツ・家・過去の行動・目標と夢など身近な題材をもとに基本的な語彙・表現方法を学ぶ。ペアワークやグループワークなどの言語活動を通して、聴く力・話す力・考える力を身につける。また外国人講師とのディスカッションを通して英語を道具として自分の考えや意見を他者に伝える能力を養うことにより、社会の一員として他者との関わりを円滑に進めるためのコミュニケーション能力の向上を図る。		

教養分野科目	外国語	アドバンストコミュニケーション I	現代のグローバル化社会においては外国はもはや遠い存在ではない。とりわけ海外旅行を通じて、異文化に触れる機会を得ることは高いハードルではない。この授業ではイギリス、ニュージーランド、タイ、アイルランドへ出向く日本人とアメリカ人の旅行記を通じて、旅先での様々な場面における英会話表現を学ぶ。言葉に不自由することなく、海外旅行を楽しめる英語力を習得し、さらに英語を通じて外国の事情や異文化について興味・関心を持つとともにそれらに対する理解を深めることを目的とする。	
		アドバンストコミュニケーション II	観光を目的とした数日間の海外旅行だけではなく、在学中に海外語学研修に参加したり、卒業後に長期の海外留学を経験することにより、英語コミュニケーション能力を向上させることに加えて、より視野の広い国際感覚を身につけることが可能となる。この授業では海外に滞在・留学する際に必要な会話表現を学ぶことにより、ひいては外国の人々の暮らし、文化や世界の出来事にも目を向け、国際的な視野の拡大を図り、多様な考え方を持つ人と交わろうとする態度を養う。	
		テクニカルコミュニケーション I	ベーシックコミュニケーション I・II 及びアドバンストコミュニケーション I・II で学んだ一般的な英語コミュニケーション能力を基盤として、科学技術英語に関する初歩的な知識の習得とその知識を背景としたより専門的な英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器に関する問題の特定、調査及び説明の仕方を学ぶことと、職場で一般的に見られる英語の標識を理解するとともに、材料、道具、機器等を英語で表現できるようにすることである。	
		テクニカルコミュニケーション II	工学・科学技術等の専門分野における英語コミュニケーション能力を高めるための必要不可欠な要素の一つが一般的な英会話では学ぶことのない専門用語を習得することである。この授業では科学技術英語に関する基本的な知識と専門用語の習得を目指し、工学・科学技術分野における英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器の使用方法や機能について英語で説明する表現を学び、また基本的な計算や数値、統計などに関する表現方法を学習する。	
		テクニカルコミュニケーション III	日本国内の中小企業であっても開発した製品や技術を海外に輸出するなど、海外企業との関わりを切り離して考えることはできない。取引相手がタイやベトナム、インドネシアなど東南アジアの新興国の企業であったとしても、共通の言語となるのは英語である。この授業では海外企業との取引を念頭に科学技術英語に関する応用知識の習得と専門知識を基盤とした英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器の操作や修理方法、使用説明書などを英語で説明する能力を養う。	
		テクニカルコミュニケーション IV	日本国内の中小企業であっても東アジア・東南アジアなどを中心に海外企業と提携を結んだり海外に支社を設立している企業は少なくない。このような状況下では技術者であっても海外に赴任して仕事をやる機会はあるといえる。この授業では科学技術英語に関する発展的知識を習得することにより英語コミュニケーション能力を兼ね備えた国際的に活躍できる中堅技術者の養成を目的とする。具体的な内容としては、ロジスティックスやリサイクルの手順に関して技術面を中心に議論する。	
		ビジネスコミュニケーション I	ベーシックコミュニケーション I・II 及びアドバンストコミュニケーション I・II で学んだ一般的な英語コミュニケーション能力を基盤として、ビジネス分野における基本的な英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、海外出張、国際的な展示会への参加、アポイントメントの取り方など、具体的なビジネスシーンを想定した教材を用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、基本的な語彙や口語表現の修得を目指す。	

教養分野科目 外国語	ビジネスコミュニケーションⅡ	ビジネスの現場で円滑に英語でコミュニケーションが取れるようになるためには、ビジネス分野で必須の語彙の習得が不可欠となる。この授業ではビジネス・コミュニケーションⅠに引き続き、国際的なビジネスの場で必要とされる英語コミュニケーション能力を養成する。具体的な内容としては、実際のビジネスシーンを想定した教材を用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、ビジネス分野に関する基本的語彙や口語表現の修得を目指す。	
	ビジネスコミュニケーションⅢ	日本国内の中小企業でも海外企業との取引を行っている企業は非常に多く、企業の貿易部門などでは英語を始め外国語の運用能力を備えた人材が不可欠である。この授業ではビジネスコミュニケーションⅡに引き続き、国際的なビジネスの場におけるより円滑な英語でのコミュニケーション能力の養成を目指す。具体的には、会社の紹介、取引先への訪問、商品の発注など、具体的なビジネスシーンを想定したテキストを用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、基本的語彙や口語表現の習得を目指す。	
	ビジネスコミュニケーションⅣ	日本国内の中小企業であっても東アジア・東南アジアなどを中心に海外企業と提携を結んだり海外に支社を設立している企業は少なくない。このような状況下では技術者であっても海外に赴任して仕事をする機会はあるといえる。この授業では科学技術英語に関する発展的知識を習得することにより英語コミュニケーション能力を兼ね備えた国際的に活躍できる中堅技術者の養成を目的とする。具体的な内容としては、ロジスティックスやリサイクルの手順に関してビジネスシーンを想定し議論する。	
	リスニングⅠ	オーラルコミュニケーションに必要な能力は言うまでもなくスピーキングとリスニングの能力である。この授業では人の名前や日付、物と物との位置関係を表す場所表現など英語圏で生活をする際に必要な基本的表現のリスニング能力を養成する。単語レベルのディクテーションによりリスニング能力の定着度の確認を行う。また英語の強弱アクセント及びイントネーションに慣れるために、ペアワークによる発音練習を多く取り入れ、担当教員による発音指導を行う。	
	リスニングⅡ	リスニングⅠに引き続き、毎回の授業でできるだけたくさん英語を聞き取り、「英語耳」を作ることを目的とする。具体的には、買い物をする際に必要な金額の聞き取りや商品説明、道案内など、より発展的な内容のリスニング能力を養成する。フレーズレベルのディクテーションによりリスニング能力の定着度の確認を行う。またペアワークによる会話文の発音練習を多く取り入れ、ナチュラルスピードの会話に現れる英語特有の音に慣れることを目指す。	
	TOEICⅠ	日本の大学及び企業において学生や社員の英語コミュニケーション能力を測定するための英語資格試験としてTOEICが定着していることは否定できない。しかしながら、高等学校までは英語の資格試験としては依然として英検が主流となっているため、大学生の多くはTOEICの試験形式に慣れていない。この授業ではまずTOEICの試験形式を理解し、演習問題を解くことによりPart1～Part7までの各パートの出題形式に慣れることを目的とする。	
	TOEICⅡ	TOEIC試験はPart1～Part4までのリスニングセクションとPart5～Part7までのリーディングセクションに分かれているが、各パートともに出題される問題の難易度は前半部分が比較的易しく、後半になるにつれ次第に難易度が上がる。この授業ではTOEICのスコアを着実にアップさせることを目的とし、各パートの前半に出題される比較的難易度の易しい問題を確実に解けるようになるように、基本問題の演習を繰り返し行う。	
	TOEICⅢ	TOEICの試験形式に慣れ、各パート毎に難易度の易しい問題を確実に解ける力が付けば、さらなるスコアアップを目指すこととなる。その秘訣は繰り返し演習問題を解くことに加えて、各パートの難易度の高い問題を攻略するために出題のパターンを理解し、出題パターンに応じた解法を会得することである。特にリスニングセクションの各パートでは解法のポイントを押さえておくことは、飛躍的なスコアアップにつながる。この授業では出題パターンを瞬時に分析し、正確に解答できる力を身につける。	

教養分野科目	外国語	T O E I C IV	基礎的な英語力が備わり、毎回ある程度着実に一定レベルのTOEICのスコアを獲得できるようになった学生でも、100問あるリーディング問題を75分間で完問することは非常に難しい。この授業では時間の有効な使い方をマスターすることで、リスニングセクションの各パートの後半に出題される比較的難易度の高い問題も解ける力を養成する。またリーディングセクションにおいても問題を解く順序や時間配分をマスターし、75分で100問を解く力を身につける。	
		海外語学研修 I	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
		海外語学研修 II	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
		海外語学研修 III	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
		海外語学研修 IV	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
キャリア形成		日本語の基礎	日本語の能力は、単に情報収集や情報発信のために必要であるだけでなく、あらゆる科学を学ぶ者にとって思考力の基盤をなす意味においてもきわめて重要である。本科目は日本語の基礎学力が不十分な新入生を対象とし、基本的語彙の確認からはじめ、文章を正確に読解する方法と誤解のない文章の表現方法の基礎を演習形式で指導する。日本語を母国語としない留学生に対しても、本科目の受講を推奨する。	
		日本語表現法 I	日本語の能力は、単に情報収集や情報発信のために必要であるだけでなく、あらゆる科学を学ぶ者にとって思考力の基盤をなす意味においてもきわめて重要である。本科目は、平易な論説文を正確に読解する方法と論理的な文章の表現方法の基礎を演習形式で指導する。また、社会人として必要な敬語の基礎についても指導する。	

教養分野科目	キャリア形成	日本語表現法Ⅱ	「日本語表現法Ⅰ」を受講した学生を対象に、やや高度な説明文を正確に読解する方法と、読解した内容を元に自らの思考を加え論理的な文章として表現する方法を演習形式で指導する。Ⅰとの違いは、扱う文章の専門性や論理性が高度になることにとどまらず、論理的な文章を読み書きすることを通して思考力を養うことにある。	共同
		キャリアデザインⅠ	学生が、職業人生を考えるためのプラットフォームを提供し、職業観を養成することの助けを行う科目である。社会と経済の仕組み、産業構造の変化、日本の雇用環境の特質などを理解し、仕事の意義、職場の種類、職業人生の組み立て方法などの概要を指導する。単なる知識の一方的な伝達にならないよう、講義と演習を組み合わせ理解を促す。講義の最後には各自の人生設計のロードマップ（キャリアシート）のラフスケッチを描けることを目標とする。	共同
		キャリアデザインⅡ	学生が各自の専門性を生かしながら、実際に自分に合った職業を選択するために必要な知識と技術を指導する。身近な社会人の観察や聞き取り調査など、単なる知識の一方的な伝達にならないよう、講義と演習を組み合わせ理解を促す。講義の最後に、キャリアデザインⅠで作成した人生設計のためのキャリアシートをより現実的なものに修正することを目指す。	
		キャリアゼミⅠ	キャリアゼミはキャリア教育の一環として、社会人基礎力の涵養を目的とし、教養科目および専門科目を有機的に融合するように、1年次と3年次に継続的に配置した少人数制によるゼミ形式の演習科目である。本科目はその第1段階として入学直後の新入生を対象に、大学で学ぶことの意味と学び方、意義深い大学時代を過ごすための生活の仕方などを、教員や他の受講生との自由なディスカッションを通じて考えるための科目である。同時に、会話によるコミュニケーションの基本を身につけることを目的とする。	
		キャリアゼミⅡ	キャリアゼミの第2段階として、前期での大学生活を顧みて学習の習熟度を自ら判断させ、それを一層向上させるために教員との対話・討論を通して、自主的な学習の重要性を理解させる。また、所属学部・学科の専門性に添った学習方法について理解させる。さらに、学習の成果を他者に伝えることを通じて、コミュニケーションを図る上での感性の大切さや、社会生活におけるマナーを理解させ、大学生としての教養と人格の育成を図る。	
		キャリアゼミⅢ	キャリアゼミの第3段階として、専門分野に関する対話や演習を行うことにより、専門性に対する理解度を向上させ、各自のキャリアの方向性を考える指針を与えることを目的とする。3年生前期はその後の就職活動の準備をする上できわめて重要な時期であり、教員および他の学生との活発な討論を通して、それぞれの所属学科に関連した業界および職種について理解を深め、各自の価値観の育成を図ると同時に、各自が目ざす職業へ向けて具体的な準備の方法を指導する。	
		キャリアゼミⅣ	キャリアゼミの最終段階として、専門科目の内容を具体的な職業と関連づけて理解し、各自の専門性を通して社会に貢献する方法を考えさせる。これにより、学生の社会への参加意識を育て、各自の将来設計に向かって行動するための意欲を育成する。また、就職活動を具体的に進めるために必要な知識やスキルを指導する。	
		インターンシップA	企業や行政機関など社会の中で学習の成果を試し、同時に労働の実際について体験的に学ぶ研修、いわゆるインターンシップを希望する学生のための演習科目である。仕事に臨む心構えや社会人としてのマナーなどを事前に指導し、レポート課題に合格した学生を対象に大学が研修先を紹介する。研修を通して実社会に対する見聞を広め、各自の進路選択に役立てることが目的である。	

教養分野科目 キャリア形成	インターンシップ B	インターンシップを希望する学生のための演習科目である。「インターンシップA」との違いは、学生各自の専門性や学科の事情に添って研修を行う点にある。仕事に臨む心構えや社会人としてのマナーなどを事前に指導することは同様であるが、より専門性に基づいた指導が行われる。研修先は大学が紹介する場合と、教員の指導の下で学生自らが受け入れ企業に直接コンタクトをとる場合とがある。研修を通して実社会に対する見聞を広め、各自の進路選択に役立てることが目的である。	
	地域共生学	地域社会で顕著な活躍をされている方々を客員教授に迎え、さらに地域貢献において特徴ある活動を行っている本学教員も教壇に立つ。それぞれの立場および活動事例を通して、地域の産業・経済、企業や工業技術、地域文化などについて学ぶとともに、地域社会との関わり方、海外と地域との関係、あるいは社会人として必要な教養や責任感、倫理観、職業観、常識とはどのようなものかを考え、理解を深める。	
	テクニカルライティング	自然科学の基礎知識から、具体的課題を受講生各人が自ら選定し、自ら解を見つけ出すべく自己学習を行い、その結果をレポートとしてまとめ上げることは、大学教育の基本的な要素であり、同時に重要なキャリア形成教育の一環でもある。本授業は、その準備教育として科学/技術レポートの書き方の基本を学生が身につけることを目的としている。そのために、授業はレポート作成練習を中心とした演習形式の授業とし、レポート作成のルールと基本スキルを短期間に修得するための科目である。	
	プレゼンテーション	科学者は、自ら選定したもしくは他から与えられた解決すべき課題について、学習と研究により解決策を探求し、結果をレポートとしてまとめ上げるだけでは不十分であり、その内容について他者に正確に説明できる能力も必須である。本授業は、学生がこの説明能力とプレゼンテーション力の基本を身につけることを目的としている。そのために、授業はプレゼンテーション練習を中心とした演習形式の授業とし、プレゼンテーションの基本スキルを短期間に修得するための科目である。	
	課題研究	科学/技術レポートとしてまとめ上げるための基本スキルの修得授業であったテクニカルライティング、また、他者へ正確に説明するための基本的スキルの習得授業であったプレゼンテーションを受講した後、これら基本スキルの実践の場として受講生自らが選定した具体的課題を対象に、受講生自らがより深く課題に取り組み、創造力の育成を目的とした課題研究を行う授業である。そのために、授業は自由研究方式とし、最後に実施内容・結果についてまとめ、報告書として提出し、プレゼンテーションにより評価を受ける演習科目である。	
	コンピュータリテラシ	高度情報化社会においては、あらゆる場面で情報技術を利用する機会がある。一方で、情報技術は社会に多大な影響を与え、その利用に関する課題が露呈している。この科目では、コンピュータやネットワークの仕組みを理解し、ソフトウェア利用技術を習得すると共に、情報技術が社会に与える影響について検討することで、高度情報化社会で求められる、情報の利活用に関する倫理観の養成を目的としている。授業においては、紙媒体の補助教材に加え、マルチメディア教材を併用し、情報技術やその周辺に関する話題を身近なものにするよう工夫する。	
	科学基礎	大学における数学科目、特に「微分積分学Ⅰ」への移行を円滑にするために、高校数学の「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に取り扱う。この科目では、講義形式並びに演習形式を併用し、大学における専門科目を理解するための基礎の習得及び学習意欲の向上を目的としている。具体的な内容は、文字式の計算、式の展開・因数分解、分式及び無理式の計算、剰余定理・因数定理、1次方程式・2次方程式、図形と方程式、1次関数と2次関数、無理関数、分数関数、三角比、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。	

教養分野科目 科学基礎	基礎数学 B	大学における数学科目、特に「微分積分学Ⅰ」への移行を円滑にするために、高校数学「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に扱う。この科目では、講義形式並びに演習形式を併用し、大学における専門科目を理解するための基礎の習得及び学習意欲の向上を目的としている。具体的な内容は、1次関数と2次関数、無理関数、分数関数、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。特に、「微分積分学Ⅰ」への接続を踏まえ、関数の概念及びグラフの作成等、関数の形状を表現することに重点を置く。	
	基礎数学 AB	大学における数学科目、特に「微分積分学Ⅰ」への移行を円滑にするために、高校数学の「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に扱う。この科目は、「数学基礎A」の内容に対する理解が十分である受講生、及び、「数学基礎B」において学習進度に遅れが生じた受講生を対象に、両科目を補完する内容と位置付けている。具体的な内容としては、2次関数、無理関数、分数関数、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。可能な限り少人数のクラスを編成し、講義形式並びに演習形式を併用する一方で、より多くの問題に取り組む。	
	微分積分学	自然や社会において全体構造の理解を進める上で、微分法及び積分法は重要な役割を担う。この科目では、高校「数学Ⅱ」から「数学Ⅲ」までを基礎とし、1変数に関する微分法・積分法の理解、及びその応用の習得を目的としている。具体的な内容としては、関数の定義、様々な関数、関数の極限と連続性、微分係数と導関数の導入、関数の微分法、微分法の応用、不定積分、部分積分法、定積分、定積分の応用を取り扱う。また、「基礎統計学」への接続を考慮し、指数関数や正規分布等、様々な確率分布関数を提示し、これらの関数の微分・積分についても説明する。	
	科学リテラシ	科学リテラシは、個人の意思決定及び社会問題への参与、並びに経済の生産性向上に必要な科学的概念・手法に対する理解である。この科目では、社会や大勢に扇動されない客観的的思考の意義を理解し、客観的思考力を養成することを目的としている。具体的な内容としては、日常生活で体験する物事に対する問題提起から問題解決、自然現象の説明や予測、メディア発の情報に対する客観的な分析、これらに関する他者とのコミュニケーションを取り扱う。実施にあたっては、多方面の事例を取り上げると共に、受講生同士が意見を交わす、グループ討論の場を積極的に設ける。  (オムニバス方式/全15回) (3 山西 輝也/2回) 2. 情報とは何か 3. コンピュータの進歩と社会 (4 杉原 一臣/5回) 1. ガイダンス 8. まとめ1 9. だまされない統計の読み方 10. データマイニング入門：買い物の中身から法則を発見する 15. まとめ2 (11 鈴木 晋一郎/1回) 7. 窒素循環と地球環境 (15 蔵田 浩之/1回) 11. 化学物質は「怖い」もの？ (18 谷内 眞之助/2回) 5. 「まなび」と「まねび」 1-創造に至る日本的発想の原点- 6. 「まなび」と「まねび」 2-創造に至る日本的発想の原点- (19 芦田 浩之/2回) 12. 「視覚」の秘密 1-私たちの眼は何をしているのか- 13. 「視覚」の秘密 2-私たちの眼は何をしているのか- (23 吉村 喜信/1回) 4. 木の魅力について (34 野尻 (藤本) 奈央子/1回) 14. スポーツとユニバーサルデザイン	オムニバス方式
	基礎物理学	物理学は、数学等と共に自然科学の学問を理解する上で最も基礎となる科目である。この科目では、高等学校で物理を選択しなかった、あるいは、物理に対する理解が不十分な学生を対象に、物理の基本的な考え方、ものの見方を習得することを目的としている。具体的な内容としては、力と運動、運動の法則、力学的エネルギー等、高等学校「物理Ⅰ」の力学を中心に取扱い、実施にあたっては、デモンストレーション等、対象学生の受講に配慮している。また、各学科における物理学系専門科目への接続を意識した教科書選定を行うと共に、可能な範囲で少人数クラスを編成する。	

教養分野科目	科学基礎	基礎生物学	生物学は、生命現象を対象とする自然科学の一分野であり、「基礎生命科学」等と共に、人間が自然と調和した生活を営む上で重要な学問である。本科目では、生物を構成するDNA及び遺伝子の構造、細胞の構造及び機能、人間と環境の関わり、食物連鎖等を取り扱い、人間とそれを取り巻く環境の役割を理解することを目的としている。実施にあたっては、クラスサイズに留意すると共に、各学科の専門科目への接続意識したクラス編成を行う。また、本科目とは別に開講される「環境・情報倫理」との連携を意識し、受講生が環境に関する行動の指針を定める上で、参考となる情報を提示する。	
		基礎化学	我々の生活を支える物質の性質を理解するためには、化学に基づく視点が必要不可欠である。この科目では、高校までに学習してきた知識を固めると共に、原子・分子のレベルから、分子の集まりである複雑な系の挙動までを体系的に学ぶ。具体的な内容としては、物質の定義及び性質、物質の状態・構造、化学結合、分子と物質量、化学反応、酸と塩基、酸化と還元である。実施にあたっては、基礎知識の体系的把握を中心とする学科、応用面を重視する学科等、化学の専門的知識の必要性の程度に学科間で差があるため、教科書の選定及び教授法において、学科カリキュラムの特色を十分に考慮する。	
		基礎生命科学	生命科学は、生命現象を対象とする自然科学の一分野であり、「基礎生物学」等と共に、人間が自然と調和した生活を営む上で重要な学問である。現代社会は「生命」領域を抜きに語ることはできない。この科目では、生命現象を科学的に理解することを目的としている。具体的な内容としては、生命の定義、遺伝子の構造、細胞の働き、遺伝子組み換え技術の原理・応用を取り扱う。また、生活習慣と健康、寿命と老化、環境汚染等、世間で広く認知されている関連事例を多数取り上げることにより、受講生が生命科学の現状を認識し、その展望を熟思する機会を適宜設ける。	
		基礎統計学	我々の身の周りには様々な情報が溢れている。数値データはそういった情報の1つであるが、データに内在する特徴を見出すためには、的確にデータを集計し、処理する方法を備えておく必要がある。この科目では、数値データから重要な情報を取り出すための考え方及び統計手法を習得することを目的としている。具体的な内容としては、統計の意義、統計図表の特徴、統計指標の算出、回帰と相関、確率と確率分布、様々な確率分布、統計的推測、統計的検定を対象とする。また、各学科の専門科目に役立つ統計手法のみならず、情報化社会における数値情報の活用方法についても検討する。	
		統計学演習	「統計学基礎」において、統計指標の算出、統計的推定及び統計的検定等、統計に関する基礎的な知識を一通り習得している。この科目では、実践的な統計的手法の演習を通じて、「標本」という部分的情報から「母集団」という全体の特徴を推測するという、「推測統計」の考え方を理解することを目的としている。具体的な内容としては、度数分布表の作成、単回帰分析、相関分析、母集団平均及び分散の区間推定、母集団平均及び分散の検定、適合度検定を取り扱う。実施にあたっては、データそのものに対する関心を高めるため、いずれの演習においてもデータの収集から着手する。また、結果に対する考察をグループで実施する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(環境情報学部 経営情報学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 分 野 科 目	学 部 共 通 科 目	環境情報学概論	<p>21世紀を迎えた先進国では、前世紀的な大量生産・大量消費を前提とした工業社会の前提が徐々に崩れつつある。その一方で、少子化・高齢化・エネルギー問題・地球環境問題・食糧問題などの深刻化により、持続可能な社会の実現に向けて、「環境」および「情報」分野に端を発したイノベーションとものづくり至上主義でない総合的な視点による問題解決が期待されている。本科目では、「環境」と「情報」の視点から社会の現状を認識し、環境情報学部で学ぶ学問の見取り図を理解するための入門用科目である。同学部に所属する教員がリレー形式で講義し、受講生は講義で展開される専門性の広がりや個別の問題から、環境情報学の概念を理解し、知的刺激を受けると同時に、各自の専門性の選択に向けた示唆を受ける機会とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 松岡博幸/2回) 「環境負荷と環境コスト」</p> <p>(8 藤原明広/1回) 「ユビキタスシステムによる新しい社会情報ネットワーク」</p> <p>(16 川島洋一/2回) 「環境情報学による21世紀型社会の価値づくりに向けて」 「歴史的環境と持続可能な生活環境」</p> <p>(12 田中智一/2回) 「資源リサイクルと廃棄物処理」</p> <p>(13 草桶秀夫/2回) 「生物多様性から見る地球環境問題」 「生物資源の有効利用」</p> <p>(14 廣瀬重雄/1回) 「生分解性プラスチックの応用可能性」</p> <p>(17 池田岳史/1回) 「環境デザインと情報デザイン」</p> <p>(20 山内 勉/1回) 「サステイナブルデザインの思考」</p> <p>(26 辰巳佳次/1回) 「環境計測と環境保全」</p> <p>(27 原道寛准/1回) 「太陽エネルギーの有効利用と太陽光発電のこれから」</p> <p>(28 笠井利浩/1回) 「ライフサイクルアセスメントによる持続可能な社会の実現 (2回)」</p>	オムニバス方式
		環境・情報倫理	<p>近年、環境保存型社会への移行を狙いとして、生活様式や企業活動の形態を改める規範「環境倫理」が示されている。一方で、情報化社会における情報の扱い方に関しても、同様の規範「情報倫理」が存在している。持続可能な社会の実現に向けては、これらの倫理意識を高めることが強く要請されている。この科目では、持続可能な社会の形成に求められる2つの倫理観について学び、これらの倫理観の向上を目指す。実施にあたっては、倫理観が問われる事例を提示し、倫理観の欠如が身近な状況で起こり得ることを説明する他、より良い社会を形成するための議論を展開する。</p>	
		知的財産概論Ⅰ	<p>知的財産は、人間の創造的活動により生み出される無形の産物であり、我々の周囲にも多く存在している。一方で、社会にはこの種の無形資産を保護する法律があり、知的財産の創造において、ルールに対する正しい認識は必要不可欠である。この科目では、知的財産及びその周辺の知識を習得し、知的財産活動を日常的に実践する姿勢を確立することを目的としている。具体的な内容としては、知的財産及び知的財産権の定義、知的財産保護の意義、特許権、実用新案権を取り扱う。また、知的財産の存在を実感できるよう、国内外の事例を多数取り上げる。</p>	
		知的財産概論Ⅱ	<p>知的財産は、人間の創造的活動により生み出される無形の産物である。この科目は、「知的財産概論Ⅰ」に引き続き、無形資産の1つである知的財産に対する正しい認識を持つことを目的としている。具体的な内容としては、意匠権、商標権、著作権、著作者に類似する権利、その他の知的財産権を扱う。一方、知的財産に関するルールは各国において明文化されているものの、「産業保護」と「自由な利用」という2つの要請において衝突が後を絶たず、様々な場面で争われている。こういった論争の軌跡を受講生に示すことで、知的財産の保護の在り方を適宜議論する。</p>	

専 門 分 野 科 目	学 部 共 通 科 目	社 会 調 査 論	社会における人々の意識や行動の実態を把握するために、インタビューやアンケート等による調査が頻繁に行われている。この科目では、社会調査の意義と共に、様々な調査の方法を習得することを目的としている。具体的な内容としては、社会調査の定義、統計的調査の方法、標本抽出の方法、社会調査の実例、社会調査の問題点を対象とする。社会調査は、理系・文系を問わず、様々な分野・場面において用いられていることから幅広く応用が可能であり、各学科の専門に応じたテーマを取り上げたり、コンピュータを用いて調査結果を集計したりする等、実践を見据えた社会調査の演習を行う。	
		環 境 情 報 学 演 習 基 礎	PBL (Project Based Learning) は、学生が主体的にプロジェクトを遂行し、その経験から気付きや学びを得る教育手法のことである。この科目では、初めてPBLに取り組む学生を対象にPBLについて解説するとともに、身のまわりにある課題の解決を目標に数名のチームでプロジェクトを遂行し、プロジェクトマネジメントの基本を身につける。さらに、プレゼンテーション能力向上のため、得られた成果をPBL発表会において発表する。	共同
		環 境 情 報 学 演 習 I	この科目では、環境情報学演習基礎で得た知識を基に、自ら選択した環境もしくは情報に関連する課題の解決を目指し、数名のチームでプロジェクトを遂行する。これらの過程を通して、プロジェクトの基礎知識（プロセスや問題解決手法）、プロジェクトの遂行に必要な行動・思考特性（特にチームワークやステークホルダーと合意しながらの作業）を修得する。さらに、第三者でも分かりやすい報告書の書き方およびプレゼンテーション能力を身につける。	共同
		環 境 情 報 学 演 習 II	この科目では、環境もしくは情報に関連して教員がRFP (Request For Proposal) を提示した中から学生が案件を選び、学生自身の手でプロジェクトを実施していく。これにより環境情報学演習Iで学んだことを「知っている」レベルから「実行できる」レベルにステップアップさせる。さらに、プロジェクト終了後にPBL遂行中に発生した問題やそれらへの対策、およびその効果について事後分析を行い、学科もしくは学部の関係者に向けて発表する。	共同
		環 境 情 報 学 演 習 III	この科目では、環境情報学演習IIで取り組んだプロジェクトを継続し、遂行過程で発生する様々な問題・課題を深く掘り下げながら、プロジェクト完了に向けてチームによるプロジェクト運営を行う。これにより、これまでのプロジェクト遂行において自ら不足を感じた個人レベルの技術やヒューマンスキル、コミュニケーション能力の向上を目指すとともに、課題解決のための調査力および洞察力を高める。	共同
専 門 基 礎 科 目		経 営 情 報 学 概 論	企業や社会を取り巻く環境は急激に変化しており、特に、国際化の波は看過できない事項の1つである。この国際化の波を推進するものとしては、情報通信技術の進歩が挙げられる。この科目では、具体的な事例を交えて、企業や職場を含む、我々の身の回りの物事を情報通信技術の視点で捉え、その発展の過程を正しく認識すると共に、企業経営における情報通信技術の果たす役割をより深く理解することを目的としている。内容としては、コンピュータの登場とデジタル化、情報化による経営情報システムの変遷などを取りあげる。この科目を通して、受講生が今後自身の備えるべき専門性を考察し、2年次における円滑なコース選択に繋げられるよう促す。	
		ビ ジ ネ ス シ ミ ュ レ ー シ ョ ン	企業における経営活動では、現状を十分に理解し、的確な意思決定を短期間に行うことが常に求められている。この科目では、企業経営と情報化について学ぶと共に、金銭の移動及び複数回の意思決定を伴うビジネスゲームを実践する。ビジネスゲームの演習では、受講者を複数のチームに分けて、その業績を競わせる。この過程において、事業計画、データ分析及び意思決定等の作業があり、受講生は経営活動に関するPDCAサイクルの回転を体験する。この科目の目的は、企業経営における留意事項をより深く理解すると共に、役割分担に基づく組織内でのコミュニケーション等、実際の企業経営で求められる様々な能力に対する意識を高めることである。	
		簿 記 原 理 I	企業経営において、経営活動の記録、記録に基づく活動の評価は必要不可欠である。簿記に関する技術は定量的な企業評価の基礎であり、企業経営を担う人材の備えるべき素養の1つである。この科目では、企業や個人商店の経済活動、経済事象を継続的に記録・計算・整理する「複式簿記」の習得を目的としている。複式簿記は、全ての簿記的取引を貸借平均の原理に基づいて処理する記帳法であり、企業の決算報告では複式簿記の原則で作成された資料の公表が義務付けられている。この科目においては、複式簿記の構造および一巡の手続と、商品売買取引及びそれらにまつわる項目の処理の習得に重点をおいて説明する。	

専門分野科目	専門基礎科目	簿記原理Ⅱ	企業経営において、経営活動の記録、記録に基づく活動の評価は必要不可欠である。簿記に関する技術は定量的な企業評価の基礎であり、企業経営を担う人材の備えるべき素養の1つである。この科目では、「簿記原理Ⅰ」の内容を踏まえて、固定資産、資本金、収益及び費用の処理等、各種の期中取引の処理と決算手続を習得し、さらに、試算表作成及び精算表作成を行い、財務諸表の作成までの簿記一巡の手続きを理解することを目的としている。この科目は、「上級簿記Ⅰ」、「上級簿記」及び「原価計算」などの上位科目への接続科目であり、2年次コース選択の基点となる。	
		政策システム概論Ⅰ	政策科学とは、国家や地方自治体のみならず、企業や非営利団体において問題となる政策課題やその政策の費用対効果、政策の適切な方法や社会的背景等を研究する学問である。本科目は、これから政策科学を学んでいく初学者に対して政策科学への招待、政策事情紹介を主たる目的としている。内容としては、具体的事例の提示及び展開を通じて、学際的な政策科学への初歩的導入を主な役割とするものである。社会的経験が少なく、抽象的概念操作にまだ習熟していない一年生に、専門分野の事例を通して政策科学の対象と方法を俯瞰してもらう。本科目では、主に社会保障及び環境に関する問題事例について説明を行う。千葉講師8回、採用予定教員7回。	共同
		政策システム概論Ⅱ	政策科学とは、国家や地方自治体のみならず、企業や非営利団体において問題となる政策課題やその政策の費用対効果、政策の適切な方法や社会的背景等を研究する学問である。本科目は、これから政策科学を学んでいく初学者に対して政策科学への招待、政策事情紹介を主たる目的としている。内容としては、具体的事例の提示及び展開を通じて、学際的な政策科学への初歩的導入を主な役割とするものである。社会的経験が少なく、抽象的概念操作にまだ習熟していない一年生に、専門分野の事例を通して政策科学の対象と方法を俯瞰してもらう。本科目では、主に経済及び都市・地方自治体に関する問題事例について説明を行う。千葉講師8回、採用予定教員7回。	共同
		情報数学	コンピュータ技術の発展にともない、そこで用いられる数学的素養の重要性は日々高まっている。このため、この講義では、情報科学に必要な数学の基礎を適宜演習をしながら学ぶ。当授業の前半は、計算機科学の基礎である離散数学とグラフ理論の本質を分かり易く工学的立場から講義し、情報技術で用いられている応用例を解説する。また後半は、情報と通信の基礎となる情報理論と符号化の基礎的内容について具体例を示しながら講義を行い、情報科学に必要な数学知識の習得を目指す。	
		情報処理概論	マルチメディアやインターネットを背景にした情報社会の変化に伴い、情報の取り扱いには細心の注意が必要となっている。コミュニケーションを成立させる情報機器、情報デザインについても学ぶとともに、情報化社会における情報の意義、役割について理解を深め、情報公開、保護、責任といった情報の取り扱いについても学ぶ。さらに、放送、通信に関連する諸技術、情報通信ネットワークの基礎を学ぶとともに、インターネットの歴史及び関連する諸技術とマルチメディアコンテンツ、インターネットを含めたネットワークにおけるマルチメディア技術の利用動向についても学ぶ。	
		プログラミング実習Ⅰ	C言語を題材に、プログラミングの考え方、基本的なプログラムの書き方の習得を目指し、実習を行う。ここでは、プログラミングが全く初めてである学生を念頭におき授業を実施し、プログラム処理系の開発環境の使い方から始め、プログラム概念の獲得のためにプログラミングの処理手順の理解、そして簡単な命令を組み合わせたプログラム作成を目的とする。そのため、プログラミングの基本となる3つの制御構造である逐次と、繰り返し、反復の文法と処理の流れについて解説する。そして、与えられた課題をC言語で作成し、C言語の基本スキルを身につけることを目指す。	共同
		プログラミング実習Ⅱ	プログラミング実習Ⅱに引き続き、C言語を用いたプログラミングの方法の習得を目指す。単なる知識だけにとどまらず、自らプログラムを作成する能力を身につけることを考える。前期の「プログラミング実習Ⅰ」に続く本実習では、関数の活用法を理解することを中心に、ポインタやライブラリ関数のようなより複雑なデータ構造を扱えることを目指す。そこで、まず関数の定義、その関数に適切に引数を与えて戻り値を得ることができる、さらに関数の利用や作成にあたり、引数の参照渡しや配列や構造体を引数に取る場合を扱う。また、構造体を定義し、そのメンバに対して値を代入したり参照したりすることができることを目的とする。	共同

専門分野科目	専門応用科目	ハードウェア概論	電子工学は現代社会を支える基幹技術である。この講義では、これまで電子工学関係の授業を履修したことがない学生でも理解できるように、できるだけ実例を取り上げながら解説する。この講義によって電子回路とハードウェアの基本的な知識の習得と簡単な問題への対応力の養成を期待する。そして、ダイオードやトランジスタ、ICなどの半導体素子の理解と、それらを応用した電子回路について学習する。電子回路では、論理回路といくつかの応用事例を取り上げ、また、電子回路評価に必要な電子計測機器についても基礎的な知識を身につける。	
		マーケティング I	インターネットの普及も加え、多種多様なニーズや欲求、それをめぐる複雑多岐にわたる環境の中で存続・成長を目指す企業にとってマーケティングの役割はますます重要である。本科目では、現代企業にとってマーケティングがどのような役割と意義を持ち、いかに理解されるべきかについて学ぶ事を目的としている。具体的には、統合的マーケティングの視点から、意思決定プロセス、競争を構成する諸要素、意思決定分析に用いられる技術について、様々な事例を用いて実践的に説明を行う。講義を通じて、マーケティング戦略やアクション・プログラムを評価するために必要な知識・技術の修得を目指す。	
		マーケティング II	本科目では、マーケティング・リサーチについて、講義とケーススタディを通じて体系的な考察を行う。講義前半では、マーケティング・リサーチの方法論をテーマとし、マーケティング活動と消費者行動の分析や研究、マーケティング活動における戦略的有効性の質を向上させるための方法論に関する考察を行う。後半では、マーケティング・リサーチが個別戦略にどのように投影、活用されるかという問題に関する理解を深め、実際のマーケティング戦略において顕在化される諸プロセスを、ケーススタディを通じて模擬体験し、戦略的思考能力の向上を図る。	
		プレゼンテーション技法	企業経営のみならず一般社会において、プレゼンテーション技術は効果的に情報を相手に伝えるために必要である。一方、情報通信技術の発展に伴い、携帯情報端末やソフトウェア等、プレゼンテーションのためのツールは容易に入手できるようになり、プレゼンテーションにかかる手間は格段に軽減されている。この科目では、プレゼンテーションソフトを活用しながら、伝えるべき情報の表し方、プレゼンテーションコンテンツを構成する各要素の基礎の他、コンテンツ作成及びプレゼンテーションの実践方法を習得することを目的としている。特に、図表の使い方については、本や雑誌等の出版物の事例を交えて、その留意点を説明する。	共同
		ネットワークシステム論	情報ネットワーク網の拡大とそれに伴う複雑化によって、それらの運用と管理に関する知識の習得はシステムエンジニアを志す者にとっては必要不可欠である。本講義では、現在のネットワークプロトコルで主流となっているTCP/IPを中心にLANの構築からインターネットの安全運用の方法を体系的に学び、インターネットのしくみとその技術の基礎知識の習得を目指す。そこで、ネットワーク構築に必要なハードウェアの基礎を概説し、データの表現方法とビット演算、物理的な接続とソフトウェア的な接続について学習する。IPとルーティングとして、パケット配送とルーティングテーブル、ネットワークの分割の必要性、ホストとルータの処理、ARPテーブルを演習をしながら理解を深める。そして、TCPとUDPの処理とその特徴を論じ、ネットワークプロトコルとその階層性を議論する。	
		経営情報処理 I	実社会では、膨大な情報の中から重要な情報を引き出すために、コンピュータを活用した情報処理が頻繁に行われている。一方で、各家庭に情報端末が普及し、安価なソフトウェアが市販されるようになり、これらの活用により、ある程度の規模のデータ処理が可能となっている。この科目では、1年次「コンピュータリテラシ」の授業内容を踏まえ、表計算ソフトを用いた様々なデータ処理方法を習得することを目的としている。データ処理においては、度数分布、回帰分析及び相関分析等、広く一般的に用いられている統計手法を学ぶと共に、抽出された情報を視覚的かつ効率良く伝えるための図表作成方法についても検討する。	共同

専門分野科目	専門応用科目	情報セキュリティ	<p>今日、情報ネットワークシステムが身近となり、誰もが簡単にインターネットに接続して情報検索を行ったり、情報発信が行えるようになった。しかし、その反面、守るべき情報が漏洩する可能性も高くなり、情報のセキュリティ対策が不可欠となっている。本講義では、情報ネットワークにおけるセキュリティ技術を知り、その運用に必要な知識の習得を目指す。そこで、情報セキュリティの概念として、情報セキュリティの目的と情報の形態から始め、情報セキュリティの7要素を説明する。そして、リスクの顕在化の条件を述べ、時系列からの対策と管理方法からの対策を考える。リスクコントロールの4要素を理解した上で、不正アクセスとその対策を議論する。さらに、クロスサイトスクリプティングとサービス停止攻撃及びその対策やコンピュータウイルスからの脅威とその対策を学び、セキュリティに必要な技術の習得を目的とする。</p>	
		経営情報処理Ⅱ	<p>実社会における問題を数理的に解決するための分野として、オペレーションズリサーチがある。以前は、問題の数理モデルを解析するためのツールが十分ではなく、実社会への普及は進まなかったが、最近の表計算ソフトの高機能化に伴い、オペレーションズリサーチの手法を比較的容易に利用できるようになってきている。この科目では、表計算ソフトを用いて、様々な手法の演習を行い、問題解決に活用できる技術を習得することを目的としている。また、多数の制約条件を含む線形計画問題等、解の存在が保証されていない事例を取り上げ、各手法の抱える限界について説明する。</p>	共同
		生産管理工学	<p>日本企業の強さの源泉は、生産現場の持つ技術力に起因する。とりわけ、生産工程の最適化や品質の向上といった取り組みにおいては、統計学や行動科学等、複数分野の学問を基に確立した技法が多数存在する。この科目では、生産管理の意義やその技術体系に加え、生産管理に関連する技術について理解することを目的としている。特に、生産管理と非常に関連性の高い「品質管理」を重点的に取り上げ、「QC七つ道具」、「新QC七つ道具」、「ISO9000」及び「ISO14001」等、生産現場で頻繁に利用されるツール等について説明する。また、環境保全を目的とした生産管理における取り組みを適宜紹介する。</p>	
		データベース論Ⅰ	<p>情報化社会である現在、我々が扱う情報量は年々増加の一途をたどっている。そこで、本講義では、多くのデータを体系的に扱うために必要なデータベースの基礎概念を学習する。また、併せてSQLによるデータベース操作の方法を習得する。まず、ファイル編成の基礎として、ファイルシステムの種類と様々な編成方式(順編成、直接編成、区分編成、索引順編成、VSAM編成)を紹介し、階層モデルとネットワークモデル、関係モデルのデータベースの種類を論ずる。現在主流となっている関係モデルについて、表の概念と構造、キーの存在(候補キー、主キー、外部キー)や関係代数を用いた表の操作と正規化理論(非正規形～第3正規形、その他の正規形)を学ぶ。そして、SQLの基礎を学び、SQLを用いたデータベース作成の演習から理解を深める。</p>	
		上級簿記Ⅰ	<p>「簿記原理Ⅰ」及び「簿記原理Ⅱ」でも述べたように、企業経営において、経営活動の記録、記録に基づく活動の評価は重要である。特に、日本国内においては、近年、株式会社の設立に関する規制が緩和されことにより、株式会社に対する関心が高まりつつある。この科目では、株式会社に焦点を当て、当座預金、為替手形等の営業にかかる取引に加え、有価証券、固定資産及び社債発行等の営業外取引についても説明する。また、決算に関する処理については、海外における勘定締め切り方法を交えつつ、貸借対照表や損益計算書等の財務諸表の作成方法を紹介する。</p>	
		上級簿記Ⅱ	<p>この科目では、「上級簿記Ⅰ」に引き続き、株式会社における活動に焦点を当て、高度な会計処理を習得することを目的とする。特に、税務処理、利益処分、本支店会計といった、規模の大きい組織において行われる処理を取り上げ、起こりうる様々な手続きの誤りについて紹介し、その回避のための留意点を説明する。また、仕訳帳及び総勘定元帳等からなる「主要簿」、補助元帳及び現金出納帳等からなる「補助簿」といった帳簿の体系について解説すると共に、それぞれの役割と変遷について触れ、複雑化する帳簿体系の現状を概説する。この科目は、「管理会計論」及び「財務会計論」への接続科目である。</p>	

専門分野科目	専門応用科目	原 価 計 算	企業経営における活動は、生産活動（製造）と販売活動に大別される。「原価計算」は、それぞれの活動において、消費した対価を定められた目的に従って、集計、分析、報告する計算技術である。言うまでもなく、適切な原価計算無くして、適切な企業経営は行えない。この科目では、種々な原価計算の方法を取り扱うと共に、原価計算の意義と目的、及び最近の企業におけるコストマネジメントシステムを中心とした経営管理機能についても説明する。とりわけ、生産活動と販売活動における処理の相違を踏まえ、部門間での適切な経費配賦方法について解説する。	
		フ ァ イ ナ ン ス I	金融ビッグバンを経て、ファイナンスに関する知識は銀行・証券・保険会社のみならず、一般事業会社や個人の資産設計において必要不可欠な知識となってきた。本科目では、割引現在価値の考え方、不確実性下の投資家の意思決定、ポートフォリオ選択理論、資産価格決定理論に関する基礎的な知識を体系的に習得する事を目的としている。また、財務項目を用いたファンダメンタルな分析知識も合わせて紹介する。本講義は証券アナリストやファイナンシャルプランナー等の金融・保険関連の資格取得も目標としているので、「簿記原理Ⅰ、Ⅱ」や「リスクマネジメント」とあわせて履修する事が望ましい。	
		フ ァ イ ナ ン ス II	金融ビッグバンを経て、ファイナンスに関する知識は銀行・証券・保険会社のみならず、一般事業会社や個人の資産設計において必要不可欠な知識となってきた。本科目では、企業による投資の意思決定、資本構成問題、配当の意思決定、デリバティブの基本的考え方、債券価格分析等、コーポレートファイナンス、デリバティブに関する基礎的な知識を体系的に習得する事を目的としている。また、財務項目を用いたファンダメンタルな分析知識も合わせて紹介する。本講義は証券アナリストやファイナンシャルプランナー等の金融・保険関連の資格取得も目標としているので、「簿記原理Ⅰ、Ⅱ」や「リスクマネジメント」とあわせて履修する事が望ましい。	
		経 済 工 学 I	経済活動はミクロ的な経済活動とマクロ的な経済活動に大別して分析が行われる。本科目では、家計・企業といった個々の経済主体の意思決定と市場機構の機能と有効性について工学及び数理的手法を用いて説明を行う。具体的には、需要と供給、消費者余剰と生産者余剰、市場と価格メカニズムや無差別曲線等、ミクロ経済学の基礎的概念の説明のみならず、市場が十分に機能しない状況についての分析、政策を通じた対処法等について考える。また、オークションや、環境問題、労働・結婚市場におけるマッチング等、市場設計が果たす役割についても考察する。	
		経 済 工 学 II	経済活動はミクロ的な経済活動とマクロ的な経済活動に大別して分析が行われる。本科目では、経済の指標となる国内総生産、物価、利子率、失業率、貯蓄率などがどの様に決定されるのか、景気の変動や経済成長は何によって引き起こされるのか、また金融・財政政策といった経済政策はどの様な効果を持つのか等といった、マクロ的な経済活動に関する疑問や課題を工学や数理的手法を用いて定量的に分析する。また、市場が十分に機能しない場合や不確実性を考慮した時にどの様な問題が発生するかについても解説を行う。近年我が国が行った経済政策等の具体事例も取り上げる事で、より実践的な分析力の習得を試みる予定である。	
		環 境 科 学	我々のまわりには環境問題に関する情報があふれており、それらの中には一面的な見方や信憑性に欠けるものが含まれている。このため、環境問題については科学的根拠に基づいて論理的に考える必要がある。本講義では、地球環境の変遷、大気・水の環境、自然災害やエネルギー問題と環境との関連などについて基礎的な知識を学ぶことにより、地球環境問題を科学的かつ多面的な視点で捉えるとともに、理解した内容を論理的に説明できることを目的とする。	
		地 域 計 画	今日、都市や地域のらしさやアイデンティティに着目した政策や都市及び地域計画が強く求められてきており、地域住民の参画と協働を前提としたまちづくりの展開が進められている。このために必要な計画や施策は、わが国ではどのような法制度体系になっているのか、また具体的な整備計画の内容などについて講述するとともに、住民参加など多様なまちづくり手法および管理・運営方策について、事例を挙げながら学習し、国土計画から都市、地区に至る実践的な計画論が理解できることを目標とする。	

専門分野科目	専門応用科目	プログラミング実習Ⅲ	情報技術の発展とともにプログラムが複雑になり、プログラムの管理や生産性の向上のためにオブジェクト指向プログラミングが注目されている。本実習では、情報システムの基礎ならびに応用を、C++言語を用いて学ぶ。まず、関数では、関数の基本や局所変数とスコープ、関数のオーバーロードを実習し、構造体について学習した後、クラスについて説明をする。クラスの概説から始め、プライベートデータとパブリックデータの違い、コンストラクタ関数とデストラクタ関数や演算子のオーバーロードについて実習する。さらに、スタティック関数とデータメンバの使い方を習得し、例題をプログラミングしながらシステム設計と構築を学ぶ。継承と多重継承や、プライベートメンバとフレンドを通して、オブジェクト指向で重要なクラスとその作成、利用の習得を目指す。	共同
		プログラミング実習Ⅳ	プログラミング実習Ⅲでは、情報システムの基礎をオブジェクト指向言語であるC++を用いて学習した。本実習では、この知識をベースに、より高度なシステム開発と設計方法を学習する。また、ここで用いるVisual C++言語はユーザ・インタフェースを作成する上で必須であるのでその処理の流れとプログラミング法の習得を目指す。まず始めは、システム設計(外部設計)の概説し、要求分析手法とサブシステムの定義/展開、コード設計の実習を行う。そして、機能分割と構造化、入出力詳細設計について考え、システム設計(内部設計)の重要性を理解する。これら習得した知識を使い、簡単な課題をVisualC++によるユーザインタフェース重視でプログラミングする。用意されているクラスを利用して、各種コントロールの作成方法を習得する。	共同
		データ構造とアルゴリズム	各種アルゴリズム、データ構造、構造化手法など計算機利用の基礎的な事項について、講義、演習を行う。本授業を通じて、問題解決に際して情報をどのように整理し、抽象化すれば与えられた問題を定式化でき、法則性を発見できるかを、各種具体例を通じて一般概念を習得し、自ら新しい応用問題を解決できる能力を高めることを目指す。そして、計算機による問題解決の初歩的アルゴリズムについての知識を前提とし、より高度なアルゴリズム、データ構造について講義、演習を行う。本科目の講義、演習を通じて、与えられた問題を定式化し、考えたアルゴリズムからプログラミングができることを目指す。	
		プログラム言語と処理	多くの場合ソフトウェアの作成は、高水準プログラム言語を用いてプログラミングされる。しかし、そのプログラムをコンピュータが直接解釈し実行できるものにするには、機械語プログラムに変換しなくてはならない。その変換システムの一つとしてコンパイラがある。ここでは、コンパイラの基本的な考えや動作、構造、構成を説明する。そして、その結果として、コンパイラの働きの理解を深め、目的の処理を記述するプログラムの最適なコードが作成できることを目標とする。そこで、コンパイラの概要を述べ、字句解析としての正規集合と正規表現や、有限オートマトン、そして構文解析を議論する。最終的に、目的コード生成のための方法とコード最適化の知識習得を目的とする。	
		コンピュータアーキテクチャ	コンピュータの仕組みについて理解する上で、コンピュータの設計手順や構成方法に関する知識の習得は重要である。そこで、コンピュータを構成する各装置の機能とその実現方法についての基本を説明し、ブール代数からコンピュータシステム設計に至る過程の理解を深めることを目指す。コンピュータアーキテクチャとして、ノイマン型計算機とその基本構成と命令形式を紹介し、順序回路と制御装置のアーキテクチャ、プロセッサの高速化手法、必要な機能としての割り込みを概説する。そして、演算装置のしくみについて考える。演算装置では、固定小数点数の算術演算の処理を説明し、高速加算の方法について学ぶ。さらにメモリアーキテクチャとして仮想メモリとキャッシュのアドレス管理について考え、CPUの基本構成と機能、メモリの管理に関する知識習得を目的とする。	
		オペレーションズリサーチⅠ	変化の目まぐるしい情報化社会の中では、人の経験や勘だけを頼りにするのではなく、科学的に状況を分析し、適切な意思決定を行うことが求められる。「オペレーションズリサーチ (OR) 」は、社会や経営上の現実問題を数理モデルで表現し、モデルの解析によって、現実問題の解決を図る学問である。この科目では、オペレーションズリサーチの様々な手法を通じて、問題のモデル化及び意思決定について理解することを目的としている。内容としては、表計算ソフト等を用いて、代表的な問題の解決に取り組みつつ、身の回りの問題への応用について考察する。	

専門分野科目	専門応用科目	オペレーションズリサーチⅡ	オペレーションズリサーチの数理モデルには、連続値を取り扱う「連続最適化モデル」がある一方で、離散値を取り扱う「離散最適化モデル」があり、最近、「ナップサック問題」、「スケジューリング問題」及び「板取り問題」等、離散最適化モデルを適用可能な問題に注目が集まっている。この科目では、離散最適化モデルに関する現実問題の解決方法について説明する。また、この離散最適化モデルはコンピュータによる解法が一般的であるため、解法の手続きを紹介すると共に、「オペレーションズリサーチⅠ」に引き続き、表計算ソフトを活用した演習を行う。	
		ビジネスプランニング	新規事業を立ち上げる際、具体性のある計画を立案するためには、ターゲットとなる業界の現状を十分に調査しておかなければならない。この科目では、マーケティング等、これまで習得した経営に関する知識や技術を再度確認しつつ、ビジネスプランの作成に実際に取り組むことで、企画力及びプレゼンテーション能力の向上を目指す。内容としては、日本各地で開催されているビジネスプランコンテストの状況を示し、プラン作成のポイントを解説すると共に、テーマの選定からプランの添削を個別に指導する。また、優秀なプランに関しては、周辺地域で開催されるコンテストへの提出を促す等、受講生の実践の場を確保する。	
		データベース論Ⅱ	2年後期に開講されるデータベース論Ⅰに引き続き、データベース構築に関する知識と技術を学習することを目的とする。特に、本講義では、データベースの設計とその管理方法を中心に学習する。まず始めに、データベースを設計するために、データモデルの捉え方とスキーマの概念を紹介する。そして、論理データモデル(実体と関連の概念、ER図)と物理データモデル(階層型モデル、ネットワーク型モデル、リレーショナル型モデル)を通して設計の流れと3層スキーマ(概念スキーマ、外部スキーマ、内部スキーマ)の設計知識の習得を目的とする。物理的には、データ容量の算出やディスクスペースの分散配置を設計する。さらに、データベース管理システム(DBMS)の必要性を理解し、DBMSの機能説明とその管理法の習得を目指す。	
		リスクマネジメント	本科目では、リスクマネジメントの有力な手段の1つである生命保険・損害保険について学び、リスクを評価する事の本質を理解する事を目的とする。本講義では、保険の対象とするリスクの特徴を解説した上で、リスクを処理する機能的側面から保険を定義し、その基本的性質を明らかにする。そして、保険者の存在意義や多様な組織形態について説明し、家計、企業が何故保険を利用するのかについて検討する。更に、逆選択とモラルハザードを踏まえて、リスクの保険可能性を説明し、環境や地震、テロ等、従来保険の対象とする事が困難なリスクに対するマネジメント方法を学ぶ。	
		管理会計論	「管理会計」は、会計情報を企業経営に携わる担当者の意思決定、業績測定等に役立てるための企業会計の一種であり、企業活動を企業内で検証する上で欠かせない。この科目では、「原価計算」の標準原価計算や直接原価計算に関する内容を踏まえ、アクティブ・ベースト・コストイング(ABC)、アクティビティ・ベースト・マネジメント(ABM)、原価企画及びバランスト・スコアカード等の管理会計手法について説明する。また、国際財務報告基準(IFRS)の適用に関する動向についても触れ、日本国内における管理会計の現状及び展望について概説する。	
		財務会計論	「財務会計」は、財務諸表に代表される会計情報を企業外部のステークホルダーに対して提供することを目的としていて、企業経営者が株主に対して行う「会計責任」等、この情報公開の果たす役割は大きい。この科目では、財務会計の基礎的な知識について、「会計全般」、「貸借対照表」、「損益計算書」、「その他の財務諸表」及び「キャッシュフロー計算書」の5つに分けて説明する。また、財務会計の異なる役割として注目されている「利害調整機能」について触れ、海外企業による企業買収等、国際化の波が押し寄せる日本国内における財務会計の在り方について考察する。	
		企業論	「企業」は「営利企業」とも呼ばれ、営利を目的として、一定の計画に基づいて活動する組織である。言い換えると、企業は身近な存在であり、我々の日常生活は企業無くして最早成り立たない。この科目では、企業の定義及び形態、企業活動理解のための新たな概念、並びに現代企業の抱える課題について説明する。地域における企業の現状、企業の海外進出、日本と海外における企業観の相違、及び、今世紀における企業統治や企業倫理等、将来を担う受講生の進路を念頭に置き、最近の具体的な事例を多く交えつつ、企業の根幹に関わるテーマを取り扱う。	

専門分野科目	専門応用科目	労務管理論	「労務管理」は、従業員個人の種々な潜在能力を職務上の遂行過程で顕在化させ、個々の持つ能力の高度化による人材有効活用を目的としている。この科目では、高度情報化社会における労務管理について説明する。内容としては、教育（研修）、人事評価、人事配置、賃金、福利厚生等、人材のモチベーションを維持しつつ、企業内で活用するために留意すべき事項の他、労働基準法、男女機会雇用均等法、障がい者の雇用の促進等に関する法律等、労働に関わる様々な法規についても触れる。さらに、変化の著しい経営環境下での人材活用の在り方について考察する。	
		ロジスティクスⅠ	近年、社会構造の変化やIT技術の導入により、モノや情報、商取引の流れが変化しつつある。そのため、顧客サービスを向上させ、顧客満足を得るためには、必要なものを、必要なときに、必要な量だけ供給出来るシステム構築が必要不可欠となっている。ロジスティクスとは、調達・生産・販売・消費を考えながら顧客のニーズに適合させ、原材料の仕入れから半製品や完成品の効率的な流れを計画、実施及び管理する手法を研究する学問である。本科目では、ロジスティクスの概念と考え方を説明し、ロジスティクスの取り巻く環境変化によって、ロジスティクスがどの様に変化してきたかを、具体的な事例を紹介しながら分かり易く解説する。	
		ロジスティクスⅡ	本科目では、企業におけるロジスティクスシステムのあり方に対する基礎的理解と分析能力を養う事を主たる目的とする。具体的には、ロジスティクスとサプライチェーン・マネジメント(SCM)に関する基本概念を理解したうえで、企業のロジスティクスシステムがどのように構成され、どの様に運営されるのか、また、企業経営においてSCMが如何なる役割を果たすかについて検討する。より具体的には、グローバル・ロジスティクス、サードパーティーロジスティクス、ロジスティクスと環境問題等、ロジスティクスの最新動向について、具体的な事例を紹介しながら分かり易く解説する。	
		産業連関分析	レオンティエフによって体系化された産業連関分析は、今日数量的経済分析の主な方法の1つに数えられ、多くの国々において産業構造分析や経済政策作成の枠組みとして利用されている。産業連関分析の応用範囲は非常に幅広く、円高や輸出自主規制、原油価格高騰、消費税の導入、公共事業や各種イベントの開催、環境問題等様々な経済事象が、産業間の財貨やサービスの取引を通して国内産業や雇用に与える影響を分析する事が可能である。本科目では、北陸地域の経済データや産業データを用いて産業連関分析を行う事で、地域経済の現状や問題点を定量的に分析する事をその目的とする。	
		交通計画	本講義では、交通の主体を占める道路交通計画に必要な交通問題の基礎的な知識と判断力を養わせることを目的とする。具体的には、道路交通の施設である道路の一般的な構造、交通調査および交通静穏化施策を理解させる。また、交通量推計における交通容量について具体的な事例により学ばせる。さらには、交通事故の発生原因と交通安全施設、高齢者の交通安全についても講述する。	
		費用便益分析	道路、河川、港湾等の社会資本整備には多額の費用が必要である上、その効果も多種多様である。従って、どの様に社会資本を評価しどの程度投資を実行したら最も効果的であるかを分析する事は重要な課題となっている。費用便益分析とは、事業の実施に要する費用に対して、その事業の実施によって社会的に得られる便益の大きさがどの程度あるか定量的手法を用いて測定する学問である。本科目では、政策評価の概要、費用便益分析の基礎、同分析の手法を紹介する。また、地方自治体で実施された事業等を具体例に用いる事で、実践的な技術力の習得を試みる。	
		資源リサイクル工学	近年、エネルギーや資源の使用量の増大に伴う環境・エネルギー問題が深刻化しており、大量生産・大量消費型社会から資源循環型社会への転換が求められている。この科目では、資源循環型社会への転換が必要とされる背景、循環型社会構築に向けての廃棄物再資源化に対する考え方（戦略）、個々の素材および製品のリサイクル技術、さらにはリサイクルの定量的な取り扱いについて学習し、廃棄物抑制やリサイクルにどう取り組めばよいかを考える。	
		メディア論	コンピュータを使用したデジタルコンテンツの登場、インターネットの普及により、従来までなかった一個人による世界へ向けての情報発信が可能となってきており、これらコンテンツを媒介するメディアは、我々の周りにいくつも存在している。このようなメディアが一体、何を生み出してきたのか、それを理解するにはこれらメディアの辿ってきた歴史的背景や文化の理解が不可欠である。本講義では近代以降から現代にいたるメディアデザインの動向を様々な作家、芸術運動を読み解きながら論じ、メディアデザインをより深く理解することを目的とする。	

専門分野科目	専門応用科目	画像情報処理論	マルチメディア技術の進展によってビジネスの手段が大きく変化している。こうしたことからマルチメディア社会において、今後多くのマルチメディア技術者が求められるであろう。このようなことを踏まえ、本講義ではマルチメディア表現技術としてのデジタル画像のアルゴリズム、画像処理、コンピュータグラフィックスの技術、音声について論ずる。そして、画像データの中から特徴的なパターンや規則を抽出するパターン認識の基本的手法を紹介し、具体的な問題に適用されるアルゴリズムを説明する。それらの理解からパターン認識系をプログラミングできることを目標とする。	
		UMLモデリング	オブジェクト指向言語によるソフトウェア開発が主流となっている今日、オブジェクト指向設計の能力が必要とされるとともに、ソフトウェア設計の際にモデリング言語として使われるUMLの知識も必須となっている。そこで、本授業ではUMLの基礎知識を教授しオブジェクト指向分析や設計、製造をするための力が身に付くことを目指す。オブジェクト指向とUMLの概要から始め、オブジェクト指向による開発について述べる。UMLで使用されるダイアグラムと要求分析からのユースケース図の作成を例をあげながら考える。そして、仕様分析を通して、ネットワークプログラミングの設計例を取り上げ、シナリオ設計とオブジェクト設計法の習得を目的とする。	
		ソフトウェア開発Ⅰ	Microsoft Visual C# .NETを用いて、サーバ・クライアント型のWebアプリケーションおよびWebサービスを構築するための基礎技術を実習する。まずはスタンドアロンのWindowsアプリケーションの作成実習により、オブジェクト指向、グラフィカル・ユーザ・インタフェース(GUI)の作成、およびイベント駆動型プログラムの基本を学ぶ。続いて、簡単なWebブラウザ上で稼動するWebアプリケーションの作成方法を学ぶ。そこで、Windowsアプリの制作では、Windowsフォームデザイナの使い方を学び、種々のコントロールの実装実習から各種クラスの利用法を習得する。そして、後半は、Webアプリの仕組みを紹介し、Pageクラスの概要と、カウンター制作、入力データ連結、アンケート集計ページの制作と進み、その技術と知識の習得を目的とする。	
		ソフトウェア開発Ⅱ	今日、コンピュータによる画像の生成や処理は多種多様なところで使われている。そこで、2次元ならびに3次元の画像生成とレンダリングの基本を、Microsoft Visual C# .NETを用いたプログラミング実習によりその技術の習得を目指す。そして、医療画像処理や工業用画像処理、視覚パターン処理等の基礎になるデジタル画像処理手法の基本的事項について実習を行う。まず、2次元画像と3次元画像の生成を紹介し、画像のアフィン変換の処理法を概要する。そして、レンダリングの基本を紹介し、3次元画像の処理について実習を行う。そして、画像処理の理論と実装をプログラミングによって実習する。処理としては、フィルタ処理や色変換によって画像処理のプログラミングの知識と技術の習得を目的とする。	
		情報と職業	高度情報化社会において、情報通信技術の急速な発展に伴い、「情報」の利活用は職業の種類・分野を問わず必要となっている。従来、情報産業における特化した専門知識であるとの認識が高かったが、今後、この利活用がどのような職業においても強く要求される。この科目では、企業経験者を担当者とし、情報通信技術の発展やそれに伴う社会の変遷、情報化社会における光と影等、情報にまつわる様々な事例を交えて、就職活動を控えている受講生の職業観をより鮮明にすると共に、希望する職種や業種における情報の利活用に対する意識を高めることを目的としている。	
		地域産業論	国の経済発展において地域経済の安定が大きな役割を果たすことは、広く認識されるようになった。今世紀に入って多くの先進国でも、その地域経済を支える地域産業の役割に関心の高まりがみられる。本講義ではまず地域と産業の相互作用と共生化をキーストーンとして地域特化の経済と地場産業を視座にわが国の地域と産業の発展構造を学ぶ。更に、北陸地域の産業構造を注視して新規ビジネス並びに産業発展の可能性を模索する。また、地場産業の従事者と意見交換を行い、有効かつ具体的なビジネスプランを作成し、地域経済発展への貢献を目指した授業を展開する。	

専門分野科目	専門応用科目	システム工学	近年、構築されている各種システムに共通する設計計画や、運用に関する基本的な手法について、経営情報工学の視点から、オペレーションズリサーチ、信頼性工学、制御工学、統計工学などを援用した分析的手法に演習を含めて知識の習得を目的とする。まず、システム工学の背景と必要性について、コンピュータ科学の発展とともに解説する。そして、問題の設定と目的の選択、システムの合成と解析、最適化法、人工知能手法など、システム工学の手法を紹介する。システムの計画においては、調査と予測、テクノロジーアセスメントの手法について考え、システム設計の進め方やモデルの構築とシミュレーションの利用について論じる。	
	全学共通科目	卒業研究	4年間の勉強の成果として、学生各自が主体的に所属研究室を選択し、各自の問題意識に基づいて自由に研究や作品制作を行う演習科目である。教員は研究室ごとのゼミや個別指導を通して学生の目標が効果的に達成できるよう親密に指導する。成果は卒業論文または卒業制作として提出し、公開形式でプレゼンテーションすることが義務づけられる。	共同

授 業 科 目 の 概 要				
(環境情報学部 デザイン学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
教養分野科目	A群	哲学入門－人生哲学	人生哲学は、本来、人の善い生(行為)の基準としての善い生(行為)一般を明らかにし、それを基準にしてあらゆる善い生(行為)を明らかにするものである。また、その結果としての根本的な善い生(行為)一般についての考えも人生哲学と言われます。この意味での人生哲学は、実は、誰もが既に持っているものである。そして、これがその人の基本的な人生態度となって、その人のあらゆる生き方や行為についての考えや行動を規定する。そこで、この授業は、学生諸君が、様々な人生哲学の学習によって、自らの人生哲学を反省し検討し、よりよい人生哲学を持つようになることを目指す。	
		心理学入門－心のはたらき	心理学は、人間の認知・行動を科学的に実証しようと試みる学問として発展してきた。実験や研究から明らかにされた心理学の理論を学習することで、心理学の知見から得られた知識やスキルを日常生活の実践に生かすこと、社会や集団の現象を心理学の理論に基づいて理解・分析することを授業の目的とする。講義形式の授業とワークシート課題を実施することを通して、学生が自らの日常生活において「自分で考え行動すること」「自己を分析すること」が可能となることを目指す。	
		女性学入門－女性の生き方論	女性学は世界的な女性解放運動(第2次フェミニズム)の中で生まれた学問領域(歴史、文学、教育、法、経済、政治、社会など)で、「ジェンダー」(社会的・文化的な性)という視点から、私たちがあたり前だと思っている社会がどのように異なってみえるかを提示する学問である。今回の授業では生まれてから死ぬまでに遭遇する身近な出来事の中に潜む「ジェンダー問題」に気づくとともに、男女問わずすべての人にとって生きやすい社会とは何かについて考える。	
		コミュニケーション論	現代は社会の変化が大きく複雑化しているため、コミュニケーションをしていく上で様々なつまずきが生じやすい。コミュニケーションには対人的なもの、対物的なもの、さらには自分の内部で行われるものがある。人間のあらゆる活動がコミュニケーションと関係している。それは、これまで、日常生活の中で自然に身に付くものと考えられてきたが、意識的に学ぶことが必要な時代となった。具体的な問題と関連させながら、コミュニケーションとは何か、を考え、また、どうすればコミュニケーションが改善し、生きやすくなるかを考えていきたい。	
	B群	人と社会	人間は社会の中に生まれ、社会と関わりつつ自己を形成し、社会を生きる。人間としての自覚を深め、生の尊重を行為の原理として、自己実現を果たしながら生きるあり方を探求する。「社会的職業的自立」への覚醒として①社会的自立(家庭人としての自立、学生としての自立、市民としての自立、職業人としての自立、生涯学習社会の一員としての自立など)を取り扱う。②職業的自立について学生諸君の自覚を促すことを目的に「社会的職業的自立」と抜き出して並記した。	
		法学入門－市民社会と法	社会生活を営む上で、私達は、意識するとしないとを問わず、法的な関係に立ち入ることになる。日用品を買ったり、交通機関を利用したりする日常生活の活動も常に法的な側面をもっている。したがって、社会の中で生きる限り、法に対する正しい知識は、必要不可欠と云っても過言ではない。今後、社会の価値ある一員として生きる基盤形成に資するためにも、成人の教養として必要な法の基礎知識を身に付け、体内にリーガルマインドが醸成されていくための入門編とする。	
		日本国憲法	日本国憲法について学習し、権利と責任、使命と義務を自覚する。また、憲法が現実の生活の中でどのように関係しているかを確かめながら自ら考える力を養い、国際社会に生きる日本人としての素養を身につける。	

教養分野科目	B群	経済学入門－現代社会と経済	現代はきわめて高度に発達した市場経済に委ねられています。マクロ経済学における経済の構図、基本的な経済原理、景気判断、市場、貨幣などの考え方を理解したうえで、現代社会における、人・物・金の動きを解明し、特に金融・外国為替・貿易・証券等現代社会特有の経済活動に関する知識を習得する。ひいては世界経済の動きを分析し、その中における日本経済の諸問題について自分で考えることができる力を養い、国際人としても活躍できる能力を身に付けることを目的としている。	
	C群	マスコミ論－新聞を読み解く力	多様化するメディア。この科目では新聞、雑誌など活字メディアを中心にマスコミなどメディアの変遷と役割を学ぶ。同時にタイムリーなニュース、話題を取り上げ、新聞を読む力と情報化社会を生きる実践力を身につけていく。学生と意見を交換しながら授業を進め、討論の場、コミュニケーションをはかる場にしていく。	
		日本文化の歴史	建学の精神”悠久なる日本民族の歴史と伝統とに根ざした愛国心を培い”の精神にそって講義内容を構成する。本講座で取り上げる文化は、建築物や彫刻、絵画、文学などの「文化財・文化遺産」の歴史ではなく、現在の我々の生活や考え方の中に伝えられ生きている文化である。まず、日本人の生活の原点である「稲作」、我々の生活の基盤である「福井県」、活動の舞台である「福井工業大学の創立」について歴史的に学ぶ。また、日本文化の基本にある「中華思想」・「四神思想」・「神祇信仰」（白山信仰）・「晴と蓑」・「仏教思想」など、歴史的な事象に基づき明らかにする。それらの学習から、自分の身の周りにある事物や習慣の全てが、歴史的に蓄積されてきた文化であることに気づき、郷土と国土に対する正しい理解と愛情を育てることを目標とする。	
		比較文化論－世界の文化	明治維新後、約140年間で日本は近代化を成し遂げ、経済・文化・科学などの諸分野で世界の中で枢要な地位を占めるまでになった。これを可能にしたのは、日本文化の伝統の力である。日本は中国を中心とする東アジア文化圏の中にありながら文化の独自性を守り、近代合理主義を受容する土台を築き上げていった。それ故に、近代西洋文明と接触するや否やそれを自家葉籠中の物にし、アジアで最も早く近代国家となることが出来ました。従って、ここでは日本文化の独自性と日本人の優れた資質を踏まえ、近代文化の根底をなす合理主義発生の土壌と歴史的展開を西洋の歴史と文化の中で見出そうとするものである。	
		文学入門－小説・詩の世界	近代から現代に至るまでに多くの作家が登場し、それぞれの作品を世に問うてきた。そして、それらの作品は、その時代に生きる人々に大きな夢や希望を与え、生きる指針を示してきた。小説や詩歌など、いわゆる言語芸術（文学作品）は、それが書かれた時代の「人間の在り方、生き方」と強く結びつき、不可分の関係にある。本授業では、そうした作家や作品が持つ時代性と芸術性（文学性）を探ることを中心に学習し、ひいては私たちの生き方、時代との関わり方をも見直し、文学作品の持つ意味を確かめたい。	
	外国語	ベーシックコミュニケーションⅠ	グローバル化が進む現代社会においては、大都市だけではなく地方都市においても外国人と接する機会は今後増えるであろう。この授業では自己紹介・出会い・家族・日常の行動・衣類・買い物など身近な題材をもとに日常英会話に必要な基本的な語彙・表現方法を学ぶ。日常生活を軸に身近な英語表現に慣れ親しむことで、初めは単語レベルでも構わないので、間違いを犯すことを恐れることなく、臆せずに積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	
ベーシックコミュニケーションⅡ		ベーシックコミュニケーションⅠに引き続き、趣味・食事・スポーツ・家・過去の行動・目標と夢など身近な題材をもとに基本的な語彙・表現方法を学ぶ。ペアワークやグループワークなどの言語活動を通して、聴く力・話す力・考える力を身につける。また外国人講師とのディスカッションを通して英語を道具として自分の考えや意見を他者に伝える能力を養うことにより、社会の一員として他者との関わりを円滑に進めるためのコミュニケーション能力の向上を図る。		

教養分野科目	外国語	アドバンストコミュニケーションⅠ	現代のグローバル化社会においては外国はもはや遠い存在ではない。とりわけ海外旅行を通じて、異文化に触れる機会を得ることは高いハードルではない。この授業ではイギリス、ニュージーランド、タイ、アイルランドへ出向く日本人とアメリカ人の旅行記を通じて、旅先での様々な場面における英会話表現を学ぶ。言葉に不自由することなく、海外旅行を楽しめる英語力を習得し、さらに英語を通じて外国の事情や異文化について興味・関心を持つとともにそれらに対する理解を深めることを目的とする。	
		アドバンストコミュニケーションⅡ	観光を目的とした数日間の海外旅行だけではなく、在学中に海外語学研修に参加したり、卒業後に長期の海外留学を経験することにより、英語コミュニケーション能力を向上させることに加えて、より視野の広い国際感覚を身につけることが可能となる。この授業では海外に滞在・留学する際に必要な会話表現を学ぶことにより、ひいては外国の人々の暮らし、文化や世界の出来事にも目を向け、国際的な視野の拡大を図り、多様な考え方を持つ人と交わろうとする態度を養う。	
		テクニカルコミュニケーションⅠ	ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ及びアドバンストコミュニケーションⅠ・Ⅱで学んだ一般的な英語コミュニケーション能力を基盤として、科学技術英語に関する初歩的な知識の習得とその知識を背景としたより専門的な英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器に関する問題の特定、調査及び説明の仕方を学ぶことと、職場で一般的に見られる英語の標識を理解するとともに、材料、道具、機器等を英語で表現できるようにすることである。	
		テクニカルコミュニケーションⅡ	工学・科学技術等の専門分野における英語コミュニケーション能力を高めるための必要不可欠な要素の一つが一般的な英会話では学ぶことのない専門用語を習得することである。この授業では科学技術英語に関する基本的な知識と専門用語の習得を目指し、工学・科学技術分野における英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器の使用方法や機能について英語で説明する表現を学び、また基本的な計算や数値、統計などに関する表現方法を学習する。	
		テクニカルコミュニケーションⅢ	日本国内の中小企業であっても開発した製品や技術を海外に輸出するなど、海外企業との関わりを切り離して考えることはできない。取引相手がタイやベトナム、インドネシアなど東南アジアの新興国の企業であったとしても、共通の言語となるのは英語である。この授業では海外企業との取引を念頭に科学技術英語に関する応用知識の習得と専門知識を基盤とした英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器の操作や修理方法、使用説明書などを英語で説明する能力を養う。	
		テクニカルコミュニケーションⅣ	日本国内の中小企業であっても東アジア・東南アジアなどを中心に海外企業と提携を結んだり海外に支社を設立している企業は少なくない。このような状況下では技術者であっても海外に赴任して仕事をやる機会はあるといえる。この授業では科学技術英語に関する発展的知識を習得することにより英語コミュニケーション能力を兼ね備えた国際的に活躍できる中堅技術者の養成を目的とする。具体的な内容としては、ロジスティックスやリサイクルの手順に関して技術面を中心に議論する。	
		ビジネスコミュニケーションⅠ	ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ及びアドバンストコミュニケーションⅠ・Ⅱで学んだ一般的な英語コミュニケーション能力を基盤として、ビジネス分野における基本的な英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、海外出張、国際的な展示会への参加、アポイントメントの取り方など、具体的なビジネスシーンを想定した教材を用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、基本的な語彙や口語表現の修得を目指す。	

教養分野科目 外国語	ビジネスコミュニケーションⅡ	ビジネスの現場で円滑に英語でコミュニケーションが取れるようになるためには、ビジネス分野で必須の語彙の習得が不可欠となる。この授業ではビジネス・コミュニケーションⅠに引き続き、国際的なビジネスの場で必要とされる英語コミュニケーション能力を養成する。具体的な内容としては、実際のビジネスシーンを想定した教材を用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、ビジネス分野に関する基本的語彙や口語表現の修得を目指す。	
	ビジネスコミュニケーションⅢ	日本国内の中小企業でも海外企業との取引を行っている企業は非常に多く、企業の貿易部門などでは英語を始め外国語の運用能力を備えた人材が不可欠である。この授業ではビジネスコミュニケーションⅡに引き続き、国際的なビジネスの場におけるより円滑な英語でのコミュニケーション能力の養成を目指す。具体的には、会社の紹介、取引先への訪問、商品の発注など、具体的なビジネスシーンを想定したテキストを用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、基本的語彙や口語表現の習得を目指す。	
	ビジネスコミュニケーションⅣ	日本国内の中小企業であっても東アジア・東南アジアなどを中心に海外企業と提携を結んだり海外に支社を設立している企業は少なくない。このような状況下では技術者であっても海外に赴任して仕事をする機会はあるといえる。この授業では科学技術英語に関する発展的知識を習得することにより英語コミュニケーション能力を兼ね備えた国際的に活躍できる中堅技術者の養成を目的とする。具体的な内容としては、ロジスティックスやリサイクルの手順に関してビジネスシーンを想定し議論する。	
	リスニングⅠ	オーラルコミュニケーションに必要な能力は言うまでもなくスピーキングとリスニングの能力である。この授業では人の名前や日付、物と物との位置関係を表す場所表現など英語圏で生活をする際に必要な基本的表現のリスニング能力を養成する。単語レベルのディクテーションによりリスニング能力の定着度の確認を行う。また英語の強弱アクセント及びイントネーションに慣れるために、ペアワークによる発音練習を多く取り入れ、担当教員による発音指導を行う。	
	リスニングⅡ	リスニングⅠに引き続き、毎回の授業でできるだけたくさん英語を聞き取り、「英語耳」を作ることを目的とする。具体的には、買い物をする際に必要な金額の聞き取りや商品説明、道案内など、より発展的な内容のリスニング能力を養成する。フレーズレベルのディクテーションによりリスニング能力の定着度の確認を行う。またペアワークによる会話文の発音練習を多く取り入れ、ナチュラルスピードの会話に現れる英語特有の音に慣れることを目指す。	
	TOEICⅠ	日本の大学及び企業において学生や社員の英語コミュニケーション能力を測定するための英語資格試験としてTOEICが定着していることは否定できない。しかしながら、高等学校までは英語の資格試験としては依然として英検が主流となっているため、大学生の多くはTOEICの試験形式に慣れていない。この授業ではまずTOEICの試験形式を理解し、演習問題を解くことによりPart1～Part7までの各パートの出題形式に慣れることを目的とする。	
	TOEICⅡ	TOEIC試験はPart1～Part4までのリスニングセクションとPart5～Part7までのリーディングセクションに分かれているが、各パートともに出題される問題の難易度は前半部分が比較的易しく、後半になるにつれ次第に難易度が上がる。この授業ではTOEICのスコアを着実にアップさせることを目的とし、各パートの前半に出題される比較的難易度の易しい問題を確実に解けるようになるように、基本問題の演習を繰り返し行う。	
	TOEICⅢ	TOEICの試験形式に慣れ、各パート毎に難易度の易しい問題を確実に解ける力が付けば、さらなるスコアアップを目指すこととなる。その秘訣は繰り返し演習問題を解くことに加えて、各パートの難易度の高い問題を攻略するために出題のパターンを理解し、出題パターンに応じた解法を会得することである。特にリスニングセクションの各パートでは解法のポイントを押さえておくことは、飛躍的なスコアアップにつながる。この授業では出題パターンを瞬時に分析し、正確に解答できる力を身につける。	

教養分野科目	外国語	T O E I C IV	基礎的な英語力が備わり、毎回ある程度着実に一定レベルのTOEICのスコアを獲得できるようになった学生でも、100問あるリーディング問題を75分間で完問することは非常に難しい。この授業では時間の有効な使い方をマスターすることで、リスニングセクションの各パートの後半に出題される比較的難易度の高い問題も解ける力を養成する。またリーディングセクションにおいても問題を解く順序や時間配分をマスターし、75分で100問を解く力を身につける。	
		海外語学研修 I	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
		海外語学研修 II	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
		海外語学研修 III	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
		海外語学研修 IV	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
キャリア形成		日本語の基礎	日本語の能力は、単に情報収集や情報発信のために必要であるだけでなく、あらゆる科学を学ぶ者にとって思考力の基盤をなす意味においてもきわめて重要である。本科目は日本語の基礎学力が不十分な新入生を対象とし、基本的語彙の確認からはじめ、文章を正確に読解する方法と誤解のない文章の表現方法の基礎を演習形式で指導する。日本語を母国語としない留学生に対しても、本科目の受講を推奨する。	
		日本語表現法 I	日本語の能力は、単に情報収集や情報発信のために必要であるだけでなく、あらゆる科学を学ぶ者にとって思考力の基盤をなす意味においてもきわめて重要である。本科目は、平易な論説文を正確に読解する方法と論理的な文章の表現方法の基礎を演習形式で指導する。また、社会人として必要な敬語の基礎についても指導する。	

教養分野科目	キャリア形成	日本語表現法Ⅱ	「日本語表現法Ⅰ」を受講した学生を対象に、やや高度な説明文を正確に読解する方法と、読解した内容を元に自らの思考を加え論理的な文章として表現する方法を演習形式で指導する。Ⅰとの違いは、扱う文章の専門性や論理性が高度になることにとどまらず、論理的な文章を読み書きすることを通して思考力を養うことにある。	
		キャリアデザインⅠ	学生が、職業人生を考えるためのプラットフォームを提供し、職業観を養成することの助けを行う科目である。社会と経済の仕組み、産業構造の変化、日本の雇用環境の特質などを理解し、仕事の意義、職場の種類、職業人生の組み立て方法などの概要を指導する。単なる知識の一方的な伝達にならないよう、講義と演習を組み合わせ理解を促す。講義の最後には各自の人生設計のロードマップ（キャリアシート）のラフスケッチを描けることを目標とする。	共同
		キャリアデザインⅡ	学生が各自の専門性を生かしながら、実際に自分に合った職業を選択するために必要な知識と技術を指導する。身近な社会人の観察や聞き取り調査など、単なる知識の一方的な伝達にならないよう、講義と演習を組み合わせ理解を促す。講義の最後に、キャリアデザインⅠで作成した人生設計のためのキャリアシートをより現実的なものに修正することを目指す。	共同
		キャリアゼミⅠ	キャリアゼミはキャリア教育の一環として、社会人基礎力の涵養を目的とし、教養科目および専門科目を有機的に融合するように、1年次と3年次に継続的に配置した少人数制によるゼミ形式の演習科目である。本科目はその第1段階として入学直後の新入生を対象に、大学で学ぶことの意味と学び方、意義深い大学時代を過ごすための生活の仕方などを、教員や他の受講生との自由なディスカッションを通じて考えるための科目である。同時に、会話によるコミュニケーションの基本を身につけることを目的とする。	
		キャリアゼミⅡ	キャリアゼミの第2段階として、前期での大学生活を顧みて学習の習熟度を自ら判断させ、それを一層向上させるために教員との対話・討論を通して、自主的な学習の重要性を理解させる。また、所属学部・学科の専門性に添った学習方法について理解させる。さらに、学習の成果を他者に伝えることを通じて、コミュニケーションを図る上での感性の大切さや、社会生活におけるマナーを理解させ、大学生としての教養と人格の育成を図る。全8回。	
		キャリアゼミⅢ	キャリアゼミの第3段階として、専門分野に関する対話や演習を行うことにより、専門性に対する理解度を向上させ、各自のキャリアの方向性を考える指針を与えることを目的とする。3年生前期はその後の就職活動の準備をする上できわめて重要な時期であり、教員および他の学生との活発な討論を通して、それぞれの所属学科に関連した業界および職種について理解を深め、各自の価値観の育成を図ると同時に、各自が目ざす職業へ向けて具体的な準備の方法を指導する。	
		キャリアゼミⅣ	キャリアゼミの最終段階として、専門科目の内容を具体的な職業と関連づけて理解し、各自の専門性を通して社会に貢献する方法を考えさせる。これにより、学生の社会への参加意識を育て、各自の将来設計に向かって行動するための意欲を育成する。また、就職活動を具体的に進めるために必要な知識やスキルを指導する。	
		インターンシップA	企業や行政機関など社会の中で学習の成果を試し、同時に労働の実際について体験的に学ぶ研修、いわゆるインターンシップを希望する学生のための演習科目である。仕事に臨む心構えや社会人としてのマナーなどを事前に指導し、レポート課題に合格した学生を対象に大学が研修先を紹介する。研修を通して実社会に対する見聞を広め、各自の進路選択に役立てることが目的である。	

教養分野科目 キャリア形成	インターンシップ B	インターンシップを希望する学生のための演習科目である。「インターンシップ A」との違いは、学生各自の専門性や学科の事情に添って研修を行う点にある。仕事に臨む心構えや社会人としてのマナーなどを事前に指導することは同様であるが、より専門性に基づいた指導が行われる。研修先は大学が紹介する場合と、教員の指導の下で学生自らが受け入れ企業に直接コンタクトをとる場合とがある。研修を通して実社会に対する見聞を広め、各自の進路選択に役立てることが目的である。	
	地域共生学	地域社会で顕著な活躍をされている方々を客員教授に迎え、さらに地域貢献において特徴ある活動を行っている本学教員も教壇に立つ。それぞれの立場および活動事例を通して、地域の産業・経済、企業や工業技術、地域文化などについて学ぶとともに、地域社会との関わり方、海外と地域との関係、あるいは社会人として必要な教養や責任感、倫理観、職業観、常識とはどのようなものかを考え、理解を深める。	
	テクニカルライティング	自然科学の基礎知識から、具体的課題を受講生各人が自ら選定し、自ら解を見つけ出すべく自己学習を行い、その結果をレポートとしてまとめ上げることは、大学教育の基本的な要素であり、同時に重要なキャリア形成教育の一環でもある。本授業は、その準備教育として科学/技術レポートの書き方の基本を学生が身につけることを目的としている。そのために、授業はレポート作成練習を中心とした演習形式の授業とし、レポート作成のルールと基本スキルを短期間に修得するための科目である。	
	プレゼンテーション	科学者は、自ら選定したもしくは他から与えられた解決すべき課題について、学習と研究により解決策を探求し、結果をレポートとしてまとめ上げるだけでは不十分であり、その内容について他者に正確に説明できる能力も必須である。本授業は、学生がこの説明能力とプレゼンテーション力の基本を身につけることを目的としている。そのために、授業はプレゼンテーション練習を中心とした演習形式の授業とし、プレゼンテーションの基本スキルを短期間に修得するための科目である。	
	課題研究	科学/技術レポートとしてまとめ上げるための基本スキルの修得授業であったテクニカルライティング、また、他者へ正確に説明するための基本的スキルの習得授業であったプレゼンテーションを受講した後、これら基本スキルの実践の場として受講生自らが選定した具体的課題を対象に、受講生自らがより深く課題に取り組み、創造力の育成を目的とした課題研究を行う授業である。そのために、授業は自由研究方式とし、最後に実施内容・結果についてまとめ、報告書として提出し、プレゼンテーションにより評価を受ける演習科目である。	
	コンピュータリテラシ	高度情報化社会においては、あらゆる場面で情報技術を利用する機会がある。一方で、情報技術は社会に多大な影響を与え、その利用に関する課題が露呈している。この科目では、コンピュータやネットワークの仕組みを理解し、ソフトウェア利用技術を習得すると共に、情報技術が社会に与える影響について検討することで、高度情報化社会で求められる、情報の利活用に関する倫理観の養成を目的としている。授業においては、紙媒体の補助教材に加え、マルチメディア教材を併用し、情報技術やその周辺に関する話題を身近なものにするよう工夫する。	
	科学基礎	大学における数学科目、特に「微分積分学 I」への移行を円滑にするために、高校数学の「数学 I」から「数学 II」までの内容を中心に取り扱う。この科目では、講義形式並びに演習形式を併用し、大学における専門科目を理解するための基礎の習得及び学習意欲の向上を目的としている。具体的な内容は、文字式の計算、式の展開・因数分解、分式及び無理式の計算、剰余定理・因数定理、1次方程式・2次方程式、図形と方程式、1次関数と2次関数、無理関数、分数関数、三角比、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。	

教養分野科目	科学基礎	基礎数学 B	大学における数学科目、特に「微分積分学Ⅰ」への移行を円滑にするために、高校数学「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に扱う。この科目では、講義形式並びに演習形式を併用し、大学における専門科目を理解するための基礎の習得及び学習意欲の向上を目的としている。具体的な内容は、1次関数と2次関数、無理関数、分数関数、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。特に、「微分積分学Ⅰ」への接続を踏まえ、関数の概念及びグラフの作成等、関数の形状を表現することに重点を置く。	
		基礎数学 AB	大学における数学科目、特に「微分積分学Ⅰ」への移行を円滑にするために、高校数学の「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に扱う。この科目は、「数学基礎A」の内容に対する理解が十分である受講生、及び、「数学基礎B」において学習進度に遅れが生じた受講生を対象に、両科目を補完する内容と位置付けている。具体的な内容としては、2次関数、無理関数、分数関数、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。可能な限り少人数のクラスを編成し、講義形式並びに演習形式を併用する一方で、より多くの問題に取り組む。	
		微分積分学	自然や社会において全体構造の理解を進める上で、微分法及び積分法は重要な役割を担う。この科目では、高校「数学Ⅱ」から「数学Ⅲ」までを基礎とし、1変数に関する微分法・積分法の理解、及びその応用の習得を目的としている。具体的な内容としては、関数の定義、様々な関数、関数の極限と連続性、微分係数と導関数の導入、関数の微分法、微分法の応用、不定積分、部分積分法、定積分、定積分の応用を取り扱う。また、「基礎統計学」への接続を考慮し、指数関数や正規分布等、様々な確率分布関数を提示し、これらの関数の微分・積分についても説明する。	
		科学リテラシ	科学リテラシは、個人の意思決定及び社会問題への参与、並びに経済の生産性向上に必要な科学的概念・手法に対する理解である。この科目では、社会や大勢に扇動されない客観的思考の意義を理解し、客観的思考力を養成することを目的としている。具体的な内容としては、日常生活で体験する物事に対する問題提起から問題解決、自然現象の説明や予測、メディア発の情報に対する客観的な分析、これらに関する他者とのコミュニケーションを取り扱う。実施にあたっては、多方面の事例を取り上げると共に、受講生同士が意見を交わす、グループ討論の場を積極的に設ける。  (オムニバス方式／全15回) (4 谷内 眞之助／2回) 5. 「まなび」と「まねび」 1-創造に至る日本的発想の原点- 6. 「まなび」と「まねび」 2-創造に至る日本的発想の原点- (5 芦田 浩之／2回) 12. 「視覚」の秘密 1-私たちの眼は何をしているのか- 13. 「視覚」の秘密 2-私たちの眼は何をしているのか- (11 鈴木 晋一郎／1回) 7. 窒素循環と地球環境 (15 蔵田 浩之／1回) 11. 化学物質は「怖い」もの？ (18 山西 輝也／2回) 2. 情報とは何か 3. コンピュータの進歩と社会 (19 杉原 一臣／5回) 1. ガイダンス 8. まとめ1 9. だまされない統計の読み方 10. データマイニング入門：買い物の中身から法則を発見する 15. まとめ2 (25 吉村 喜信／1回) 4. 木の魅力について (38 野尻 (藤本) 奈央子／1回) 14. スポーツとユニバーサルデザイン	オムニバス方式
		基礎物理学	物理学は、数学等と共に自然科学の学問を理解する上で最も基礎となる科目である。この科目では、高等学校で物理を選択しなかった、あるいは、物理に対する理解が不十分な学生を対象に、物理の基本的な考え方、ものの見方を習得することを目的としている。具体的な内容としては、力と運動、運動の法則、力学的エネルギー等、高等学校「物理Ⅰ」の力学を中心に取扱い、実施にあたっては、デモンストレーション等、対象学生の受講に配慮している。また、各学科における物理学系専門科目への接続を意識した教科書選定を行うと共に、可能な範囲で少人数クラスを編成する。	

教養分野科目	科学基礎	基礎生物学	生物学は、生命現象を対象とする自然科学の一分野であり、「基礎生命科学」等と共に、人間が自然と調和した生活を営む上で重要な学問である。本科目では、生物を構成するDNA及び遺伝子の構造、細胞の構造及び機能、人間と環境の関わり、食物連鎖等を取り扱い、人間とそれを取り巻く環境の役割を理解することを目的としている。実施にあたっては、クラスサイズに留意すると共に、各学科の専門科目への接続意識したクラス編成を行う。また、本科目とは別に開講される「環境・情報倫理」との連携を意識し、受講生が環境に関する行動の指針を定める上で、参考となる情報を提示する。	
		基礎化学	我々の生活を支える物質の性質を理解するためには、化学に基づく視点が必要不可欠である。この科目では、高校までに学習してきた知識を固めると共に、原子・分子のレベルから、分子の集まりである複雑な系の挙動までを体系的に学ぶ。具体的な内容としては、物質の定義及び性質、物質の状態・構造、化学結合、分子と物質量、化学反応、酸と塩基、酸化と還元である。実施にあたっては、基礎知識の体系的把握を中心とする学科、応用面を重視する学科等、化学の専門的知識の必要性の程度に学科間で差があるため、教科書の選定及び教授法において、学科カリキュラムの特色を十分に考慮する。	
		基礎生命科学	生命科学は、生命現象を対象とする自然科学の一分野であり、「基礎生物学」等と共に、人間が自然と調和した生活を営む上で重要な学問である。現代社会は「生命」領域を抜きに語ることはできない。この科目では、生命現象を科学的に理解することを目的としている。具体的な内容としては、生命の定義、遺伝子の構造、細胞の働き、遺伝子組み換え技術の原理・応用を取り扱う。また、生活習慣と健康、寿命と老化、環境汚染等、世間で広く認知されている関連事例を多数取り上げることにより、受講生が生命科学の現状を認識し、その展望を熟思する機会を適宜設ける。	
		基礎統計学	我々の身の周りには様々な情報が溢れている。数値データはそういった情報の1つであるが、データに内在する特徴を見出すためには、的確にデータを集計し、処理する方法を備えておく必要がある。この科目では、数値データから重要な情報を取り出すための考え方及び統計手法を習得することを目的としている。具体的な内容としては、統計の意義、統計図表の特徴、統計指標の算出、回帰と相関、確率と確率分布、様々な確率分布、統計的推測、統計的検定を対象とする。また、各学科の専門科目に役立つ統計手法のみならず、情報化社会における数値情報の活用方法についても検討する。	
		統計学演習	「統計学基礎」において、統計指標の算出、統計的推定及び統計的検定等、統計に関する基礎的な知識を一通り習得している。この科目では、実践的な統計的手法の演習を通じて、「標本」という部分的情報から「母集団」という全体の特徴を推測するという、「推測統計」の考え方を理解することを目的としている。具体的な内容としては、度数分布表の作成、単回帰分析、相関分析、母集団平均及び分散の区間推定、母集団平均及び分散の検定、適合度検定を取り扱う。実施にあたっては、データそのものに対する関心を高めるため、いずれの演習においてもデータの収集から着手する。また、結果に対する考察をグループで実施する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(環境情報学部 デザイン学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 分 野 科 目	学 部 共 通 科 目	環境情報学概論	<p>21世紀を迎えた先進国では、前世紀的な大量生産・大量消費を前提とした工業社会の前提が徐々に崩れつつある。その一方で、少子化・高齢化・エネルギー問題・地球環境問題・食糧問題などの深刻化により、持続可能な社会の実現に向けて、「環境」および「情報」分野に端を発したイノベーションとものづくり至上主義でない総合的な視点による問題解決が期待されている。本科目では、「環境」と「情報」の視点から社会の現状を認識し、環境情報学部で学ぶ学問の見取り図を理解するための入門用科目である。同学部に所属する教員がリレー形式で講義し、受講生は講義で展開される専門性の広がりや個別の問題から、環境情報学の概念を理解し、知的刺激を受けると同時に、各自の専門性の選択に向けた示唆を受ける機会とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 川島洋一/2回) 「環境情報学による21世紀型社会の価値づくりに向けて」「歴史的環境と持続可能な生活環境」</p> <p>(2 池田岳史/1回) 「環境デザインと情報デザイン」</p> <p>(6 山内 勉/1回) 「サステイナブルデザインの思考」</p> <p>(12 田中智一/2回) 「資源リサイクルと廃棄物処理」</p> <p>(13 草桶秀夫/2回) 「生物多様性から見る地球環境問題」「生物資源の有効利用」</p> <p>(14 廣瀬重雄/1回) 「生分解性プラスチックの応用可能性」</p> <p>(16 松岡博幸/2回) 「環境負荷と環境コスト」</p> <p>(28 辰巳佳次/1回) 「環境計測と環境保全」</p> <p>(29 原道寛准/1回) 「太陽エネルギーの有効利用と太陽光発電のこれから」</p> <p>(30 笠井利浩/1回) 「ライフサイクルアセスメントによる持続可能な社会の実現 (2回)」</p> <p>(33 藤原 明広/1回) 「ユビキタスシステムによる新しい社会情報ネットワーク」</p>	オムニバス方式
		環境・情報倫理	<p>近年、環境保存型社会への移行を狙いとして、生活様式や企業活動の形態を改める規範「環境倫理」が示されている。一方で、情報化社会における情報の扱い方に関しても、同様の規範「情報倫理」が存在している。持続可能な社会の実現に向けては、これらの倫理意識を高めることが強く要請されている。この科目では、持続可能な社会の形成に求められる2つの倫理観について学び、これらの倫理観の向上を目指す。実施にあたっては、倫理観が問われる事例を提示し、倫理観の欠如が身近な状況で起こり得ることを説明する他、より良い社会を形成するための議論を展開する。</p>	
		知的財産概論Ⅰ	<p>知的財産は、人間の創造的活動により生み出される無形の産物であり、我々の周囲にも多く存在している。一方で、社会にはこの種の無形資産を保護する法律があり、知的財産の創造において、ルールに対する正しい認識は必要不可欠である。この科目では、知的財産及びその周辺の知識を習得し、知的財産活動を日常的に実践する姿勢を確立することを目的としている。具体的な内容としては、知的財産及び知的財産権の定義、知的財産保護の意義、特許権、実用新案権を取り扱う。また、知的財産の存在を実感できるよう、国内外の事例を多数取り上げる。</p>	
		知的財産概論Ⅱ	<p>知的財産は、人間の創造的活動により生み出される無形の産物である。この科目は、「知的財産概論Ⅰ」に引き続き、無形資産の1つである知的財産に対する正しい認識を持つことを目的としている。具体的な内容としては、意匠権、商標権、著作権、著作者に類似する権利、その他の知的財産権を扱う。一方、知的財産に関するルールは各国において明文化されているものの、「産業保護」と「自由な利用」という2つの要請において衝突が後を絶たず、様々な場面で争われている。こういった論争の軌跡を受講生に示すことで、知的財産の保護の在り方を適宜議論する。</p>	

学部 共通科目	社会調査論	社会における人々の意識や行動の実態を把握するために、インタビューやアンケート等による調査が頻繁に行われている。この科目では、社会調査の意義と共に、様々な調査の方法を習得することを目的としている。具体的な内容としては、社会調査の定義、統計的調査の方法、標本抽出の方法、社会調査の実例、社会調査の問題点を対象とする。社会調査は、理系・文系を問わず、様々な分野・場面において用いられていることから幅広く応用が可能であり、各学科の専門に応じたテーマを取り上げたり、コンピュータを用いて調査結果を集計したりする等、実践を見据えた社会調査の演習を行う。	
	環境情報学演習基礎	PBL (Project Based Learning) は、学生が主体的にプロジェクトを遂行し、その経験から気付きや学びを得る教育手法のことである。この科目では、初めてPBLに取り組む学生を対象にPBLについて解説するとともに、身のまわりにある課題の解決を目標に数名のチームでプロジェクトを遂行し、プロジェクトマネジメントの基本を身につける。さらに、プレゼンテーション能力向上のため、得られた成果をPBL発表会において発表する。	共同
	環境情報学演習Ⅰ	この科目では、環境情報学演習基礎で得た知識を基に、自ら選択した環境もしくは情報に関連する課題の解決を目指し、数名のチームでプロジェクトを遂行する。これらの過程を通して、プロジェクトの基礎知識（プロセスや問題解決手法）、プロジェクトの遂行に必要な行動・思考特性（特にチームワークやステークホルダーと合意しながらの作業）を修得する。さらに、第三者でも分かりやすい報告書の書き方およびプレゼンテーション能力を身につける。	共同
	環境情報学演習Ⅱ	この科目では、環境もしくは情報に関連して教員がRFP (Request For Proposal) を提示した中から学生が案件を選び、学生自身の手でプロジェクトを実施していく。これにより環境情報学演習Ⅰで学んだことを「知っている」レベルから「実行できる」レベルにステップアップさせる。さらに、プロジェクト終了後にPBL遂行中に発生した問題やそれらへの対策、およびその効果について事後分析を行い、学科もしくは学部の関係者に向けて発表する。	共同
	環境情報学演習Ⅲ	この科目では、環境情報学演習Ⅱで取り組んだプロジェクトを継続し、遂行過程で発生する様々な問題・課題を深く掘り下げながら、プロジェクト完了に向けてチームによるプロジェクト運営を行う。これにより、これまでのプロジェクト遂行において自ら不足を感じた個人レベルの技術やヒューマンスキル、コミュニケーション能力の向上を目指すとともに、課題解決のための調査力および洞察力を高める。	共同
専門 基礎科目	造形デザイン実習Ⅰ	1年生に対し、造形デザインの基礎技法を道具の使い方を含めて指導する実習を行う。まず、観察力と描写力を養成するための鉛筆デッサンからはじめる。形態の正確な描写、陰影やテクスチャーなどを無彩色で表現する練習、およびそのために必要になる科学的な観察方法を指導する。次に、製図道具の基本的な使い方を学びながら三面図の製図実習を行い、製図や描写の基本となる一点および二点透視図の作図方法を指導する。	共同
	造形デザイン実習Ⅱ	Iに引き続き、基本的な描写と構成能力養成のための実習を行う。Iとの違いは、IIでは着色を伴う着彩デッサンおよび淡彩スケッチの実習を通して色彩に対する観察能力を養成し、着彩の基本的技術を学ぶことにある。次に、平面上に描いた単純な幾何学図形に着彩する色彩構成の練習を行い、色彩に対する感覚を養成し、色彩の組み合わせや関係性による効果を学習する。実習と並行して色彩学の基礎知識を講義し、これらの実習を通じて色彩の原理を学び、色彩学の基礎的知識を習得させる。	共同
	デジタル表現基礎	ベクターデータ編集ソフトであるIllustratorと、ビットマップ編集ソフトであるPhotoshopを学ぶ授業である。これらのソフトウェアはデザイン業務に必須であり、操作技術の習得によりポスターやロゴのほかに、テクスチャの作成などが可能となる。授業では、基礎技術の習得に限らず、ベジェ曲線、レイヤー等の関連技術の概念についての説明も交えながら演習を行い、ソフトウェア単体での基本的な操作の習得と、複数のソフトウェアを組み合わせることで表現の幅を広げる方法を指導する。	

専門分野科目	専門基礎科目	デザイン学概論	<p>デザインの基礎知識およびデザイナーの仕事の紹介を通じて、新入生にデザインという創造行為の見取図を示すためのオリエンテーション科目である。デザイン学科所属の複数の教員が、デザイン諸分野の概要をそれぞれの視点から解説すると同時に、自身のデザイン活動や研究活動の紹介を通じて、学習の基本的プラットフォームを提供する。全体を「デザインの再認識」「デザインの現場」の2つのテーマに分けて講義する。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(1 池田岳史/1回) 「サインとシンボル」  (2 川島洋一/1回) 「見えるものから見えないものへ」  (3 三浦英夫/1回) 「Primitive 原点を見つめ直すということ」  (4 谷内眞之助/1回) 「アート・クラフト・デザイン」  (7 吉野 剛/1回) 「ユニバーサルデザインの思考」  (8 木川剛志/1回) 「メディアミックスからクロスメディアへ」  (9 西尾浩一/1回) 「工学と感性の間に」  (10 近藤 晶/1回) 「コミュニケーションデザインと社会」</p>	オムニバス方式
		作家作品論	<p>優れたデザイン作品や製品を知り、その成り立ちや作者の意図を感じ取ることを目的とした講義である。デザイン学概論に続く初学者用科目として、デザイナーへの歩みの手助けとなり、デザインへの意識向上を目指すことを意図している。デザイン学科全教員の経験と価値観を通して、ジャンルを問わず様々なデザイン事例を紹介し解説する。理論や技法を教えることとは違い、学生各自の創作意欲や発展的活動に結びつくことを目的とする挑戦的な授業である。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(1 池田岳史/1回) 「水戸岡鋭治」  (2 川島洋一/1回) 「中村勇吾」  (3 三浦英夫/1回) 「田中一光とレイモン・サビニャック」  (4 谷内眞之助/1回) 「ミケランジェロと狩野派」  (7 吉野 剛/1回) 「アントニオ・ガウディ」  (8 木川剛志/1回) 「ミシェル・ゴンドリー」  (9 西尾浩一/1回) 「吉岡徳仁」  (10 近藤 晶/1回) 「亀倉雄策」</p>	オムニバス方式
		造形デザイン実習Ⅲ	<p>自らの身体と手を動かし、数人のチームで木工作品を制作体験する。2×4木材を利用し、複数の人間が座れるベンチを制作する。一般的なベンチの既成概念を払拭し、人間同士の関係性や座るといふ行為の意味を追求する。くり返しデザインをスタディし、実際に製作するまでの、すべての制作過程を体験的に学習する。ここで意図するのは自由で高度な手技による制作を本旨とするクラフト教育ではなく、2×4の規格材を使用し、そのモジュールの制約の中で創造性を発揮することである。これにより建築やプロダクトデザインのように工学的な発想が要求されるデザインの構想力を養成する。</p>	共同
		環境デザイン実習Ⅰ	<p>建築やインテリアなどの環境デザインを志望する学生のための、最も基礎的な設計製図実習である。単純な条件の戸建住宅の自由設計課題を通じて、住宅計画の基本、および建築製図の基礎を習得させる。建築計画・構造・設備・デザイン・模型製作など、あらゆる建築設計の基礎的要素を体験的に学ぶことを目的とする。これにより、その後の専門科目の学習に先立って建築学の全体像を把握させ、学習効果を高めることを意図している。製図にあたっては、基本技術としての鉛筆による手描きを練習する。</p>	
		プロダクトデザイン実習Ⅰ	<p>プロダクトデザインを志望する学生のための、最も基礎的な立体造形実習である。プロダクトデザインの基礎となる立体造形力を身につけるため、自然界の美の成り立ちを観察・認識したり、身の回りのモノから用の美の必然性などを習得させる。自然美と人工美の両面への意識を大切にしながら、立体造形の幅広さと難しさを体験する。各課題に異なった素材を使用し、素材本来の特徴に慣れ親しみ、今後のステップアップへの足掛かりとなることを意図している。さらに、前期で学んだ基礎デザイン課題を反復することにより、専門的分野への基礎固めの徹底を目指す。</p>	共同
グラフィックデザイン実習	<p>情報をグラフィカルに伝達するために必要となる技術としての色彩の組み合わせや、レイアウトによる視覚効果、文字や写真の美しい扱いなどが自在にできることは、Webや映像表現の基礎ともなる。造形デザイン実習Ⅰ、Ⅱで習得した技術及びデザインに関連する美的感覚をより専門性の高いものへ応用するため、主にアナログ的手法による課題制作を行うことでPCなどのツールに頼った発想ではない手を動かす発想・制作に慣れる。また視覚情報デザインコースで扱う平面のメディアに特化した技術へと発展させる。</p>			

専門分野科目	専門基礎科目	住環境計画演習	環境デザイン実習Iと並行して行う演習科目である。住宅設計の基本となるモジュールシステム、動線計画、単位空間のプランニング手法、デザイン手法などの重要事項を個別に取り上げ、知識を実際に使える状態にするための演習課題を与える。それを通して、基本的スキルと基本的知識を習得させることを目的とする。環境デザイン実習Iの課題の進行に合わせて、適切な時期に適切な内容の課題を与え、この演習で習得した知識と技術が、各自の住宅設計作品においてただちに应用できるよう配慮する。	
		CAD演習A	プロダクトデザインを志望する学生を対象に、CADソフトの操作方法と作業フローを指導する演習科目である。まず製図ツールとして、実務的にプロダクトデザインの現場で用いられるソフトウェア(Rhinoceros)を用いて基本図面が作図できる技術を習得させることからはじめ、次に3Dによるモデリング技法の基礎を習得させることを目標とする。また、ラピッドプロトタイピングに対応するための造型データ作成のスキルを習得する。	
		造形技法I	プロダクトデザイン実習Iと並行して開講される演習科目。デザインプロセスにおいて効果的にスタディを進めるためのモデリングの技法を中心に指導する。スキルの高いデザイナーの実例を紹介し、演習課題を通して定着させることを目標とする。デザイン実習の円滑な進行を助け、必要となる個別の技法や知識を同時並行的に指導する教科である。全8回。	
		造形技法II	デザインの基礎となるデザインスケッチの方法や製図の方法を具体的に指導し、演習課題を通して利用可能な能力として定着させることを目標とする。デザイン実習の円滑な進行を助けることを目的に、必要となる個別の技法や知識を指導する教科である。また、手書きによる製図手順からCADを用いた製図法との差異を学習し、実務的な製図スキルを養う。	
		情報デザイン演習	現代社会においては様々な情報がもたらされるが、取得した情報を有効に活用するためには、情報の取捨選択、整理といった技術が必要となる。本授業ではまず、情報の収集、分類から日常利用する情報の扱いについて学ぶ。更に円滑な情報伝達を促すプレゼンテーション、Webなど様々なコンテンツの制作において必須条件である情報の構造について、分類と図化、組織化と図化、ツリー型、ハイパーテキスト型等基本的な情報の構造作成、ユーザ導線の図化、情報シークエンスの作成等を通じて学ぶことを目的とする。	
		基礎デザイン論	すべての専門科目の基礎となる、デザインの基本的な用語や概念の解説を行う初学者用科目である。基本グリッドとレイアウト、タイポグラフィと文字情報、寸法とモジュール、デザイナーの職能、デザイン諸ジャンルの意味、製図の基礎などを指導することにより、工学と芸術の融合をみざすデザイン行為の全体像を正しく理解させることを目的とする。	
		生活空間論	建築計画学の基本として、住宅計画の基礎知識を講義し、理論的基盤を形成することを目的とする。身体寸法とモジュールシステム、動線の考え方と機能計画、住宅諸室の意味と生活環境などの建築計画学の基本に加え、現代における家族像や生活スタイルの変化、日本の名作住宅の事例などを解説する。また、集合住宅の基本も講義する。現代の住宅問題にいかんして取り組むかというテーマに対して、現代社会の諸相の理解の上に、学生の柔軟な発想を喚起することを目標とする。	
		構造設計	建築物などの一般構造を学び、構造設計のための基礎知識を指導する講義である。構造物の構成と仕組みを、材料や構造技術との関係において総合的に理解するとともに、各部の名称や実際の構法を学ぶ。また、力学的な視点からそれらの合理性を検討することによって、さらに理解を深める。これにより建築だけでなく、さまざまな製品や種々の空間・場のデザインをするにあたって、構造的なセンスを身につけたデザイナーとして活躍できる人材を養う。	

専門分野科目	専門基礎科目	建 築 史	日本と西洋の建築史をめぐって古代から中世、近世までの通史を東西の時代背景や芸術思想、地域風土などの関わりから講義する。特にこの講義では、日本と西洋の建築の造形や意匠、あるいはそれらを生み出した技術構法やそれらの相違、類似性などを把握するとともに、日本と西洋の対比的特徴について理解を深める。また本講義は専門科目の中でも基礎的な教養科目として位置付けられるもので、建築を学ぶ面白さや難しさ、あるいは建築の奥深さなどを体感でき、建築に対する興味を抱くことも目的としている。	
		メディア工学概論	メディア技術、通信技術の向上に伴って社会は高度情報化している。このような情報技術の発展とともに、その取扱いにも細心の注意が必要となっている。本授業では、このような社会の変化をもたらした技術の発展史を鳥瞰しながら、コミュニケーションを成立させる情報機器、情報デザインについての基礎を学ぶとともに、情報化社会における情報の意義、役割について理解を深め、情報公開、保護、責任といった情報の社会的な取り扱い方法についても議論する。	
		環境デザイン実習Ⅱ	戸建住宅を扱った環境デザイン実習Ⅰに引き続き、基礎的な設計製図実習を行う。Ⅱでは単純な条件の集合住宅の自由設計課題を通じて、住宅設計の基本と中規模の建築物の設計方法、および建築製図の基礎を習得させる。建築計画・構造・設備・デザイン・透視図など、あらゆる建築設計の基礎的要素を体験的に学ぶことを目的とする。さらに、集合住宅計画の現代的課題を学び、現代社会における家族像や新しい生活スタイルなどを考慮したコンセプトワークの基礎を学ぶ。	
		プロダクトデザイン実習Ⅱ	プロダクトデザイン実習Ⅰに引き続き、プロダクトのデザイン課題を行う。まずはじめに、即物的テーマを与え日常的に目にして品物の機能についてあらためて考察し、本来あるべき姿を検討する。次に、コンセプト構築を主とした課題へと移行し新しいモノのあり方を発想する。イメージを形態に置き換えるにあたり、要求されるデザイン技術や製造方法についての基本知識を与えながら、製品をデザインに対するスキルを養う。さらに、正確な製図技術、レンダリング、CGの技法を用いて表現する方法を学ぶ。	共同
		視覚情報デザイン実習Ⅰ	視覚を通じた情報伝達技術の習得を目的に、グラフィックデザイン実習で学んだ技術をより精緻化し、PC及び視覚情報を扱う各種ソフトウェアを使用した高い完成度の作品制作を目指す。具体的には、50音を1セットとして考えたタイポグラフィ、数コマではなく秒単位で考える映像といった要素を組織化して発想する課題、情報として伝えることが難しい感覚的表現や概念的表現にも徐々に触れることで、視覚的に表現できる情報の幅を広げる。	
		Web デ ザ イ ン Ⅰ	インターネットの普及により、Webページは情報発信のメディアとして多くのユーザに利用される双方向性の高いコミュニケーションツールとなった。本授業では、HTML、CSS (Cascading Style Sheet)、JavaScript等Webページを構成する基本技術、Webページ制作の際のユーザの観点に立ってのプランニング、コーディング及びその種類。またWebサイトの運用管理、Webページを通じた情報公開とコミュニケーションの技法について実習および一部講義を通じて習得することを目的とする。	
		プログラミング実習Ⅰ	C言語を題材に、プログラミングの考え方、基本的なプログラムの書き方の習得を目指し、実習を行う。ここでは、プログラミングが全く初めてである学生を念頭におき授業を実施し、プログラム処理系の開発環境の使い方から始め、プログラム概念の獲得のためにプログラミングの処理手順の理解、そして簡単な命令を組み合わせたプログラム作成を目的とする。そのため、プログラミングの基本となる3つの制御構造である逐次と、繰り返し、反復の文法と処理の流れについて解説する。そして、与えられた課題をC言語で作成し、C言語の基本スキルを身につけることを目指す。	
		写 真 演 習	デザインの現場において、作品写真の質と表現は作品に対する印象に直結するきわめて重要な要素であるが、デジタルカメラの普及とカメラの自動化、携帯電話へのカメラ機能搭載などにより写真撮影行為が身近になった一方で、カメラの機構や撮影の原理といった基本的な知識や撮影技術の習得がないがしろにされている現状がある。この授業では、絞りとシャッタースピード、焦点距離との関係、構図設定なども含め、写真撮影の基本技術を学ぶことで写真品質の向上を目指す。	

専門分野科目	専門基礎科目	作品研究演習	デザインは、本や雑誌などの二次情報や実習室における作品制作から学ぶだけでなく、本物の作品を見学し実際に体験することで、たしかかな実感を伴って理解すべき総合的なものづくり学といえる。ここでは、デザインの名作や作家によるデザイン展を求めて美術館・博物館・高級家具店・生活雑貨店などを見学するだけでなく、建築・インテリア・ディスプレイ・街並みなどの環境を含めた見学会を行う。大学における事前授業の後に見学会を実施し、見学後のレポートを含めた野外演習科目である。	共同、集中
		CAD演習B	環境デザインを学ぶ学生を主な対象に、CADソフトの基本的操作方法を指導する演習科目である。2Dの製図ツールとして、実際に空間や建築の基本図面が作図できる程度の技術を習得させることからはじめ、次に3Dによるモデリング技法の基礎を習得させることを目的とする。また、以降の各実習で、各自がデザインシミュレーションのツールとして活用し、プレゼンテーションにも効果的に活用することも目標とする。使用ソフトは、VectorworksとShadeを基本とする。	
		家具制作演習	木工家具を製作する具体的な手順とスキルを学ぶための演習科目である。図面の読み方、材料の準備と取り扱い方、木工機械および工具類の使い方、安全対策などを指導した後、個別の技法の指導を受けながら学生が演習を行い、最終的に家具の習作を完成させるまでの一通りのプロセスを体験的に学ぶ。	
		作品研究	デザインの名作といわれる作品を専門的見地から分析する。単に造形的に美しいだけでなく、社会的・技術的・商業的・人間学的など、さまざまな観点から名作を成立させた優れた発想と解決策を分析し、学生各自の作品制作に生かすための視座を提供する。建築・インテリア、プロダクト、広告・グラフィック、WEB、パッケージ、インターフェースなど、幅広いジャンルの作品を扱う。複数の教員の指導により、作品を見る複眼的な視点を養うことにも留意する。 (オムニバス方式/全15回) (全員/3回)「ガイダンス」「新領域作品」「本学学生作品」 (2 川島洋一/2回)「現代建築作品」「インテリア作品」 (3 三浦英夫/2回)「プロダクト作品」「伝統工芸作品」 (7 吉野 剛/2回)「公共建築作品」「現代建築作品」 (8 木川剛志/2回)「映像作品」「インタラクティブ作品」 (9 西尾浩一/2回)「インターフェース作品」「プロダクト作品」 (10 近藤 晶/2回)「グラフィック作品」「WEB作品」	オムニバス方式
		デザイン材料	建築とプロダクトデザインを中心に、デザインにおいて多用される素材と材料の基本的知識について講義する。プラスチックの特性とその成形方法、金属材料の性質や加工と表面処理の基礎知識、建築とプロダクトに欠かせないガラスの性質と種類、日本の伝統的技術の代表例として漆、和紙、畳を取り上げる。各素材については、できるだけ具体的な製品サンプルや実施例を示して学生の理解を助け、デザインのイメージを誘発することを目標とする。	
		発想論	当授業は、デザインを工学的、論理的に行うための方法を知識として得るだけでなく、技法を学生が活用できるように演習を交える。ねらいは、社会に出てからの実践的活用であり、企画の方法論を絡めた内容を含んでいる。発想とは何かを知り、日常的発想と実務的発想の相違、発想の必要性と多種ある発想技法を学びつつ、各自が発想技法を身体知として体得することを目的としている。特に、古来よりわが国が得意とする「見立て」の発想技法に言及し、日本的な発想と西欧的な発想との相違についての考察を通じて、発想の根源を考え、各自の発想する力を育てて行く。	
		建築計画論	建築計画学の一般理論を講義する。規模の大きい公共的な施設の計画について、標準的な機能計画の手法や、建築の企画から設計・施工に至る全体的なプロセスの理解を促す。次に、各種建築物の個別の計画手法について、具体的な事例をあげながら解説する。また複合施設や現代的な現象であるビルディングタイプの変容についても言及し、今後の建築計画学のあり方についても展望する。	

専門分野科目	専門応用科目	構造力学 I	本授業では、はじめに、力、力の合成と分解、力の釣合いについて構造模型を使って視覚的に理解させる。次に、構造物、支点及び荷重のモデル化、構造物の安定・静定について講義し、具体例に理解させる。また、荷重に対応して静定構造物の支点に生じる反力を力の釣合い式から求める方法を説明する。具体例として単純梁、片持梁やその他の静定構造物の反力の求め方を例題、演習問題を通して学ぶことで、建築・土木分野における構造設計の基本となる力学の基本的な概念・用語・計算法を習得させる。	
		メディア情報技術 I	コンピュータグラフィックス (CG) 技術について、特に2次元視点から講述する。具体的には、アナログ画像の標本化、量子化といった画像デジタル化技術、デジタル化された2次元画像を様々な技法を用いて加工し、目的に合わせた画像に変換する画像濃淡変換やフィルタリング技術、またそれら画像からの情報抽出、更に入出力、画像符号化と圧縮、伝送や蓄積といったコンピュータ内部での処理に関しての知識習得を目的とする。	
		視覚情報デザイン実習 II	視覚情報デザインは、人と人、人と物、人と情報の間に生まれるコミュニケーションを生み出すものである。これまでに関連する実習において学んだ基礎的な表現手法をより実務に即したコミュニケーションを生み出すための知識・技術へと昇華させるため、実務的なデザインの現場を想定した課題を題材に、デザインに求められている役割、質を理解し、表現を行う制作の段階へと進むことで、発想からより再現性の高い表現へのプロセスを学ぶ。	
		Web デザイン II	Webページは情報発信メディアとして多くのユーザに利用され、コミュニケーションツールとして欠かせないものとなっている。特に近年は動的でインタラクティブ性が高いコンテンツ、多種に亘る端末機器類の増加に伴い、形式や形状がフレキシブルに変化することで、それらの機器、画面に適應することができるユーザインタフェースといったものが求められている。これらの新たな技術であるHTML5、CSS3、jQueryについて講述するとともに実習を通じてより高度なWebページ制作技術の習得を目的とする。	
		プログラミング実習 II	プログラミング実習Iに引き続き、C言語を用いたプログラミングの方法の習得を目指す。単なる知識だけにとどまらず、自らプログラムを作成する能力を身に付けることを考える。前期の「プログラミング実習I」に続く本実習では、関数の活用法を理解することを中心に、ポインタやライブラリ関数のようなより複雑なデータ構造を扱えることを目指す。そこで、まず関数の定義、その関数に適切に引数を与えて返り値を得ることができる、さらに関数の利用や作成にあたり、引数の参照渡しや配列や構造体を引数に取る場合を扱う。また、構造体を定義し、そのメンバに対して値を代入したり参照したりすることができることを目的とする。	
専門応用科目	デジタル表現技法	デザインコンテンツを効果的にプレゼンテーションするためには、関連するソフトウェア技術の習得が不可欠である。これらのソフトウェアは多機能になっており、より美しい表現が可能となる一方で、操作は複雑化している。本授業ではIllustrator、Photoshopといった関連ソフトウェアの図形描画やレイアウトの基本機能のみならず、様々なオプション機能を学ぶことで、作業の効率化、綿密なレイアウト、作品品質の向上を目指す。また、学生各自の作品における表現に添って、効果的なプレゼンテーションに向けた関連の各種ソフトウェアの有効な活用方法についても学ぶ。		
	インテリアデザイン論	人間の住環境を形成する上で、最も身近であり空間の質そのものに影響を与えるのがインテリアデザインである。本講義では、商環境インテリア計画を中心とし、発想や構想の基礎、人間工学的な寸法システム、家具・什器や照明計画、室内仕上材などの個別の要素の解説を行い、インテリアデザインのための基礎的知識を与えることを目的とする。実店舗の実測と作図を中心とする演習的な要素も含む。		
	デザイン史	現代社会の成立に直接影響を及ぼした19世紀から20世紀の建築およびデザインの歴史を概説する。産業革命以降のヨーロッパで、近代社会が形成されるにあたってなにが課題となり、生産手段や産業構造の変化を背景に建築家やデザイナーがいかにかその課題に取り組んだのかを学ぶ。最終的には、環境問題や情報化社会の到来などの現代的課題に対して、普遍的な視点からネットワークができる使命観の備わった建築家やデザイナーの資質を養成することを目標とする。		

専門分野科目	専門応用科目	プロダクトデザイン論	プロダクトデザインの基礎理論を教授する。人と物との関係性の原点に立ち返り、ものづくりの姿勢やプロダクトデザイナーの役割を問うことから始める。次に文化、環境、地域や教育とデザインの関係性を講義し、視野の広いデザイナーの育成を目指す。さらに、製品開発におけるデザインプロセス、商品企画、デザイン戦略などデザインの実際と人間工学やパッケージデザインの重要性まで、様々な観点からプロダクトデザインの役割と考え方の基本を解説する。	
		構造力学Ⅱ	構造力学Iを習得した上で、種々の荷重を受けて部材の内部に生じる応力の種類、求め方、表示方法について片持梁や単純梁等の静定構造物の例題を通して学ぶ。また、部材の応力度、ひずみ度、応力度とひずみ度の関係等についても言及して断面の性質を導き理解させる。さらに、断面の図心の求め方、断面二次モーメント、断面係数、断面二次半径等の断面諸量を概説し、各種断面の算定式を導く。断面の形状と部材の強さとの関係についても具体例にて説明する。	
		建築・土木材料学	材料の選択には要求される性質と各材料の特性の把握が必要となる。材料の基本的性質、一般的な使用方法についての基礎知識を中心に、部位と材料、機能と材料の関係について学ぶ。部位別の材料としては、屋根、外壁、内壁、天井、床に用いられる仕上げ材料や下地材料について、機能別材料としては、防水、防・耐火、断熱・保温、音響、接着・接合、保護・仕上げ材料を学ぶ。主要構造材料としては、木質系材料、セメント・コンクリート、鉄等の金属材料に関する知識を習得する。	
		メディア情報技術Ⅱ	コンピュータグラフィックス (CG) 技術について、特に3次元視点から講述する。具体的には、デジタルカメラを使用した撮影とコンピュータ上での画像編集を例に3次元CG座標系を含めたデジタルカメラモデルで3次元CGの概念をつかみ、3次元物体形状のコンピュータ上での表現、操作を伴うモデリング、モデリングされた情報を2次元画像に変換、表現するレンダリング、更に時間変化を伴う表現であるコンピュータアニメーション技術に関する知識習得を目的とする。	
		環境デザイン実習Ⅲ	本格的な建築設計実習を行う。美術館をはじめとする大規模な公共的な建築物の設計課題を通して、「環境デザイン実習Ⅱ」の成果の上に立ち、より本格的なコンセプトワークや機能計画、デザインなどを学ぶ。また、現代の高度情報化や環境問題を抱える社会にふさわしい建築のあり方を構想し、それを積極的に建築の課題としてとらえ、リアリティのある提案に結びつける姿勢を養成する。またコンピュータを用いた効果的なプレゼンテーション技術の向上を同時に目標とする。	共同
		プロダクトデザイン実習Ⅲ	プロダクトデザイン実習Ⅱに引き続き、より複雑で高度なデザイン課題に取り組む。製品を分解し構造への知識を深めるアッセンブリー図、デザインプロセスの基本となるサーベイや企画立案の手法、人の行為からのデザインのアプローチや人間工学に基づいた製品デザインなど、プロダクトデザイナーに欠くことのできない資質の習得を目的とする。さらに、最終成果物の特徴を的確に発表するプレゼンテーション力と他者の作品を批評する力を身につけ、総合的なデザイン力の向上を目指す。	共同
		コミュニケーションデザイン演習Ⅰ	デザイン業務に限らずビジネスシーンにおいても円滑な意思疎通を促すコミュニケーション能力の向上が求められている。写真や文字など視覚に訴えるビジュアルコミュニケーション、言葉や音楽など音声コミュニケーション、身振りや態度など感覚に訴えるバーバルコミュニケーションといった様々なコミュニケーション手法、技術について、演習を通じて確認しながら学ぶ。また、これらの手法を援用したアイデアの発想から表現をグループ演習において実践的に学ぶことを目的とする。	
		コミュニケーションデザイン演習Ⅱ	コミュニケーションにおいて重要なことは、伝えるべきことを、限られた時間とリソースの中で最も効率的に相手に伝えることである。情報量が多ければ多いほど、相手の理解が深まるわけではない。そのため、強調すべき部分の選択とその表現方法が重要なスキルとなる。たとえば、商品の良さを伝えるときには、その良さはなにか、相手は何を望んでいるのか、どうすれば効果的な伝達が可能かを理解した上での情報発信が必要となる。このようなプロデュース的観点を含んだプレゼンテーション手法を本科目で学ぶ。	

専門分野科目	専門応用科目	環境・プロダクトデザイン実習	環境デザイン実習Ⅰ～Ⅲ、またはプロダクトデザイン実習Ⅰ～Ⅲで学んだ内容を応用する課題を課す。人間のさまざまな行為の意味を追求し、それを助ける環境と製品のあり方を考察する。また、商業施設を題材にインテリアと店舗のサイン・ロゴ・家具・什器など、環境と製品をトータルにデザインする実習を行う。さらに、そこで試みた新しいコンセプトとデザインを、説得力のあるプレゼンテーションにより表現する方法を指導する。	共同
		メディアデザイン実習	デザイン実務の現場では、単独の製品のデザインばかりではなく、同一企業内の商品や同一ブランドとの統一感を意識しデザインするなど、複合的なデザイン思考が必要となる。また、エディトリアルやWebサイト、CI・VIではその統一感を計画的に制御することが求められるほか、映像では1つの作品中の表現を統一することが作品の質に大きな影響を与える。本授業ではそれらを意識しながら、複数のアイテム・要素の統一感を持たせたデザインを意識し、その計画からモックアップの制作まで一連の流れを習得する。	
		デザインプレゼンテーション	プレゼンテーションを学ぶことは、デザインの現場のみならず一般社会においても活用可能な技術を身につけることである。デジタル表現基礎、CAD演習、デジタル表現技法、などのコンピュータを用いた2D製図、3Dモデリング、グラフィック表現の基礎を学ぶ科目を土台とし、その応用として、より効果的なプレゼンテーションを実現する技術を身につける。前半では実習課題作品を中心とした各自のポートフォリオを作成し、後半ではスライドコンテンツを作成する。	共同
		映像デザイン	映像は、情報を視覚的に伝える最も効果的な手法であり、その役割と適用範囲はますます大きくなることが予想される。映像の実際の制作現場では、企画から撮影、ポストプロと制作過程は細かく分けられ分業化が進んでいる。しかし、どの過程に属するクリエイターにとってもプロセス全体を知ることが不可欠であり、制作を依頼する側においても全体像の理解が重要である。この授業では、映像制作のフロー、絵コンテ作成から撮影、編集、DVD制作までを行い、映像制作の全体過程を理解することを目的とする。	共同
		人間工学	人間工学に基づいた環境・製品デザインについて解説する。形態と機能を成立させるために必要不可欠な身体の物理的特性についての理解と、感性工学の視点から人間の振る舞いを考慮した設計要素を構築するための考え方を学ぶ。主観評価といった統計的データを利用した設計理論についても触れる。また、一般的な人間工学に加え、生態心理学や認知科学の知見を得ることで、ユニバーサルデザイン習得へとつながる基盤知識を学ぶ。	
		サステナブルデザイン論	現代におけるデザイン行為においては、人間の生活環境と自然環境との関係を理解することが、持続可能な社会形成には必要不可欠である。年齢、性別、国籍などの違いや身体障害の有無を超えて、あらゆる立場の人間が障壁を感じずに空間や製品、情報を利用しやすいように配慮したユニバーサルデザインの考え方、また、地球への環境負荷をできるだけ少なくし、自然環境との共生を考慮したエコデザインの考え方が求められている。デザイン能力の一つとして重要なこれらの基礎理論と具体的な技術、優れた事例などについて解説する。	共同
		コンストラクション・マネジメント	建築施工の講義に加え、積算の初歩も指導する。まずは施工の手順を理解し、基礎的知識を習得することが目的である。同時に日本の卓越した施工技術を可能にしている高度なマネジメント技術についても、具体例を示しながら解説し、施工技術者と設計監理者にとって必要な姿勢と倫理観とを養成することを目標とする。また積算の初歩を学び、コストコントロールの意識を養成する。	共同
		建築環境	建築環境工学は、建築の快適性と省エネルギーを考える上で不可欠の学問領域であり、建築学の基礎科目の一つである。本科目では、望ましい室内環境を形成するための温熱環境、空気環境、光環境および音環境の基礎について物理学と生理学の両方から学習し、建築計画に役立てることを目標とする。とくに、重要性が増している地球環境・都市環境との関わりについても検討する。また、建築士の学科試験に含まれる科目であることから、演習問題などを通して対応できるようにする。	

専門分野科目	専門応用科目	構造力学Ⅲ	構造力学Ⅱを習得した上で、片持梁系の静定ラーメンや単純梁系の静定ラーメンの応力の求め方、表し方を学ぶ。静定トラスについても節点法や切断法による応力の求め方、表し方を例題を通して理解させる。また、部材のたわみとたわみ角の基礎を理解させた上で、モールの定理の単純梁、片持梁への適用方法について例題にて理解させる。さらに、不静定構造の解法を学び、不静定次数の高い構造物のせん断力図や曲げモーメント図を描くことができるようにする。	
		構造デザイン	構造設計で学んだ知見を応用し、実際に構造計画を行うにあたって考慮すべき内容について学ぶ。機能性や安全性、経済性を満たすことを前提としながらも、オリジナリティの高いデザインや空間を可能にするために、構造技術をいかにして応用すべきかを、実際の優れた設計作品を事例にして、理想を現実化するために払われた努力やアイデアを検証する。困難な課題の克服事例を通して柔軟な構造的発想の可能性を学び、より深く構造技術を理解することを目的とする。	
		メディア工学	近年のデジタルメディアコンテンツは、多様な伝送手段を用いて流通している。本授業では放送をはじめとするメディア伝送技術の歴史、動画圧縮、コーデック等デジタル映像技術、ネットワークを通じた映像伝送技術を学ぶとともに、コンピュータネットワークを構成する各要素、LANの分類、トポロジーといった基礎技術を解説する。更に、具体的なLANの事例や最新の技術を基に、コンピュータネットワークの構築と管理、運用について、より深い情報通信ネットワークの理解を目的とする。	
		マーケティングⅠ	インターネットの普及も加え、多種多様なニーズや欲求、それをめぐる複雑多岐にわたる環境の中で存続・成長を目指す企業にとってマーケティングの役割はますます重要である。本科目では、現代企業にとってマーケティングがどのような役割と意義を持ち、いかに理解されるべきかについて学ぶ事を目的としている。具体的には、統合的マーケティングの視点から、意思決定プロセス、競争を構成する諸要素、意思決定分析に用いられる技術について、様々な事例を用いて実践的に説明を行う。講義を通じて、マーケティング戦略やアクション・プログラムを評価するために必要な知識・技術の修得を目指す。	
		デザイン研究	卒業研究に向けて、少人数のゼミ形式で専門的な内容の演習を行う。学生各自の主體的な課題設定により、作品制作や作品研究、フィールドワークなどを個人または少人数の学生チームで行い、教員が緊密に指導する。通常のデザイン実習では得られない独自性のある成果に導くことを目的とする。	共同
		ユーザインタフェース	人と人工物の関係性を軸にインターフェースの概念を解説する。人と機械との情報をやり取りするインタフェースデザインにおいては、高いユーザビリティを確保するためのデザイン手法を学ぶ必要がある。特にGUIを中心とした、スマートフォンやWebなどのインタフェースデザインについては、触覚フィードバックが得られないため、インタラクティブな表示による補完的機能を用いる技法を学ぶ。また、GUIは視覚情報に頼るため、色覚障害者に対する配慮についても触れる。終盤は、インタフェースの仕組みを解説しながらセンサーを用いた簡単なインタフェースモデルの設計演習に取り組む。	
		デザインマネジメント	現代のデザインに求められる社会性や機能性・経済性、現実的な問題や課題についての理解を深める。企業におけるマーケティングの活用や戦略的な製品開発のプロセス、成功した商品の事例、それらに関与する職種の役割などの紹介を通して、経済的価値を生むデザインおよびコンセプトワークの実践的方法論を教授する。	
		建築設備	快適な室内環境や都市環境を実現するため、空調設備・給排水衛生設備・電気設備などの建築設備について、総合的に学習し知識を習得する。また、建築設備の設計・施工の実務の流れと経験談に基づき、より現実的な建築計画に合わせた設備計画を構築する手法について習得する。さらに、地球環境を考えた上で、省エネルギーと省資源の観点から、将来的に建築設備はどうあるべきかを考究する。この講義では、建築設備の基礎的知識を幅広く理解し、設計・施工の技術を習得することを目的としている。	

専門分野科目	専門応用科目	鉄筋コンクリート構造	鉄筋コンクリートの構造的特徴、主要材料である鋼材やコンクリートの性質と許容応力度を理解する。鉄筋コンクリート構造計算規準の設計体系の基本としてRC骨組の構造計画、荷重、鉛直荷重による応力、水平荷重による応力、耐震設計法を学ぶ。また、曲げを受ける部材ある梁、圧縮と曲げを受ける部材である柱、曲げとせん断を受ける部材である梁・柱、基礎、床スラブ、階段、耐震壁などの各種部材、定着と継手の設計の基本的概念を学ぶ。	
		建築法規	建築物の設計・施工・改修・解体に至る一連の流れの中で、建築基準法・都市計画法・消防法・その他関連法規の知識を習得する。また、実例の紹介を含め、図解などを使用して分かり易く行い、演習問題を中心により実践形式な知識を習得し、卒業後の建築士の早期資格を取得することを目指している。この講義では、法規の概要に加えて、用語の定義や法令集の使用など、建築申請業務に必要な知識を総合的に身につけることを目的としている。	
		メディア論	コンピュータを使用したデジタルコンテンツの登場、インターネットの普及により、従来までなかった一個人による世界へ向けての情報発信が可能となっており、これらコンテンツを媒介するメディアは、我々の周りにいくつも存在している。このようなメディアが一体、何を生み出してきたのか、それを理解するにはこれらメディアの辿ってきた歴史的背景や文化の理解が不可欠である。本講義では近代以降から現代にいたるメディアデザインの動向を様々な作家、芸術運動を読み解きながら論じ、メディアデザインをより深く理解することを目的とする。	
		マーケティングⅡ	本科目では、マーケティング・リサーチについて、講義とケーススタディを通じて体系的な考察を行う。講義前半では、マーケティング・リサーチの方法論をテーマとし、マーケティング活動と消費者行動の分析や研究、マーケティング活動における戦略的有効性の質を向上させるための方法論に関する考察を行う。後半では、マーケティング・リサーチが個別戦略にどのように投影、活用されるかという問題に関する理解を深め、実際のマーケティング戦略において顕在化される諸プロセスを、ケーススタディを通じて模擬体験し、戦略的思考能力の向上を図る。	
		鋼構	鋼構造に関する基礎知識と構造設計法、耐震設計法の基礎的手法を習得する。荷重の種類とその算定方法、鋼の種類、構造用鋼材と建築構造用鋼材、許容応力度と鋼材の基準強度、接合法としての溶接接合、ボルト接合、高力ボルト接合の力学特性と許容力について学ぶ。また、軸方向力を受ける部材、曲げモーメントを受ける部材、曲げと軸方向力を受ける部材の変形と耐力、板要素の座屈と幅厚比を解説し、設計における考え方を概説する。	
全学共通科目	卒業研究	4年間の勉強の成果として、学生各自が主体的に所属研究室を選択し、各自の問題意識に基づいて自由に作品制作や研究を行う演習科目である。教員は研究室ごとのゼミや個別指導を通して学生の目標が効果的に達成できるよう指導する。成果は卒業制作作品または卒業論文として提出し、公開形式でプレゼンテーションすることが義務づけられる。	共同	